

平成 21 年度 教師海外研修
報告書
(派遣国：ガーナ共和国)

平成 23 年 3 月

独立行政法人 国際協力機構

筑波国際センター

筑波セ
JR
11-002

はじめに

独立行政法人国際協力機構（以下、「JICA」）は、国際理解教育・開発教育に関心のある小学校・中学校・高等学校・中等教育学校・特別支援学校に勤務する教員及び教育委員会の指導主事の方々を対象に、教師海外研修を実施しています。開発途上国で行われている様々な国際協力活動の現場を視察し関係者の話を聞くことにより、開発途上国の現状や開発途上国と日本との関係、国際協力への理解を深め、その経験を帰国後の授業実践に活かし、次代を担う児童・生徒の国際理解を促進し、国際協力に貢献する人材の育成に役立てていただくことを目的としています。

平成 21 年度は、茨城県内から 4 名の教員がガーナ共和国（以下、「ガーナ国」）を訪問し、技術協力プロジェクト、JICA ボランティアの活動現場や現地の小学校等を視察し関係者との意見交換を行いました。帰国後は、ガーナ国で得た経験、情報と知識をもとに、派遣前研修で学習した国際理解教育の手法を活かしながら、それぞれの学校現場において国際理解教育の授業を展開されました。

本報告書は、教師海外研修の 1 年間のプログラム内容をまとめたものであり、研修概要やガーナ国での視察内容のみならず、授業実践の様子や児童・生徒の反応なども盛り込まれております。この報告書を皆様が国際理解教育の現場で活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本研修にご尽力いただいた関係者に厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

独立行政法人 国際協力機構
筑波国際センター(JICA 筑波)
所長 佐藤 武明

目 次

関係地図

写真集

用語集

1. 教師海外研修概要

1.1 教師海外研修の目的	1
1.2 研修日程	1
1.3 研修参加者	1
1.4 海外研修（ガーナ国）同行者	1

2. 研修内容および実施成果

2.1 第一次派遣前研修	2
2.2 第二次派遣前研修	3
2.3 海外研修日程・研修訪問先	4
2.4 帰国報告会	7
2.5 実践報告会	8

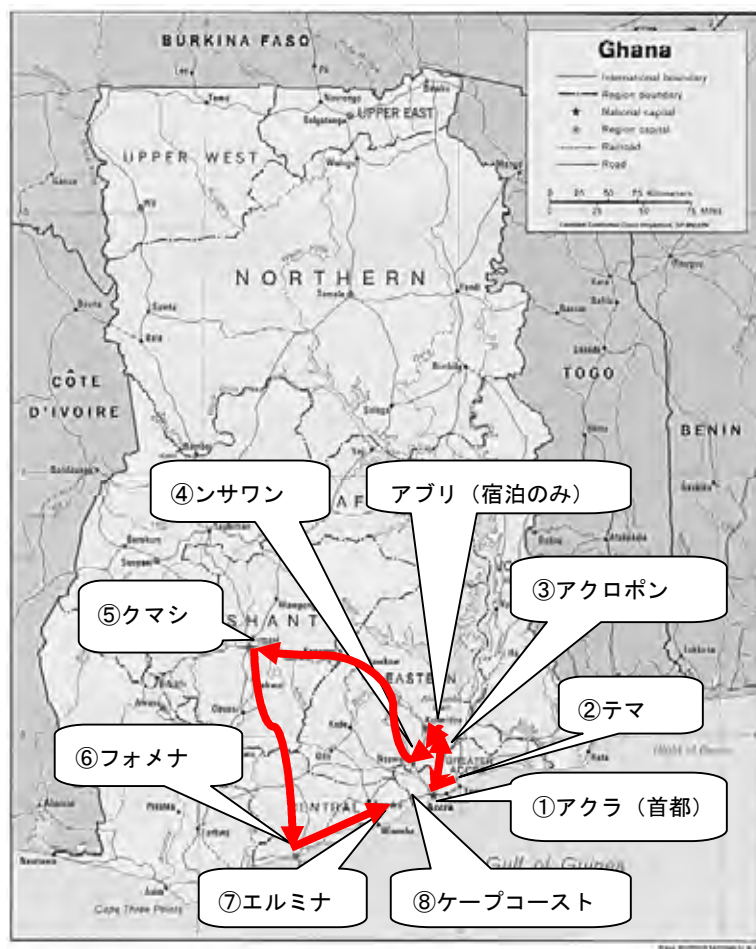
3. 教訓と提言

10

付属資料

資料1 帰国報告書	12
資料2 実践報告書	35
資料3 茨城新聞掲載記事	71
資料4 平成21年度「教師海外研修」募集要項	80
資料5 平成21年度「開発教育指導者研修」参加者数実績	88

関係地図(海外研修先移動地図)



派遣国（ガーナ国）概要

国名：（和文）ガーナ共和国 （英文） Republic of Ghana

首都：アクラ

面積：238,537 平方 Km（日本の約 3 分の 2）

人口：2,390 万人（2008 年：UNFPA）

民族：アカン族、ガ族、エベ族、ダゴンバ族、マンブルシ族など

言語：英語（公用語）

宗教：国民の約半数がキリスト教、イスラム教 15%、その他伝統的宗教

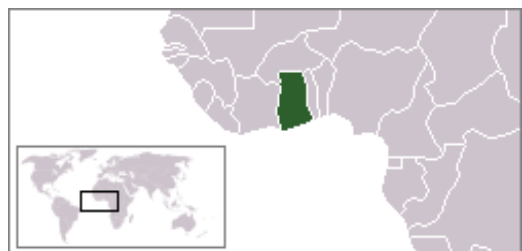
通貨：ガーナセディ（1 ドル＝約 1.45 ガーナセディ 2009 年 9 月現在）

略史：13 世紀から 16 世紀初期に現在のガーナ主要民族が西方より移住。15 世紀中頃からポルトガルなどのヨーロッパ人が渡米。金や象牙、奴隷などの貿易が行われる。

1873 年英国が保護領化し 1957 年に英国の自治領として独立。

気候：熱帯性気候で、気温は 3 月が最高となり 8 月は最も涼しい。雨期はおおむね 3 月から 9 月の間で、南西部を除き全般的に雨量は少ない。湿度は、北部地方以外は 80%前後である。

（出典：外務省 HP <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ghana/index.html>）



写真集



野口記念医学研究所視察



無償資金協力事業（テマ漁港）視察



カカオ農園視察



農村女性開発基金（職業訓練校）
青年海外協力隊員（手工芸）活動視察



ウェズリー教員養成校
シニア海外ボランティア活動視察



ベナ小学校
青年海外協力隊員（小学校教諭）活動視察



ホームビジットにてフェアトレード
商品作成体験の様子



JICA技術協力プロジェクト
「公務員能力強化計画」視察

用語集

用語	解説
アイスブレイキング	ワークショップの導入部分で緊張をほぐしていく活動。
開発教育指導者研修	開発教育/国際理解教育の概要や教材例、参加型学習の考え方やその指導方法の習得等をとおして、開発教育/国際理解教育の指導者として能力の向上を図り、それら指導者（主に教員）に学校現場において開発教育/国際理解教育の担い手として活躍してもらうことを目的として実施している研修。独立行政法人国際協力機構筑波国際センター（以下、「JICA 筑波」）では、教員や開発教育/国際理解教育に関心のある方を対象として、「教師海外研修」と合同で、平成 21 年度は 3 回実施した。
フェアトレード	開発途上国の立場の弱い人々の自立と生活環境改善を図るために、生産に関わる社会的なコストと環境的成本を考慮した「適正な価格」で取引をする「公正な貿易」。
フォトランゲージ	写真を用いて、そこに写っているものからその背景にあるものを想像し、共感的理解を深める手法。
ワークショップ	対等な立場で集まった参加者（学習者）が、共通のテーマについて考えを深め合い、共同で何かを作り出す作業と場のことであり、一人ひとりが自分なりの意見と答を持ち、それぞれの意見を尊重し合いながらも共通のものを作り上げるための学び合い。

（参考）『教室から地球へ 開発教育・国際理解教育虎の巻（2006 年、独立行政法人国際協力機構中部国際センター）』

1. 教師海外研修概要

1.1 教師海外研修の目的

本研修は、開発教育に熱心に取り組んでいる、あるいはこれから取り組もうとしている小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校の先生方及び教育委員会の指導主事の方々を対象に、開発教育指導者研修および派遣前研修等の国内研修と開発途上国への海外研修を有機的に組み合わせた上で実施し、途上国のおかれている現状と日本との関係（国際協力を含む）への理解を深め、その成果を、次代を担う児童、生徒の教育に役立ててもらうことを目的に実施されました。また、研修参加後、JICA 筑波と協力し、教育現場で開発教育を推進する中核となるような人材を育成することも目的としています。

1.2 研修日程

研 修	日 程	目 的
第一次派遣前研修	平成 21 年 6 月 27 日（土）	①JICA 事業概要および JICA 筑波の事業について理解を深める。 ②教師海外研修の目的・内容について理解を深める。 ③ガーナ国及び見学先の概要を知る。 ④帰国後の授業実践内容について考える。
第二次派遣前研修	平成 21 年 8 月 1 日（土）	①海外研修中の各見学先における情報収集内容を検討する。 ②海外研修中の参加者の役割を確認する。 ③帰国後の授業実践内容について考える。
海外研修（ガーナ国）	平成 21 年 8 月 2 日（日） ～8 月 14 日（金）（13 日間）	①ガーナ国のおかれている現状を理解する。 ②ガーナ国と日本との関係・ガーナ国に対する日本の国際協力について理解を深める。 ③帰国後の授業実践のための素材・情報・資料等を収集する。
帰国報告会	平成 21 年 8 月 29 日（土）	①授業実践のための教材を作成する。 ②授業実践のための学習指導案を作成する。
実践報告会	平成 22 年 2 月 6 日（土）	実践した開発教育授業を発表しあい、さらに質の高い授業実践案を作成する。

1.3 研修参加者（敬称略）

	氏名	学校名	担当教科
1	宮本 いみ子	石岡市立高浜小学校	特別支援学級、音楽
2	塩畑 絵梨	古河市立総和北中学校	体育
3	曾根 典夫	茨城県立並木高等学校	英語
4	渡邊 憲優	茨城県立守谷高等学校	数学

1.4 海外研修（ガーナ国）同行者

	氏名	部署・所属先名
1	富岡 良一	茨城新聞社記者
2	山下 恭徳	筑波国際センター 研修業務・市民参加協力課 企画役

2. 研修内容および実施成果

2.1 第一次派遣前研修（第1回開発教育指導者研修と合同開催）

(1) 目的：①JICA 事業概要および JICA 筑波の事業について理解を深める。

②教師海外研修の目的・内容について理解を深める。

③ガーナ国及び見学先の概要を知る。

④帰国後の授業実践内容について考える。

(2) 実施日時／場所：平成 21 年 6 月 27 日（土）9：30～18：30／JICA 筑波

(3) 内容：

時 間	プログラム	目的
9:30～9:45(15)	第一次派遣前研修開会挨拶、参加者・関係者自己紹介	
9:45～10:00(15)	JICA 事業概要および JICA 筑波事業全般説明	①
10:00～10:30(30)	教師海外研修事業概要説明（目的、研修スケジュール等）	②
10:30～11:10(40)	渡航手続き、保険説明	②
11:10～11:20(10)	休憩	
11:20～12:30(70)	昨年度参加者による授業実践報告（40 分） 質疑応答（30 分）	②③④
12:30～13:30	昼休憩	
13:30～13:35(5)	第 1 回開発教育指導者研修開会挨拶	
13:35～13:55(20)	参加型ワークショップについて 「アイスブレイキング手法紹介」	④
13:55～14:40(45)	参加型ワークショップについて 「フォトランゲージを使った教材体験」	④
14:40～15:40(60)	フォトランゲージを使った実践練習	④
15:40～15:50(10)	休憩	
15:50～17:00(70)	ガーナ国概要説明(20 分) 青年海外協力隊経験者による体験談とガーナ国事情（50 分）	③
17:00～17:20(20)	JICA 筑波開発教育支援事業説明	①
17:20～17:30(10)	質疑応答、アンケート記入	
17:30～18:30(60)	研修準備のための意見交換	②④
18:30	終了	

(4) 実施成果：

参加者アンケートによると、本研修内容については概ね満足したとの回答を得られた。また、以下の点をふまえ、第一次派遣前研修の目的は達成できたと考えられる。

- ・ 平成 20 年度「教師海外研修」参加者を講師とした授業実践報告により、海外研修で得られた経験をどのように授業に活用するかという事例を得るとともに、海外研修中に収集すべき情報・教材に係る助言を得ることができた。
- ・ 青年海外協力隊経験者によるガーナ国体験談により、派遣国の概要を理解する上で基礎的な情報を得られたと考えられる。
- ・ 合同で実施された「開発教育指導者研修」の参加型ワークショップを通して、様々な開発

教育/国際理解教育手法や教材を体験し、海外研修後の授業実践内容の考察に活用された。
他方、渡航に係る基礎情報（予防接種、その他関連資料等）については事前の共有を希望する声もあり、次年度以降に対応の要否を検討する。

参考： 第1回開発教育指導者研修参加人数 計2名（その他2名）

2.2 第二次派遣前研修

(1) 目的： ①海外研修中の各見学先における情報収集内容を検討する。

②海外研修中の参加者の役割を確認する。

③帰国後の授業実践内容について考える。

(2) 実施日時／場所：平成21年8月1日（土）11：00～18：00／JICA 筑波

(3) 内容：

時 間	プログラム	目的
10:50～11:00(10)	開会挨拶	
11:00～12:30(90)	昨年度参加者による実践授業紹介及び質疑応答 1)年間カリキュラム 2)実践手法 3)成果・課題	③
12:30～14:00	昼休憩、チェックイン	
14:00～14:20(20)	プレゼンテーション 1)海外研修におけるテーマ 2)国際理解教育を実施する上での問題点・課題 3)1年間の目標	③
14:20～ 17:30(190)	補足説明（見学先及びディスカッションの内容） ディスカッション 1)海外研修中の取り組み 2)帰国後の取り組み	①②③
17:30～18:00(30)	その他 1)海外研修の準備・役割確認 2)海外研修中のルール作り 3)事務連絡（帰国報告会について等）、アンケート	②
18:00	終了	

(4) 実施成果：

参加者間のディスカッションを通じて、海外研修中の各訪問先での質問内容や各自の役割等を確認し、翌日から始まる海外研修に向けての準備を行った。海外研修中も適宜参照できるよう、ディスカッションの成果品として、各訪問先での質問事項・役割分担に係る資料を取りまとめ、参加者へ配布した。

参加者からの聞き取りにより、本研修においては参加者間で互いに学び合える関係が構築できたと考えられる。また、平成20年度「教師海外研修」参加者による実践授業紹介や参加者間のディスカッションを通じ、帰国後の授業実践内容を具体的に考えることで、帰国後の取組みを見す

えて各自が海外研修中に取り組むべきことが明確となったとの意見が挙がった。以上より、第二次派遣前研修の目的は達成されたと考えられる。

なお、第二次派遣前研修で、各訪問先における質問事項を抽出し整理することは、限られた海外研修の時間の中で必要な情報を収集するという目的を達成するために非常に重要な時間であり、研修実施側のファシリテーション力が重要となる。次年度も今年度同様、教師海外研修の参加者が様々な視点を持って海外研修に臨むことができるよう、研修実施側が周到な準備を行うことが肝要である。

2.3 海外研修日程・研修訪問先

(1) 目的： ①ガーナ国のおかれている現状を理解する。

②ガーナ国と日本との関係・ガーナ国に対する日本の国際協力について理解を深める。

③帰国後の授業実践のための素材・情報・資料等を収集する。

(2) 日時：平成21年8月2日（日）～8月14日（金） 計13日間

(3) 訪問先および内容：

日程	訪問先	研修内容	場所
8月2日	成田空港	出発	アクラ
8月3日	アクラ空港	到着	
8月4日	JICA ガーナ事務所	オリエンテーション（安全対策、健康管理等）	
	ガーナ大学	野口記念医学研究所	
	コレブ病院	野口記念資料室見学	
8月5日	テマの漁港	無償資金協力事業見学	テマ
	アクロポン	カカオ農園見学	アクロポン
8月6日	ンサワン	青年海外協力隊員活動見学（手工芸）	ンサワン
		バティック（ろうけつ染め）作り、施設内見学	
8月7日	ウェズリー教員養成校	シニア海外ボランティア活動見学（理数科教師）	クマシ
	クマシ技術短期大学	シニア海外ボランティア活動見学（電子工学）	
8月8日	アンダーシノース郡教育事務所	青年海外協力隊員活動見学（小学校教諭） 青年海外協力隊員による模擬授業見学、同隊員とガーナ人教師、研修参加教師間の意見交換会	フォメナ
8月9日	エルミナ	中間振り返りワークショップ	エルミナ
8月10日	ケープコースト	青年海外協力隊員活動見学（服飾）	ケープコースト
		ホームビジット（ガーナ人家庭訪問）	
8月11日	アクラ	JICA 技術協力プロジェクト「公務員能力強化計画」見学	アクラ
		視察	
8月12日	JICA ガーナ事務所	帰国報告	
	在ガーナ日本国大	帰国報告	

	使館		
	アクラ空港	出発	
8月13日	移動		
8月14日	成田空港	到着	

(4) 訪問先に係る教師海外研修参加者コメント(教師海外研修参加者帰国報告書より抜粋)

1) 野口記念医学研究所

JICA 技術協力プロジェクト「国際寄生虫対策西アフリカセンタープロジェクト」の拠点である野口記念医学研究所を訪問し、JICA 技術研修を受けた研究員（帰国研修員）によるガーナ国の子どもたちに対するマラリアの啓発活動の様子を見学した。

- ・ この施設でガーナ国の最先端の研究が行われているので、日本は素晴らしい国際協力をしていると感じた。HIV/AIDS、マラリア等、ガーナ国の医療には課題が多い。そのマラリアについての正確な知識を伝えようと活動している様子や資料を見て、マラリアという病気がガーナ国で課題となっていることを実感した。(渡邊教諭)

2) テマの漁港

無償資金協力事業により建設された漁港を見学した。

- ・ 日本の援助が終わった後も自分たちで壊れたところを修理しながら漁港の運営を行っていた。漁港の周りは、水質汚染が進み重大な問題になっており、汚染をなくす取り組みが行われているが、一時的なものであって解決の糸口は見えていない。経済発展を急ぐあまり環境を破壊しているという現状が明らかになっていた。経済発展と環境破壊、とても難しい問題だと思う。(塩畑教諭)

3) カカオ農園

ガーナ国を代表する産業の一つであるカカオ農園でカカオの実の収穫作業の行程を見学した。

- ・ カカオの実のつき方を実際に見て、その不思議さに驚いた。最初に植えられたカカオの木がまだ残っていたが、この1本からガーナ国のカカオ豆産業が始まったのかと思うと、感慨深いものがあつた。新たに切り拓いた畑も案内してもらったが、生産を高めるための努力をしている様子がうかがえた。(宮本教諭)

4) 農村女性開発基金（職業訓練校）

農村貧困層出身の若い女性（15～20歳程度）に対し、職業訓練を通した自立支援を行う学校を訪問した。青年海外協力隊員（手工芸）の活動の様子を見学し、そこで学ぶ生徒とともにバティック（ろうけつ染め）作りを体験した。

- ・ 女性が社会に出て働くことができるようにという熱意が感じられた。バティック作りと一緒にやらせてもらい1枚仕上げたが、蠟を溶かして模様をつけることに始まり、染色して乾かすまでの労力は大変なものであつた。(宮本教諭)

5) ウェズリー教員養成校

シニア海外ボランティア（理数科教師）の活動現場を訪れ、模擬授業を見学した。

- ・ ボランティアの方の熱意、創意工夫のすばらしさは、養成校の学生に十分に伝わっていると思う。道具がそろっていないから実験ができないというのではなく、手に入るものを利用して作ることが大切であるというお話を聞き、国際協力の考え方に通じるものが

あると感じた。その国で続けていける方法を考えなければ、本当の支援にはならないと思う。(宮本教諭)

6) クマシ技術短期大学

シニア海外ボランティア（電子工学）の活動現場を訪れ、模擬授業を見学した。

- ・ 「学校で習うことは時代の流れから一昔遅れているが、ベーシックな内容であるため、どのようなものにも応用が可能である。一度やったことがあるという感覚は、物事のとりかかりとしては大切だ」というボランティアの方の言葉が印象に残った。しかし、国内には仕事・就職先が無く、卒業しても独立して修理屋になるのがほとんどであるようだ。(曾根教諭)

7) ベナ小学校

農村部のベナ小学校を訪問し、現地教員および青年海外協力隊員 3 名（小学校教諭）の模擬授業を見学した。また、参加者による日本文化紹介を通して、子どもたちとの交流を行った。

- ・ 日本との教育環境にこれほどまで差があるのだと生徒に伝えたい。授業はすべて英語で行うので、ガーナ人は英語が話せる。ガーナ国では先生、親、年長者を敬うことができる。その中でも先生の影響は強い。ガーナ国の先生は理論中心が多く、具体的・視覚的に考えさせるようなことが少ない。3 人の隊員の方々は、現地の物で、できるだけわかりやすく工夫をこなし、素晴らしい授業だった。見習わなければならない。この村の現状や教育、子ども達を見られて本当に良かった。日本との違いが多く、また、学ぶことも多かった。(渡邊教諭)

8) NGO団体「グローバル・ママス」

女性の自立支援を目的に設立されたNGO（グローバル・ママス）を訪問した。フェアトレード商品の生産および販売方法などの説明を聞き、青年海外協力隊員（服飾）の活動の様子を視察した。

- ・ フェアトレード製品を作る NGO 団体の理念について聞く。規格の統一を徹底し、仕上りのよいものを海外輸出にまわす。NGO 団体の働く人の給与は保障されているようだが、労働者がさらに労働者を雇う場面があり、その人たちに対して適正な給与を支払っているかどうかは疑問が残る。(曾根教諭)
- ・ グローバル・ママスの活動の様子や、その商品を見ることで、フェアトレード商品という物を今まで以上に意識するきっかけとなった。ガーナのゴミの多さを思い、青年海外協力隊員の日本人らしいエコな発想を利用した商品が多数あった。(渡邊教諭)

9) ホームビジット（ガーナ人家庭訪問）

グローバル・ママスでバティック作りを仕事にしているガーナ人の一般家庭を訪問。ガーナ料理を体験したり、フェアトレードに係る議論、日常生活を体験した。

- ・ 夕食前にガーナ人と一緒にダンスを踊り、ジャンベ（民族楽器）を叩いた。2 時間ほどの時間だったがとても楽しかった。ぜひ、体育の授業でも取り入れたい内容だった。スポーツ・音楽は国境をも越える。そう感じた一時だった。(塩畑教諭)

10) 公務員能力強化計画

JICA技術協力プロジェクト「公務員能力強化計画」が実施している現地研修の様子を視察した。

- ・ 国を動かす官僚であっても、私たちと同じように研修ではグループワークを行っている

ことに驚いた。やはり、どこの国においても連携、協力は大切であると感じた。(塩畑教諭)

- ・ コーディネーターという立場で活動されている黒田さんから、プロジェクトの概要についてお話を伺った。実際にワークショップを行っている様子を見せていただいたが、現場でリーダーシップを取る立場になる方たちなので、熱心なディベートが繰り広げられていた。「プロジェクトは専門家がいなくなったときに、成果が問われる。」という黒田さんの言葉が印象深かった。(宮本教諭)

(5) 実施成果：

参加者から提出された帰国報告書により、全体および各訪問先における所感や、資料および教材の収集状況が確認でき、海外研修に係る各目標は達成されたと考えられる。研修日程の設計に当たっては、技術協力プロジェクト、無償資金協力、研修員受入事業、ボランティア派遣事業等、国際協力についてさまざまな側面から見られるよう、JICA ガーナ事務所と調整しており、同帰国報告書記載からも、各訪問先において、プロジェクト専門家、青年海外協力隊員、シニア海外ボランティア、帰国研修員等への聞き取りを行ったことにより、ガーナ国への日本の国際協力に係る理解が深まったことが確認できた。また、現地同行者より適宜補足情報の説明などを行ったことにより、参加者がガーナ国の現状への理解をより深めたと考えられる。

ガーナ国滞在中盤においては、振り返りワークショップを実施した。これにより、現地で収集した知識・情報を整理し、海外研修後半で確認すべき疑問点や質問項目をまとめることができ、帰国後の授業実践計画を踏まえ、残りの滞在時間をより有効に活用する意味で不可欠であったとの意見が挙がった。

加えて、第二次派遣前研修にて、各訪問先での目的の確認および質問事項の整理を行っていたため、海外研修中は帰国後の授業実践のために必要な情報を戦略的に収集することができたとの意見が挙がっており、研修日程の設計に加え、事前準備段階での目的意識の明確化および役割分担が、海外研修の目的達成に大きく寄与したと考えられる。

2.4 帰国報告会（第2回開発教育指導者研修と合同開催）

(1) 目的：①授業実践のための教材を作成する。

②授業実践のための学習指導案を作成する。

(2) 実施日時／場所：平成21年8月29日（土）10：00～17：30／JICA 筑波

(3) 内容：

時 間	プログラム	目的
10:00～10:05(5)	開会挨拶	
10:05～11:00(55)	ワークショップ(伝えたいことは何か?)・ディスカッション * 第二次派遣前研修で使用した質問一覧表をもとに実施	②
11:00～11:05(5)	休憩	
11:05～12:30(85)	ワークショップ(どのように伝えるか?) * 学習指導案作成(科目、対象学年、時間数、目的、内容等)	②
12:30～13:30	昼休憩	
13:30～14:20(50)	帰国報告会 ・ ガーナ国における海外研修について(概要説明)(10)	

	・参加教員からの発表（40）（発表5分、質疑応答5分） （1）ガーナの今と昔（宮本教諭）、（2）教育分野から見たガーナ（渡邊教諭） （3）働くこども（曾根教諭）、（4）国際協力の現場（塩畑教諭）	
14:20～14:30(10)	休憩	
14:30～ 16:30(120)	ワークショップ（どのように伝えるか？） （1）午前中に作成した学習指導案の発表（20） ＊1人5分（発表3分、質疑応答2分） （2）教材作成 ＊導入（15） ＊10分体験（10分で伝える展開体験・教材作り準備）（15） ＊参加型教材作成（10分教材作成体験）（50） ＊アイスブレイキング手法紹介（20）	①②
16:30～16:40(10)	休憩	
16:40～17:10(30)	発表・まとめ（実践、意見交換）（30）	
17:10～17:30(20)	その他（アンケート等）	
17:30	終了	

（4）実施成果：

参加型ワークショップでの教材作りや実践については、アンケートにて参加者より今後の授業実践に役立つという意見が多数挙げられた。各参加者が作成した実践報告書より、本帰国報告会で作成した教材や学習指導案が、授業実践の土台となっていることが確認できた。以上より、本帰国報告会の目的は達成されたと考えられる。

本帰国報告会においては、第一次派遣前研修で学んだ手法、第二次派遣前研修で作成した帰国後の取り組み、海外研修中に収集した素材・情報・資料すべてをふまえた内容となっており、第一次派遣前研修から一貫した流れの中で実施している。

他方、目的は達成されたものの、限られた時間に多くのプログラム内容を設定したため、進行が駆け足状態になってしまった。次年度以降の実施に際しては、プログラム内容や時間配分に関し、十分に検討した上で、今年度同様に第一次派遣前研修からの一貫した流れを意識した研修構成とすべきと考える。

参考：第2回開発教育指導者研修参加人数 計6名

（中学校教諭1名、高校教諭2名、特別支援学校教諭1名、その他2名）

2.5 実践報告会（第3回開発教育指導者研修と合同開催）

（1）目的：実践した開発教育授業を発表しあい、さらに質の高い授業実践案を作成する。

（2）実施日時／場所：平成22年2月6日（土）13:00～17:30／JICA 筑波

（3）内容：

時 間	プログラム
13:00～13:05(5)	挨拶・全体説明
13:05～13:20(15)	参加者自己紹介
13:20～14:10(50)	授業実践発表①・参加教員による授業実践発表 宮本教諭(小学校)、塩畑教諭(中学校)
14:10～14:25(15)	ディスカッション①

14:25～14:30(5)	移動・休憩
14:30～ 15:20(50)	授業実践発表②・参加教員による授業実践発表 曾根教諭(高校)
15:20～15:35(15)	ディスカッション②
15:35～15:40(5)	移動・休憩
15:40～16:40(60)	授業実践案の練り直し
16:40～17:20(40)	全体ディスカッション
17:20～17:30(10)	閉会 その他(アンケート等)
17:30	終了

(4) 実施成果：

「開発教育指導者研修」と合同で実施することにより、教師海外研修参加者 4 名がそれぞれ授業実践を発表するだけでなく、他の参加者から客観的かつ具体的なフィードバック（良かった点・改善点）を得ることができた。また、全体ディスカッションでは、教師海外研修の成果や授業実践における課題、今後の取り組みについて、それぞれの立場や思いを共有することができ、「教師海外研修」参加者及び「開発教育指導者研修」参加者双方にとって、今後の開発教育/国際理解教育の実践に向けて有意義な研修となった。

他方、時間の制約上、授業実践案の練り直しについては実施することができず、目的を完全に達成することができなかった。次年度以降の実施にあたっては、目的の設定やプログラム内容につき検討が必要である。

参考： 第 2 回開発教育指導者研修参加人数 計 10 名

(小学校教諭 1 名、高校教諭 2 名、特別支援学校教諭 1 名、大学生 2 名、その他 4 名)

3. 教訓と提言

3.1 年間目標および計画

本年度の教師海外研修の実施にあたり、最終目標である参加者による開発教育／国際理解教育授業実践に向けて、ガーナ国での海外研修を中心に 1 年間を通じて研修の機会を設定した。各研修において段階的に目標を設定することにより、参加者全員が研修内容について十分に理解することができたと思料する。

また、それぞれの段階において、内容に関連性を持たせたことにより、参加者の理解をより深めることができた。特に、核となる海外研修については、派遣前研修にて全訪問先での目的の確認および収集すべき情報の整理を行ったことにより、ガーナ国での限られた研修時間を有効に活用し、自身の授業実践に必要な材料を十分に収集することができた。

他方、帰国報告会や実践発表会など、時間が限られている中で多くの内容を含め過ぎたために、それぞれの項目に十分な時間を取ることができなかった場合もあり、次年度実施にあたっては、目標の設定及びプログラム内容については多少の精査が必要と思料する。

3.2 参加者の選考

参加者の選考において、特定の学年・教科に偏ることの無い様配慮したところ、今年度参加教員は、小学校・中学校・高校と担当学年が異なるだけでなく、特別支援学級・音楽、体育、英語、数学と、担当教科が多岐にわたっていた。このため、研修で得た知識、情報、経験の実践手法が多種多様となり、実践報告会ではさまざまな事例が発表された。

また、国際理解教育・開発教育では、「知る・考える・行動する」の 3 ステップが重要といわれているが、今年度参加された先生方の取組みは、対象学年、対象科目、先生方のこれまでの国際理解教育・開発教育の取組み経験、先生方が勤務する学校の国際理解教育・開発教育への取組み方針などに応じて、「知る」ことを重視した授業から、「行動する」ことを重視した授業まで、様々な段階の国際理解教育・開発教育の実践事例を見ることができた。

3.3 開発教育指導者研修と連携した実施

今年度は、年 3 回実施している「開発教育指導者研修」を「教師海外研修」と各回合同で実施することにより、双方の参加者の学びをより効果的なものにするという試みを実践した。これは特に実践報告会において効果が見られ、「教師海外研修」の参加者による実際の取組みが紹介されることにより、「開発教育指導者研修」の参加者はすぐに活用できる実践事例を得ることができる一方、「教師海外研修」の参加教員にとっては、自身の実践した取組みに対して、「開発教育指導者研修」参加者よりフィードバックを得られ、実践手法をより良いものにするためのヒントを得ることができた。プログラム内容の精査など、若干の改善は必要であるものの、双方が互いに学びあうことのできるプログラムとなっており、「開発教育指導者研修」と「教師海外研修実践報告会」の連携については、次年度以降も有効かと思われる。

他方、「開発教育指導者研修」と「教師海外研修帰国報告会」との合同実施については、組み合わせで実施したことにより、時間が限られ、双方の目的達成が困難である部分もあった。次年度においては、より効率的な事業実施に鑑み、開発教育指導者研修の一部を合同での実施とせず、単独で開催するなど、さらなる精査が必要である。

付属資料

資料 1 帰国報告書

資料 2 実践報告書

資料 3 茨城新聞掲載記事

資料 4 平成 21 年度「教師海外研修」募集要項

資料 5 平成 21 年度「開発教育指導者研修」参加者数実績

平成21年8月28日

平成21年度 教師海外研修研修報告書

派遣国：ガーナ

学校名：石岡市立高浜小学校

担当教科：特別支援学級

氏名：宮本 いみ子

海外研修に行ってきました！

(1)良かったと感じた海外研修の内容について(上位3つ)

内容	理由
1. ベナ小学校訪問 (授業参観、授業実践、現地教員との意見交換会、児童との交流)	現地の先生の授業、後藤・加勢・田川先生の授業を参観することができ、とても参考になった。現地の子どもたちの反応をじかに感じることもできた。
2. ホームビジット	ガーナの一般家庭の様子を知ることができた。家庭料理(フーフー)と一緒に作ったり、子どもたちから歌やダンス、遊びを教えてもらったりと楽しいひと時であった。
3. JICA専門家・シニア海外ボランティア・青年海外協力隊員・JICA事務所の方々との出会い	国際協力の現場で実際に仕事に携わっている方々から話をうかがうことができ、自分の視野を広めることができた。皆さんの熱意が伝わってきた。

(2)収集した資料／教材について

- ガーナの地理、生活の様子を写した写真
- 本(現地の教科書、絵本など)
- 織物(ケンテ)、染物(バティック)、民族楽器、民族衣装、民芸品
- ホームビジット先で描いてもらった絵

(3)授業／学校生活への活用について

- ガーナという国がどこにあるのか、どんな国なのか写真等をもとに紹介する。ガーナを身近に感じさせることで、アフリカに目を向ける足がかりとさせたい。他のアフリカの国々についても興味をもたせることができるような授業ができればと考えている。
- 手作り品を紹介し、ガーナの人が生活のために仕事として手作業を行っていることを伝える。実際に見たり、触れたりして、異文化体験をさせる。
- 日本とガーナの小学校の相違点を見つけ、自分たちの学校生活と比べさせる。
- 青年海外協力隊員の方やシニア海外ボランティアの方々を紹介し、国際協力とはどういうことが児童とともに考えたい。

(4)研修に関する全般的な所感／意見について

一般の海外旅行では体験することができないガーナの国の様子を、様々な場面、角度から体験することができ、実り多い研修となりました。短期間であり、見ることはほんの一部であったかもしれませんが、思い描いていたガーナと、実際に自分の目で見て感じたガーナとの違い。都市部の喧騒、マーケットのにぎわい、村ののどかさ、郷土食の香りと味、太陽のまぶしさなど、まさに「百聞は一見に如かず」、五感で感じることの大切さを痛感する日々でした。

現地の方々からガーナの現状について話をうかがい、また、青年海外協力隊員・シニア海外ボランティア・専門家・JICA職員の方々からそれぞれの立場での話をうかがうことによって、ガーナと日本とのつながり、かわりを理解することができました。国際協力の考え方の基本

でもある「相手国に必要なことは、自分たちでずっと続けていけるような支援をすること」について、具体的な内容で分かりやすく説明していただいたことで、より理解が深まったと感じています。

今回の研修においては教員生活で味わえないような貴重な経験をすることができ、本当に感謝しております。同行してくださったJICA筑波の山下さん、JICAガーナ事務所の飯島さん、北原さん、青年海外協力隊員の岩佐さん、田川さん、後藤さんには大変お世話になりました。研修を統括してくださったJICA筑波の宮本さん、甲田さん他、職員の皆様にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

来年度研修に向けて～さらに充実した研修のために

(1)派遣前研修について

①第一次派遣前研修

- 昨年度参加された先生からいろいろと話をお聞きし、行き先は違っても海外研修に対する心構えができた。また、ガーナに関する概要説明、青年海外協力隊経験者の方の体験談があったので、出発前の不安が和らいだ。
- 参加型ワークショップで「アイスブレイキング」「フォトランゲージを使った教材体験」を学んだことは有意義であった。
- 用意していただいた海外研修に関する資料が項目別にきちんと分類されており、1冊のファイルにまとまっていたので、とても見やすく役に立った。

②第2次派遣前研修

- 昨年度参加された先生による実践授業が参考になった。また、ワークシートを用いたプレゼンテーションを行うことによって、研修の目的や自分自身の取り組みが明確になった。研修参加者同士での意見交換、情報交換ができたのがよかった。
- ガーナから来ている研修員の方を囲んでの夕食会では、現地の様子を具体的にうかがうことができ、出発前の予備知識としていろいろと参考になることが多かった。

(2)海外研修について

JICAの専門家の方や青年海外協力隊員、シニア海外ボランティアの方々がどのような支援活動を行っているか、実際に国際協力の現場を見せていただき、大変勉強になった。ゆっくり食事をご一緒する機会も何度か設けていただき、たくさんの方々から活動にかける思いをお聞きすることができた。このような時間を設定していただいたことをありがたく感じた。

現地の村の小学校では、夏休みにもかかわらず、先生、児童が登校してくれて、授業の様子を參觀することができた。また、自分も授業をさせていただき、本当に貴重な経験をすることができた。学校の設備などを見ても決して豊かであるとはいえないが、きらきらと目を輝かせ、元気に活動する子どもたちの笑顔を見ながら、本当の幸せとは何か、考えさせられた。

また、学校、施設関係訪問の他に、マーケットでの買い物や一般の家庭で過ごす時間なども多くとっていただき、ガーナの人々の普段の暮らしを経験することができたことも大変有意義であった。

(3)その他全般(JICAへの要望)

2回目の派遣前研修は前日ではなく、できればもう少し前に設定していただいたほうが、研修参加者同士の打ち合わせが十分にできると思います。現地に持っていくお土産や授業の内容、準備物関係など、ゆっくり話し合う時間があつたほうがいいのではないかと感じました。

今回は行き先がガーナということもあり、黄熱病のほかにも、任意でしたがいろいろな予防接種を紹介していただき参考になりました。ただ、接種するには、決められた間隔をあげなければならない、日数の関係でできないものもあつたので、必要な予防接種の情報については早いほうがよいと思います。

また、マラリアの怖さを現地に行ってから痛感しました。予防薬については入手方法が日本では限られているので、早めに連絡をいただくと準備するのにあわせてすむと思います。

(4) 今後の本研修参加者へのアドバイス

ガーナは暑いというイメージがあると思うが、8月は年間で1番気温が低い時期ということもあり、今回は日本にいたときよりも涼しく感じた。訪問した施設はクーラーが入っているところが多く、上着(長袖)が必要だった。移動の車内や機内もクーラーがきいており、冷房対策として、長袖は多めに用意していったほうがよいと思う。

マラリア対策として、予防薬は出発前、研修中、帰国後と、必要な期間服用を続けることが望ましい。また、現地で蚊に刺されないように、長袖、ズボン等の衣服の用意をしていくことのほかに、蚊取り線香や蚊除けスプレー等、多めに持っていったほうが安全。ホテルの室内にも蚊がいて、結構使う場所と時間が長かったので、すぐになくなってしまった。

事前にいただいてあった現地語(チュイ語)のリストがとても役立った。あいさつ、自己紹介など、短い文章でも、現地の方は喜んでくれた。コミュニケーションをとる手段として、少しでも現地の言葉を覚えて使ってみることは大切だと感じた。

実際にはあまり使うこともなかったが、胃腸薬や風邪薬など現地で購入するのは大変なので、万が一に備え、持参するとよい。

各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと⇒それを何につなげるか? その他所感
8月4日 (火)	JICAガーナ事務所	ガーナにおけるJICA事業の概要について、お話を伺った。ガーナは西アフリカにおいて安定と開発のモデルにもなっており、援助重点国として、日本が支援を強化しているということを知った。現在85名の日本人ボランティアが現地で活躍されているということで、国際協力の重要性がわかった。治安状況や医療については、アフリカ諸国の中では比較的安全といえるだろうが、現地で仕事をされている方がたの苦労は大変であろうと感じた。
	野口記念医学研究所	ガーナ大学内にある研究所を訪問した。学生の方の案内で実際の研究の様子を見せてもらうことができた。また、帰国研修員であるアイリーン先生から、プロジェクトの経過や終了後の取り組みについての説明をお聞きした。マラリア予防のために地域に入り、活動されている様子を伺い、日本での研修の成果を十分に発揮されており、すばらしいと感じた。
	野口記念資料室	コレブ病院内にある資料室を訪れた。野口博士が実際に使用していた顕微鏡が今も保存されており、そのほかの道具、資料、手紙などからも、当時の研究生活の一端をうかがい知ることができた。日本人として外国で活躍した野口博士の功績を、小学校の児童に分かりやすく伝えたいと思う。
8月5日 (水)	テマの漁港	日本の無償資金協力によって建設された施設を視察した。日本の協力に関してとても感謝しているという気持ちだが、説明してくださる方の言葉の端々から伝わってきた。ただ、海水の汚染や修理が必要だがプロジェクトが終了したために放置されたままになっている施設など、問題もいくつか出てきている。支援終了後、どのように事業を維持させていくかということが、その後の国の発展につながるのではないかと感じた。漁港の中の市場を案内してもらい、活気あふれるガーナの人々の暮らしを垣間見ることができた。
	カカオ農園	カカオの実のつき方を実際に見て、その不思議さに驚いた。最初に植えられたカカオの木がまだ残っていたが、この1本からガーナのカカオ豆産業が始まったのかと思うと、感慨深いものがあった。新たに切り開いた畑も案内してもらったが、生産を高めるための努力をしている様子がうかがえた。

8月6日 (木)	青年海外協力隊員 活動視察(手工芸)	牧師でもあるママ・ドーラが中心となり運営している、いろいろな技術を学びながら社会にでていけるようにするという学校を見学した。校長先生、青年海外協力隊員の織田さんにいろいろと説明を伺うと、10人のうち1人がきちんと就職できればよいということであったが、新しい施設設立の計画もあるということで、女性が社会に出て働くことができるようにという熱意が感じられた。バティック(ろうけつ染め)作りを一緒にやらせてもらい1枚仕上げたが、蠟を溶かして模様をつけることに始まり、染色して乾かすまでの労力は大変なものであった。毎日の作業は大変だろうが、女の子たちは一生懸命に取り組んでいた。 ケンテ(織物)を織っている場所に案内してもらい、1枚購入した。男性だけがケンテを織ることができるそうで、そこに働いている方は全員男性であった。ガーナ独自の文化のひとつであろう。
8月7日 (金)	ウェズリー教員養成校	シニア海外ボランティアの中野先生からお話を伺った。実際に模擬授業を見せていただき、手作りの実験器具も何種類か、いただいた。先生の熱意、創意工夫のすばらしさは、養成校の学生に十分に伝わっていると思う。道具がそろっていないから実験ができないというのではなく、手に入るものを利用して作ることが大切であるというお話を聞き、国際協力の考え方に通じるものがあると感じた。その国で続けていける方法を考えなければ、本当の支援にはならないと思う。
	クマシ技術短期大学	シニア海外ボランティアの原田先生からお話を伺った。即戦力となる人材を育てることが目標であるので、実習の時間を多く設定するよう努力されているということであった。実際に機械を動かすことが大切なので、プロジェクト終了後の設備のメンテナンスが課題であるそうだ。「外国に行って一から出直す」という気持ちでボランティアの活動をされているとお聞きし、バイタリティあふれる生き方に感動を覚えた。
8月8日 (土)	ベナ小学校	校長先生はじめ、4名の先生(1名の方はボランティアの先生)方、子どもたちにあたたく迎えてもらうことができた。フォメナの村にある小学校だが、簡単な屋根と柱と土壁の教室の中は、黒板がひとつと地面に机、いすがあるだけ。授業を参観させていただいたが、先生がチョーク1本で行う授業に対し、子どもたちは一生懸命に取り組んでおり、授業の原点を見る思いがした。 続いて、青年海外協力隊員の後藤先生、加勢先生、田川先生の授業を参観させていただいた。それぞれ、教材、教具を工夫されており、子どもたちの歓声が時折わきあがるような活気あふれる内容であった。村の子どもたちにとって、かけがえのない時間になったのではないと思う。 私自身も、日本の歌「さくらさくら」「ふるさと」の2曲と日本の遊び「こま」「折り紙」「あやとり」などの紹介をさせてもらった。幼稚園・低学年、中学年、高学年と3グループに分かれていたので、3回行ったが、高学年生は日本語で上手に「さくらさくら」を歌ってくれ、大変うれしかった。得がたい体験をさせていただいたと思う。こま回しはどの学年も簡単にできたが、折り紙、あやとりはやや難しかったようである。しかし、チャレンジ精神は豊富で、どの子どもががんばって取り組もうと試みていた。裸足でサッカーに興じ、得点が入ると歌や踊りで喜びを表現する子どもたち。目がきらきらと輝き、笑顔がすばらしい子どもたちの表情を見ると、「物が豊かで生活が便利なこと＝幸せ」ということにはならないとしみじみと感じた。

		心づくしの昼食会の後、村の小学校の先生方との意見交換会が行われた。環境の整備の必要性を述べられていたが、教師の給料も高くはないということなので、先生方にもいろいろな苦勞があるようであった。校長先生は情熱が感じられる方であり、他の先生方も若さあふれる方々であったので、今後、村の教育のために尽力されることと思う。
8月9日 (日)	エルミナ城	青年海外協力隊員の刀根さんの案内で奴隷貿易の拠点となったエルミナ城を実際に訪れると、女性奴隷の部屋、船に乗せられるまでの間待つ部屋等、様々な部屋がそのまま残されており、独特の臭気も残っていた。当時の悲惨な光景が目には浮かんでくるような気がした。現在は世界遺産に制定されているが、忘れてはいけない歴史の一部であると感じた。
8月10日 (月)	青年海外協力隊員 活動視察(服飾) 「グローバル・ママス」	吉富さんの活動場所であるケープコーストの「グローバル・ママス」を視察した。フェア・トレード制度という言葉は最近聞かれるようになってきたが、まだ内容はよく知られていないのではないかと思う。NGO法人の活動で運営されており、アリスさんから説明をお聞きしたが、日本やスウェーデンとも取引があるそうである。吉富さんの活動が大きな力になっている様子が伺えた。
	ホームビジット	バディック作りを仕事にされているCudjoeさんのお宅を訪問した。家族のアルバムを最初に見せてもらい、子どもたちを紹介していただいた。とても気さくな方で洗濯の様子を見せてもらったり、一緒に家庭料理のFUFUを作ったりと、ガーナの日常生活を体験させていただくことができ、とても有意義な時を過ごすことができた。子どもたちも人懐っこく、歌や踊り、手遊びをいろいろと教えてくれ、さらに近所の子どもたちもやってきて、楽しい時間がもてた。
8月11日 (火)	JICA技術協力プロジェクト「公務員能力強化計画」視察	コーディネーターという立場で活動されている黒田さんから、プロジェクトの概要についてお話を伺った。実際にワークショップを行っている様子を見せていただいたが、現場でリーダーシップを取る立場になる方たちなので、熱心なディベートが繰り広げられていた。「プロジェクトは専門家がいなくなったときに、成果が問われる」という黒田さんの言葉が印象深かった。
8月12日 (水)	在ガーナ日本国大使館	ガーナ大使館を訪問し、大使をはじめ、職員の方々とお話しする機会をいただいた。日本料理であたたかくもてなしてくださり、ガーナ最終日の良い思い出となった。

平成21年8月29日

平成21年度 教師海外研修研修報告書

派遣国：ガーナ

学校名：古河市立総和北中学校

担当教科：保健体育

氏名：塩畑 絵梨

海外研修に行ってきました！

(1)良かったと感じた海外研修の内容について(上位3つ)

内容	理由
1. ベナ小学校	ガーナの子どもたちと一緒に相撲やサッカーをしたことは、一生忘れることのできない思い出になった。言葉の壁を越えて夢中で楽しんだ。また、ガーナ人教師や現地の青年海外協力隊員の方が行う授業を参観することができたことも大変勉強になった。道具がない中でも教材を工夫し、体験重視の授業を行うことの大切さを改めて実感した。子どもたちの純粋な笑顔が忘れられない。
2. JICA 専門家・シニア海外ボランティア・青年海外協力隊員・JICA 事務所の方々との出会い	実際にガーナに来て、世界で活躍する日本人がたくさんいることを知った。今後の生徒の進路を含めた指導のためにも、日本に帰ってから、子どもたちに開発途上国で活躍する日本人について伝えていきたい。
3. ウェズリー教員養成校	シニア海外ボランティアの中野さんは、道具がないにもかかわらず、身近なものを実験の道具として使い、工夫を凝らした教材を作っていた。どの実験も驚かされるものばかりだった。実験の大切さを訴えて活動が続ける中野さんの姿に胸が熱くなった。

(2)収集した資料／教材について

- ガーナの教科書(中学2年生 理科)、ガーナの地図帳、ガーナの拡大地図
- ガーナの新聞、ケンテ(織物)、バティック(ろうけつ染め)の布、チョコレート、ストラップ
- ガーナの様子を写した映像・写真
- ガーナの子どもたちと手紙での交流
- 青年海外協力隊員の方々からのメッセージビデオ
- プロジェクトの方からいただいた資料

(3)授業／学校生活への活用について

- ①ガーナの暮らしについて知る
ガーナの生活(衣食住)を映像(写真)やゲームを通して知る。
- ②ガーナのチョコレートと日本のチョコレートの比較
ガーナのチョコレートの生産技術からガーナの現状を理解する。
- ③ガーナの子どもたちとの交流(手紙や絵)
研修前にガーナの子どもたち宛に絵手紙を書いた。日本の紹介やガーナについての質問など。返事を待って交流を続ける予定。
- ④アフリカの保健について
マラリアについて知る。医療という観点からの国際協力について考える。
- ⑤青年海外協力隊の活動を知る
海外で働く人の活動を知り、自分の将来について考える。

⑥国際協力について考える

私たちにできる国際協力について考え、実践する。

⑦先生の国際協力

私自身が、来年青年海外協力隊員としてアフリカへ行くことを話すことで、国際協力は強い信念さえあれば誰でもできるということを伝えたい。特別な資格や能力よりも、誰かの力になりたいという気持ちが大切であることに気づかせたい。授業後も青年海外協力隊として派遣された国と勤務する中学校とのつながりを持たせながら、継続して国際理解教育を推進していきたい。

(4)研修に関する全般的な所感／意見について

このような貴重な体験をすることができたのも、筑波JICA の職員の皆様、JICA 専門家、シニア海外ボランティア、青年海外協力隊員、JICA ガーナ事務所の皆様のおかげだと心から感謝しております。本当にありがとうございました。自分が見てきたもの、感じてきたものすべてを一人でも多くの子どもたちに伝えていきたいと思います。

10日間という短い期間でしたが、一生心に残る貴重な体験をすることができました。毎日が新しい発見の連続でとても新鮮でした。研修を通して、たくさんの人と出会い多くのことを学ぶことができました。また、青年海外協力隊の方と一緒に行動できたことで、普段聞くことができない深い話をすることができたのも良かったと思います。

来年度研修に向けて～さらに充実した研修のために～

(1)派遣前研修について

①第1次派遣前研修

- JICA 事業の概要について、詳しく説明していただいたので大変勉強になった。出前授業もぜひ取り入れたいと思った。
- 初対面で最初は緊張していたが、参加型のワークショップのおかげですぐに先生方とも打ち解けることができた。学校の授業で取り入れられる内容が多く、生徒も楽しんで参加できると思う。ぜひ授業で実践していきたい。
- ガーナについて詳しく説明していただいたので、安心して研修に参加することができた。青年海外協力隊員として、ガーナに派遣された方のお話を直接聞くことができたのはよかったと思う。また、現地語(チュイ語)の説明もあったので、前もって勉強をすることができた。
- 昨年度参加者の先生による報告は、大変参考になった。準備不足であることを改めて痛感した。帰国後の授業について、しっかりとしたテーマを決めなくてはという気持ちになった。

②第2次派遣前研修

- 訪問先での具体的な質問内容を話し合うことができたのは良かったと思う。参加者がそれぞれ異なるテーマを決めて研修に臨むことができたので、どのような視点でガーナを見てくるかが明確になった。

(2)海外研修について

あっという間に過ぎ去った10日間。しかし、心を揺さぶられる出来事の連続だった。ガーナにあるのは貧しさだけではない。子どもたちの目はキラキラ輝いていた。この研修を通して、本当の幸せとは何だろうと考えさせられた。私が見てきたものは、ガーナのほんの一部にしか過ぎないがガーナの空気を吸い、自分の目で見て肌で感じてきたという体験は一生の財産となるだろう。子どもたちにこの体験をしっかりと伝えていきたい。

(3)その他全般(JICA への要望)

本当に貴重な体験をすることができました。ありがとうございました。

(4)今後の本研修参加者へのアドバイス

- 英語が使える国では、事前にしっかりと英語の勉強をしていった方がよい。伝えたいことがうまく伝わら

ず何度も悔しい思いをした。

○お土産はたくさん用意した方がよい。日本食も良いが、ガーナなどマラリアにかかる危険性がある国では、虫除けなどもお土産としては喜ばれるのではないかな。

○衣類は、捨てられるものを持って行った。ガーナのお土産を入れるスペースを確保するためにも捨てられるものがベスト。

各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと→それを何につなげるか？／その他所感
8月4日 (火)	JICAガーナ事務所	ガーナの経済状況やガーナにおける JICA 事業の概要についてお話をうかがった。「経済成長を通じた貧困削減」に向けて、具体的な取り組みを聞くことができた。経済が発展する中で、地方農村部の貧困を削減し、地域格差や成長に繋げる環境づくりを行うことが課題の一つであることを知った。また、安全対策についても健康管理員の方からお話を伺った。マラリアについて自分は甘く考えていたことを痛感した。
	野口記念医学研究所	日本政府の無償援助で建設されたガーナ大学医学部付属野口記念医学研究所を訪れた。この研究所は、2004年から2008年まで、日本政府による技術協力の一環として実施されている「国際寄生虫対策西アフリカセンタープロジェクト」の拠点となっていた。やはり、ガーナにおいても最大の脅威となっているのは、マラリアであった。蚊が感染源となるため完全な予防法がないというのが最大の問題のようだ。プロジェクトに参加したアイリーンさんは、ガーナの子どもたちにマラリアの啓発活動を行っていた。小さな取り組みだが、その取り組みがやがて大きな成果となって現れることを期待したい。マラリアで亡くなる子どもたちが少しでも少なくなるよう、多くの国民にマラリアについての正しい知識や情報を提供していく必要がある。そのためには、アフリカだけでなく、世界各国による連携や協力が不可欠だと思った。
	野口記念資料室	コレブ病院内には、野口英世が当時使っていた研究室が残されていた。その奥にある一室には、彼の写真や手紙などが飾られてあった。彼が実際に使った顕微鏡がそのままの形で残されており驚いた。あの野口英世が実際に使ったものだと思うと興奮が止まらなかった。また、庭園には、野口英世の銅像が建てられていた。英世の信条である「忍耐」という文字が刻まれた石碑も置かれていた。庭園の丸石がふと日本を感じさせてくれた。
8月5日 (水)	テマの漁港	日本政府の無償資金協力で建設された漁港を視察した。漁港には韓国や中国の船もあった。日本の援助が終わった後も自分たちで壊れたところを修理しながら漁港の運営を行っていた。しかし、良いことばかりではない。漁港の周りは、水質汚染が進み重大な問題になっていた。汚染をなくす取り組みが行われているが、一時的なものであって解決の糸口は見えていない。経済発展を急ぐあまり環境を破壊しているという現状が明らかになっていた。汚染を食い止めなくては、日本のイタイイタイ病や水俣病と同じような事故が起こりかねない。経済発展と環境破壊、とても難しい問題だと思う。

	カカオ農園	都市を離れて高原地帯に入ると、カカオ農園が見えてきた。見渡す限りカカオの木。カカオの実、直接木の幹にぶら下がっていた。農園を案内してくれた方が、最後にカカオの実を割って中身を見せてくれた。食べてみると不思議な味がした。ほのかにチョコレートの香りがした。日本国内に輸入されているカカオ豆のほとんどがガーナ産だという。そのカカオ豆が、どのようにして作られ日本に輸出されているかを実際に自分の目で見ることができた。とても貴重な体験となった。
8 月 6 日 (木)	青年海外協力隊員 活動視察(手工芸)	ンサワンで青年海外協力隊員として活動をされている織田さんの学校を訪れた。この学校では、農村貧困層出身の十分な教育を受けていない若い女性(15～20歳くらい)に対して、職業訓練を通じた自立支援を行っていた。恵まれない環境で育った少女を集めて教育し、少女たちが大人になった時、一人の女性としてしっかりと生きていけるよう支援していた。設立者の女性はとてもパワフルで情熱溢れる方だった。自分の子どものように、時には厳しく、時には優しくたくさんの愛情を注いで育てていた。優秀なガーナ人は、外国へ出てしまうという話を聞いたが、母国の子どもたちのために活動する人もいることを知った。校長先生から学校の概要についてお話を伺った後、子どもたちと一緒にバティック作りをした。生まれて初めてのバティック作り。言葉が通じない中、身振り手振りで子どもたちとコミュニケーションをとりながら、一緒に楽しく活動することができた。生徒たちのおかげで、日本の子どもたちに自慢できるすばらしい作品が出来上がった。
8 月 7 日 (金)	ウェズリー教員養成校	ガーナで二番目に歴史のある教員養成校を訪れた。夏休みということもあり学生は少なかった。理科担当教師として活動をされているシニア海外ボランティアの中野さんの授業を参観した。道具がないにも関わらず、身近なものを実験の道具として使い、工夫を凝らした教材を作っていた。どの実験もとても楽しく夢中になった。中野さんの言葉で印象的だったのが「すべてが教材です。トイレットペーパーの芯も大切な教材になります。」という言葉である。中野さんは、生徒たちにかに分かりやすく教えるかを常に考えていた。私も教材研究をしっかりと行わなくてはと改めて考えさせられた。また、ガーナの先生は、理論はあるが実験や実習ができないということを聞いた。日本では、ここ数年体験を取り入れた授業が重視されているが、やはり理論だけでは何も身に付かない。実験の失敗や成功の体験を通して、初めて生徒は学ぶことの楽しさを実感できるのだと思う。実験の大切さを訴えて活動を続ける中野さんの姿に胸が熱くなった。
	クマシ技術短期大学	日本の専門学校に相当するクマシ技術短期大学を訪れた。ここでもSVとして活動されている原田さんとお会いすることができた。原田さんは、ガーナでSV3回目という驚異の経歴の持ち主でとてもパワフルな方だった。4回目もSVとして違う国を訪れたいということをお話していた。 技術短期大学においても実験や実習が非常に少ないというのが問題となっていた。理論中心の授業で実習が少ないため、生徒は実際に機材を用いて操作ができないという。また、機材も整備されていないため思うように使えない。さらに大きな問題は、生徒の就職先がないということだった。インフラ整備がなされていないため、他国よりも産業育成能力が低い。大学を出ても就職先がないというのは大きな問題である。

	青年海外協力隊員、シニア海外ボランティアの方々との意見交換会	多くのシニア海外ボランティアや青年海外協力隊員の方が集まってくださり、たくさんお話をすることができた。誰もが輝いていた。世界で活躍する日本人がたくさんいることを知った。日本に帰ってから、子どもたちに途上国で活躍する日本人について伝えていきたい。
8 月 8 日 (土)	ベナ小学校	都市を離れて農村部のベナ小学校を訪れた。アクラやクマシは車の交通が多いため、比較的道路が整備されているが、都市部から離れるに連れて道はだんだん狭くなり凸凹になった。小学校は村の中にあった。学校とはとても思えない屋根だけの建物。机と椅子、そして黒板だけが置かれた教室。壁はない。開放的と言えば聞こえはいいが雨風は到底防げない。しかし、生徒たちは明るく元気だった。校長先生を始め村の人たちは知らない国から来た訪問者を温かく迎えてくれた。子どもたちの笑顔が忘れられない。天真爛漫とはまさにこのことだと思った。 ガーナ人教師とJVとして活動している後藤先生、田川先生、加勢先生の授業を参観した。3人のJVの方々は身近にある教材を使って、子どもたちの興味や関心を引きつけながら楽しい授業を行っていた。子どもと教師が一体となって授業を行っているように感じた。子どもを引きつける魅力的な授業。私も努力をしなければと思った。 昼食を挟み、午後からは私たちが授業を行った。私は、日本の相撲を紹介した。英語がうまく話せず四苦八苦しながらの授業だったが、こんなに楽しい授業は久しぶりだった。ガーナの子どもたちと直に触れ合うことができた。最初は、相撲をするのを恥ずかしがっていた子どもたちも次第に心を開いてくれた。とても授業とは言えない内容だったが、私にとっては一生心に残る貴重な体験となった。
8 月 9 日 (日)	中間振り返り	ホテルにて研修前半の振り返りを行った。頭の中を整理するという意味では、この日の振り返りはとても有意義な時間だった。自分の考えを整理したり、他の先生方の意見や感想を聞いたりしながら振り返りを行うことができた。日本に帰ってから、どのような形で子どもたちに伝えていくかしっかり考えていきたい。
	エルミナ城	かつて奴隷貿易が行われていたということもあり、城は重い雰囲気にも包まれていた。奴隷貿易は他国の侵略によって行われたのだとばかり思い込んでいたが、実際のところガーナ人がガーナ人に対して行っていたことを知り大変驚いた。多くの人々が閉じこめられていたという小さな部屋。そして足首につけられた鉛、首輪、奴隷に押される刻印を胸が締め付けられる思いで見た。実際にエルミナ城訪れて分かったこと、気付いたことがたくさんある。あの臭いは一生忘れられない。自分の目で見て肌で感じ、心で感じることの大切さに気づくことができた。二度と同じ過ちを犯してはならない。
8 月 10 日 (月)	青年海外協力隊員活動視察(服飾) 「グローバル・ママス」	ケープコースで女性の自立支援を目的に設立された NGO(グローバル・ママス)を訪れた。ここでは、フェアトレード商品の生産及び販売を中心に行っていた。青年海外協力隊員の吉富さんの活動も拝見することができた。お店はケープコースの町にあってもどこか日本やヨーロッパを思い出させる雰囲気だった。

資料 1 帰国報告書

	ホームビジット	グローバルママスと契約をしている家庭を訪ねた。ガーナの一般家庭と聞いていたのでどのような暮らしをしているのかとても関心があった。私が訪れた家庭は、裁縫を担当している家庭で、両親と0歳の赤ちゃんがいる家庭だった。そこでは、3人の縫子さんと1人の研修生が働いていた。年齢が近いこともあり、縫子さんとはすぐに仲良くなった。グローバルママスでは、契約者との給料についてすべてオープンにしていると話していたが、契約している家庭が雇っている縫子さんに支払われる給料については、各契約者に任されているため教えてはもらえなかった。 夕食前にガーナ人と一緒にダンスを踊り、ジャンベ(民族楽器)を叩いた。2時間ほどの時間だったがとても楽しかった。ぜひ、体育の授業でも取り入れたい内容だった。スポーツ・音楽は国境をも越える。そう感じた一時だった。
8月11日 (火)	JICA技術協力プロジェクト「公務員能力強化計画」視察	専門家の黒田さんにプロジェクトの概要を聞いた後、施設を案内してもらった。私たちが訪れた時には、ちょうど各省庁から官僚たちが研修に来ており、研修の様子を見ることができた。また、研修では、日本と同じようにグループワークが多く取り入れられていた。今回は、グループごとに車を乗せても崩れない橋をつくるという課題だった。試行錯誤を繰り返しながら協力して橋をつくっていた。国を動かす官僚であっても、私たちと同じように研修ではグループワークを行っていることに驚いた。やはり、どこの国においても連携、協力は大切であると感じた。
	JICA 職員との意見交換会	多くの事務所職員の方々とお話をすることができた。ガーナで感じたことを参加者全員が述べた。それぞれ色々なことを学んだことがわかった。人それぞれ物事を見る視点も違う。様々な意見や感想を聞くことができ大変勉強になった。これから日本の子どもたちに伝えたいことが山ほどある。
8月12日 (水)	在ガーナ日本国大使館	大使はとても気さくな方で色々なお話をすることができた。ガーナとは思えない豪華な建物。内装もどこか日本の雰囲気漂っていた。

平成21年8月28日

平成21年度 教師海外研修研修報告書

派遣国：ガーナ

学校名：茨城県立並木高等学校

担当教科：英語

氏名：曾根 典夫

海外研修に行ってきました！

(1)良かったと感じた海外研修の内容について(上位3つ)

内容	理由
1. JICA専門家・シニア海外ボランティア・青年海外協力隊員・JICA事務所の方々との出会い	青年海外協力隊員の方々の活動の一部を見たり、実際に赴けない地方の隊員の方と、現在の活動内容やその思いを聞くことができた。「青年海外協力隊」が身近な存在であることに気づいた。彼らは困っている人のために何とかしたい、という純粋な気持ちで任務に当たっていることが分かった
2. ベナ小学校	現地の先生方と同じ場所で同じ児童を相手に授業をし、同じ釜で茹でた食事をとることができた。幹線道路から外れた村の学校の状況をこの眼で見て、そこの人たちを触れ合えたことがうれしかった。
3. ホームビジット	縫い子さんの働く現場は薄暗いところであり、細かい作業が長時間に及ぶことでの眼の疲労を、短時間ではあるが実感した。一日あたりのノルマを聞き、家庭の様子を体験すると言うよりは、労働の現場を見せていただけたことが、「働く子ども／女性」をテーマに掲げる自分にとってはぴったりの場所であったため。

(2)収集した資料／教材について

- 地方新聞や本・教科書
- 無償資金援助で作った施設の写真
- 働く人々の笑っている顔と無表情の写真
- 「清涼飲料のパック」とそれを再利用した「リサイクル・ペンケース」
- HIV 感染者の生活向上のために製作している「携帯ストラップ」とその製作をしているところの「写真数枚(隊員含む)」
- 労働の対価を知るための「カカオ豆」、「ガーナ産チョコレート」、「アシャンテ・ケンテ(織物)」、「バティック(ろうけつ染め)」、「バティックを使ったバック」

(2)授業／学校生活への活用について

国際理解教育というと、欧米諸国に目を向けがちだが、アフリカ諸国にも目を向け、特に発展途国の問題や途上国で活躍する青年海外協力隊の姿などを取り入れ、授業を展開していこうと考えている。そのときに取り上げようと考えている教材は以下のとおりである。

- 労働について
 - 働く人々の笑っている顔の写真と無表情の写真を見て、そこからその人の生活を想像してみる。
- 労働の対価
 - 「カカオ豆」、「ガーナチョコレート」、「アシャンテ・ケンテ」「バティック」、「バティックを使ったバック」

ろうけつ染めを 1 回したものと 2 回したものとでは、手間がかかっているのに値段を変えてもよいのだろうが、どちらも同じ価格で販売をする。理由は隊員にも分からないようだ。職業訓練だからかもしれないが、なぜ同じ価格で販売をするのかを考える材料にはなる。

○HIV 対策関連活動

HIV 陽性者の生活向上のために製作している「携帯ストラップ」とその製作をしているところの「写真数枚(隊員含む)」を見せる。HIV 陽性者は劣悪な偏見のもとにいる。例えば、障害者は悪魔に乗り移られた結果だと考えられ、周囲の人々からは無視される。

○環境問題について

「清涼飲料のパック」とそれを再利用した「リサイクル・ペンケース」

小学校訪問、教員養成校訪問をした際、現地隊員の方が教材作成のために、共通して使用しているものが、コストをかけずに簡単に入手できるものであった。

○地方新聞

求人広告を読ませることで、どのような職種の求人があるかを知らせる。

(3) 研修に関する全般的な所感／意見について

全ての訪問先で歓迎を受けたことで、JICA の方や青年海外協力隊員を含めた日本人がいかに信頼を得ているのかを実感した。今回は、全ての行程において2名の青年海外協力隊員に同行していただいた。多くの職種の隊員との語らいいだけではなく、現地の小学生とのふれあい、職業訓練校の生徒と一緒にパティック(ろうけつ染め)作りの体験、フェアトレード製品の縫製を一般家庭訪問で体験するなど、「教師海外研修」でなければならないことをさせていただきました。その中でも現地の学校で子どもたちと触れ合う時間を作って欲しいという、われわれの希望をかなえてくれた青年海外協力隊の後藤隊員、現地校の生徒・職員、そして JICA 関係者の皆様に感謝いたします。目上の人に対する礼儀、学ぼうとする意欲、そして子どもたちと一緒に興じたサッカーでは、驚くべき身体能力の差をまざまざと見せつけられました。

生活が不便なところを訪れるによって、自分が普段“あたりまえ・普通”に感じていることがその国では違うことが多々あります。電気や水道の通っていない村での子どもたちとのふれあいや、その間も水汲みをする女性たちの姿がとても印象的でした。そのような場所であるにも関わらず、隊員の方は困っている人のために何とかしたいという思いで活動に取り組み、時には自分の思いが相手に伝わらずに、自分が必要とされていないのではないかと悩んでいる方もいました。困難な状況の中、彼らの活動が草の根として日本のイメージを高めつつあるのではないかと思います。書籍で読む知らない人の活動よりも、知りあいになった人の活動の話には説得力がありました。

研修の統括をしてくださった JICA 筑波の甲田さん、宮本さん、現地での研修をコーディネートしてくださった JICA ガーナ事務所の北原さん、飯島さん、同行してくださった岩佐隊員、田川隊員、後藤隊員にこの場を借りて御礼申し上げます。

次年度研修に向けて～さらに充実した研修のために～

(1) 派遣前研修について

① 第一次派遣前研修

○参加型ワークショップでは、国際理解教育に関する手法を教えてくださいました。欲をいえば、「開発教育指導者研修」ですので、その場に昨年度参加された先生方が複数名出席されて、私たちの指導に当たっていただけると、前年度の様子を知ることだけではなく、帰国後の「教師海外研修」がどのような性質のものなのかも理解しやすくなると思います。

○ガーナで活動をした青年海外協力隊経験者の方から任地の話を聞くことで、自分は本当にガーナに行くのだという実感を持つことができ、自分が行く目的を再確認する機会となりました。この日をきっかけに、アフリカ関連の書籍を読みすすめることに拍車がかかりました。

②第二次派遣前研修

- 質問内容を訪問先ごとにまとめる作業を通して、研修の目的や自分自身の取り組みがさらに明確になり、他の参加者とも意見交換をできたことが有意義でした。
- 出発の前日ではなく、その 1 週間前に第 2 次研修があればよかったと思いました。
- 「昨年度参加教員による実践授業紹介及び質疑応答」がありましたが、もう少し質疑応答の時間が取れるとよかったと思います。

③その他

- 一日に何種類もの活動が組み込まれており、ついていだけで精一杯のところがありました。できましたら、派遣前研修を 2 回ではなく、3 回実施していただけると参加者のひとりとしては嬉しかったと思います。今年度は 7 月 30 日に参加者のみで、参加者の勤務する学校に集まり、約 2 時間土産物を誰がどのくらい用意するかを分担し、持ち物リストを独自に作成して共有しました。

(2)海外研修について

- 現地に赴くのは大切だと実感しました。「蛇口から水が出ない。蛇口が家に無い。水汲みをしなければならない。水場が遠い。水汲みをするためには学校へ行く時間もない。道路が悪い。穴だらけで大きな事故がいつ起こってもおかしくない。」これらは日本にいるときには考えられないことでした。教育とインフラは遠いようで近い問題であることが、道路と水汲みの現場を見ていて実感しました。
- 任地での隊員活動における共通する状況は「モノが不足している」ということでした。彼らは手に入りやすい物を探したり、またはそれをアレンジすることで、教材化していました。隊員独自のものを作るためには、「本物」を知っていなければならないのではないかと思います。そのことが、今の私たちには少し体を動かさばできます。そのことをこの視察をとおして教えていただきました。叶えたい思いさえあればほとんどのことが実現可能である状況を自分たちは認識していない。開発途上国ではそれが思ってもできない環境にあるようです。
- 現地で見学させていただくだけでなく、こちらから小学生に日本の文化について考える機会を持ち、それを紹介できる場がもてたことは良かったと思います。
- いろいろな職種の隊員の方々と話をしたり、現場を訪問したり、バランスよく視察をさせていただきました。
- 記者の方は普段接することの無い方で、自分たちとは違った視点を持っておられました。今回の同行は参加者にとっても物事の見方や質問のしかたなどの勉強になったと思います。

(3)その他全般(JICA への要望)

- 2 回目の研修は渡航一週間前あたりに設定していただけると助かります。

第一次研修:6月27日頃

内容 午前:平成 21 年度と同じ

午後:青年海外協力隊経験者による体験談と国事情

第二次研修:7月中旬(渡航一週間前あたり)

内容 午前:「昨年度参加教員による実践授業紹介及び質疑応答」

質疑応答の時間をもう少し長めに設定

海外渡航のしおりを配布して、用意するものの確認

青年海外協力隊経験者による体験談と国事情(第 1 次分をこのとき)

このときは午前で終了

第三次研修:出発前日

内容 午前:青年海外協力隊経験者による体験談と国事情

外国人研修員の研修内容のレクチャーと現地語講座

できれば青年海外協力隊経験者同席でランチなど

午後:プレゼン、補足説明・ディスカッション

○『海外旅行のしおり』については、できれば出発 1 週間前には手元にあると助かります。これは前年度の報告書にもJICAへの要望欄に書いてありました。

○宿泊施設について

- ・お湯が出ればそれでかまいません。
- ・今回は最終日に突然のお願いでしたが、隊員が使用するドミトリーを訪問させていただきました。できれば、現地到着して2日目、または最終日には同行した隊員の方と一緒に宿泊させていただくのもいいかと思います。

○一日の振り替えりの時間について

隊員さんと食事を外でとると、ホテル着が21:30を過ぎることが何度かありました。できれば21:00には戻り、振り返りの時間をもう少し長くとれるとよかったのかもしれない。

(4) 今後の参加者へのアドバイス

○体調管理は大切です。現地では出される食事の量が多いことがあります。出された食事は残さないように食べる日本の文化と、全部は食べずに残す文化が国によってはあると思います。無理をせずに自分のお腹と相談し、時には同行する現地の方とも相談して思い切って食べ残しをすることも必要かと思いました。

○現地語は自己紹介ができる程度には覚えておくといと思います。それが訪問させていただく相手に対する礼儀のようにも思います。現地語で挨拶をしたときに一番驚いていたのは、隊員さんでした。

○黄熱病の予防接種をした場所で、同時に抗マラリア剤(メフロキン)を購入するとよいと思います。合計2万円ですが、安心料だと思います。現地でも入手できますが、職員の方に余計なお世話をかけることになるので、薬はあらかじめ日本で購入し、出発の1週間前から服用することを勧めます。

○隊員さんへの手土産について

タイミングとしては、出会ってからできるだけ早めに渡すといと思います。和食(レトルトカレー、レトルト雑炊、ふりかけ、お吸い物500円相当)を持参しましたが、本当に喜んでいただきました。いろいろな方にお会いしますので、余るぐらい持参した方がいいと思います。十分かなと思う量プラス5。余ったときには、最後に同行している隊員さんに渡せば喜んで受け取っていただけたと思います。

各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと⇒それを何につなげるか？その他所感
8月4日 (火)	JICA ガーナ事務所	健康管理員の方からのマラリア感染防止についての諸注意。甘く考えない方がいいとのことで、高額に思えた抗マラリア剤の金額が安心料に変わった。
	野口記念医学研究所	寄生虫プロジェクトで日本での研修経験を持つ方からの講演会。教育が不十分なため、迷信でマラリアの原因を決めてしまう。啓蒙活動の結果、大人よりも子どものほうが、マラリアの原因等についても蚊であることが分かってきている。 ※低学年向けの読み物教材においても、マラリアを防止するためには蚊が原因であることを繰り返し記述し、「掃除・網戸設置・草刈・水溜りを放置しないこと」を上げ、対応策まで示している。
	野口記念資料室	伝記で読んだときに挿絵で見た実験室を実際に訪問していることに興奮を隠せなかった。その上博士が使用したとみられる顕微鏡を直に触れることができた。

8月5日 (水)	テマの漁港	JICA のロゴが消えている。団体が運営管理をしているところは、きれいになっているが、漁港に立ち寄るのが中国船・韓国船が多いため、日本の援助で出来た漁港であることが一般に知られていないところが問題である。団体の代表からも日本から更に援助が欲しいというメッセージを受ける。市場の方は雰囲気が違う。＊死亡事故を含め、事故が多いようだ。
	カカオ農園	カカオの実のつき方、豆の発酵と乾燥。どれだけの手間がかかるのか想像がつかない。8日に訪問したアシャンテ州の農村でカカオ豆を天日干ししていた女性に聞くと、これがファミリービジネスなの、とさりりと言っていた。ただ具体的な収入にまでは話すのには時間が必要かと思われた。 ※小学校低学年向けの英語の読み物教材では、子どもが父親の知り合いの人のカカオ農園を手伝うことが当たり前に書かれている。また大人になったら自分のカカオ農園を持ちたい、ということも書いている。カカオ農園の手伝いが当たり前であることを示す小冊子がある。
8月6日 (木)	青年海外協力隊員 活動視察(手工芸)	15歳から20歳ぐらいまでの女性が全寮制で職業の訓練を受ける施設である。義務教育がガーナで無償化された約10年前の狭間にいる年代である。ほとんどが農村出身であり、教育を受けていない生徒がおり、入校当初の識字率は約10%。しかも、自ら字が読めないことを言わないため、指導者が事情を把握するのに時間がかかる。ドイツ滞在経験のある理事長が毎日、怒号を上げて生徒を指導している。貧困から這い上がるためには、ガーナ人特有のゆったり感を捨て去るしかないのだという。夜も仕事が終わるまで寝せない。隊員によると、「スバルタ」と言う言葉が当てはまる場所である。
8月7日 (金)	ウェズリー教員養成校	広大な敷地に修繕費用が月あたり約3万円。物を作ることにお金は出しても、メンテナンス費用が無く、壊れたところはそのままであることがほとんどである。メンテナンスが不十分な実態は、この研修旅行をとおして全体的に見られる。 シニア海外ボランティアの方は教材作成において、容易に安価で入手できる材料を使うところを工夫されていた。トイレトペーパーの芯でさえ、個数には気を遣っていた。コスト意識の高さに驚いた。
	クマン技術短期大学	元電気技師の方である。「学校で習うことは時代の流れから一昔遅れているが、ベーシックな内容であるため、どのようなものにも応用が可能である。一度やったことがあるという感覚は、物事のとりかかりとしては大切だ」というシニア海外ボランティアの方の言葉が印象に残った。しかし、国内には仕事・就職先が無く、卒業しても独立して修理屋になるのがほとんどであるようだ。
	青年海外協力隊員、 シニア海外ボランティア の方々との意見交換会	任地訪問をできない隊員の方々との懇談。HIV 感染者に対する生活向上プログラムについての活動内容を聞いた。

資料 1 帰国報告書

8月8日 (土)	ベナ小学校	終日ベナ小学校で、児童や先生方と過ごした。昼食、児童への授業、サッカーの試合。電気・水道・ガスは無い。学校はあるが、ガラスは無い。サッカー場はあるがボールが無い。物が無いということはどういうことかを実感した場所である。 ※学校の施設や生徒の表情、そこで授業をしている自分の姿を見せることで、現地の子どもたちが少しでも身近な存在になるようにつとめる。
8月9日 (日)	中間振り返り	振り返りを、同行隊員のかたと一緒に行った。隊員の方の活動を見ていて感じたことは、外からいろいろな物を持ち込むというのではなく、そこで誰でも簡単に入手できるものを使って、自分流のアレンジをしている点である。そのためには、今日本にいるときには、できるだけたくさんの「本物」を見ておく必要があるのではないかと感じた。
8月10日 (月)	青年海外協力隊員 活動視察(服飾) 「グローバル・ママス」 ホームビジット	フェアトレード製品を作る NGO 団体の理念について聞く。規格の統一を徹底し、仕上がりのよいものを海外輸出にまわす。NGO 団体で働く人の給与は保障されているようだが、労働者がさらに労働者を雇う場面があり、その人たちに対して適正な給与を支払っているかどうかは疑問が残る。
8月11日 (火)	JICA技術協力プロジェクト「公務員能力強化計画」視察	「チームを組んで、情報を共有しあったら、自分が相手からリスペクトされなくなるではないか！」実際にこのプロジェクトに出席している上級公務員の方による講師への意見である。情報を専有することが自分の価値を高め、維持することと考えられる風潮を垣間見た瞬間であった。
	JICA 職員との意見交換会	数人の調整員の方と話をし、彼らの青年海外協力隊員時代の活動について聞く。教師海外研修参加前までは遠い存在だった青年海外協力隊が非常に身近なものに感じ、人のために何とかしたいという彼らの気持ちを以前より強く共感できるようになったと思う。
8月12日 (水)	在ガーナ日本国大使館	大使公邸内玄関にあった野口英世の大きな肖像画と大使とリラックスした雰囲気の中での報告ができた。

平成21年8月28日

平成21年度 教師海外研修研修報告書

派遣国：ガーナ

学校名：茨城県立守谷高等学校

担当教科：数学

氏名：渡邊 憲優

海外研修に行ってきました！

(1)良かったと感じた海外研修の内容について(上位3つ)

内容	理由
1. ベナ小学校訪問 (授業参観、授業実践、現地教員との意見交換会、児童との交流)	ガーナ人教師による普段の授業を見られることができ、隊員の授業工夫が勉強になった。ガーナの子ども達と一緒に遊び、ふれあうことができたから。
2. 青年海外協力隊員活動視察 (手工芸)、バティック(ろうけつ染め)作り・施設内見学	バティックというものがどういう物で、どういった過程を経て作られているのかを実体験として理解できたから。自立支援学校の取り組みや今後の活動内容の話を聞いた。
3. ホームビジット	ガーナ人の生活環境を少しでも見られた。子どもの学校に行っていない間の時間の過ごし方を見られたのが良かった。子ども達と一緒にふれあう時間があって良かった。

(2)収集した資料／教材について

- カカオの種(チョコレートの原料)
- 白い布から作成したバティック生地
- 小学生の算数の教科書、高校生の数学の教科書
- ガーナで問題となっているゴミの1つ(アイスの袋)、そして再利用した物
- ガーナのトラベルマップ
- ウェズリー教員養成学校で中野隊員が作成した実習・実験道具
- ベナ小学校6年生との手紙での交流(つながり)
- JICA職員、専門家、シニア海外ボランティア、青年海外協力隊員のコメント
- ガーナの生活等を写した写真
- ホームビジット先での子どもが描いてくれた絵

(3) 授業／学校生活への活用について

- ガーナがどんな国か、地理的なところから、生活(衣食住)等を写真やゲームを用いて学ぶ。
- 実際のカカオの種を用いてガーナとチョコレートの関係やカカオについて理解する。
- 一生懸命働いている子ども達の様子を見せ、みんなはどうか考えさせる。
- 奴隷貿易について、エルミナ城の写真や様子を伝え、その後、どう感じたかを考えさせる。
- アフリカでの病気・感染症、マラリア等の病気に対しての対策と現状を学ぶ。
- ガーナの子ども達が学んでいることを実際の教科書を用い体験させる。

(4) 研修に関する全般的な所感／意見について

まず、この研修に携わってくれたすべての人に感謝している。とても貴重な経験をさせていただき、見るもの、体験するものすべて勉強になった。行く前のアフリカ大陸ガーナに比べ、実際に訪れてみてからのガーナではイメージがずいぶん変わった。やはり、その国を実際訪れ、その国の食べ物を食べ、その国の人とふれあい、町を歩き、生活スタイルを少しでも経験できるということがとても重要だった。経験に優るものはなく、そこで自分が感じたことを素直に生徒に伝えようと感じた。

青年海外協力隊員、シニア海外ボランティア、専門家の方々の同じ日本人としての意見を聞くことができ、その時間が多かったのがとても良かった。そして、みなさんの仕事に対する情熱、ガーナをもっともっと良くしようというボランティアの気持ちを感じ、いろいろ考えさせられた。

また、どの地域の子ども達も同じ教育が受けられるようになり、将来の夢が叶えられるような世界になってほしいと感じた。そして、日本の子ども達は、ガーナの子ども達よりも夢が叶いやすい環境にいるということを伝えたい。ガーナという国を訪問し、いろいろと見たり、感じたりしたことを通して日本の良さ、ガーナから学ぶことも多々あった。

私の役割は、今回の研修でのことを一人でも多くの人に伝えていくことだと改めて実感した研修だった。

来年度研修に向けて～さらに充実した研修のために～

(1) 派遣前研修について

① 第一次派遣前研修

- 他の参加者とコミュニケーションをとるようなワークショップが多かったのが良かった。
- 昨年度参加者の話を聞き、実際に使用したワークシート、パワーポイント等を見ることができ、授業するときのイメージが少しでもできた。
- ガーナで活動していた隊員の話はとても良かった。ただ、自分たちがガーナのことについて知らなすぎたので質問が上手にできないのが残念だった。
- 教師海外研修報告書をもっともっと活用した研修の方が、海外研修中のイメージや見るポイント、購入する物、体験したいこと等が具体的に想像し、考えられると感じた。そして、授業のイメージもつきやすい。もちろん、ラオスの先生の話も良かったが、さらにガーナの先生の話も聞けたら大

変充実した研修になったと思う。

②第二次派遣前研修

- アイスブレイキングなんかも取り入れてくれて、学校現場でも活かせるものがあり勉強になった。
- 前回のラオス教師海外研修に参加された先生の話聞いて、固定観念をなくさせたり、貧しいだけでなくこないところを伝えたいという考えがとても印象的だった。メディア的な伝え方でなく、生徒自身が考え、発見できるような伝え方をしたいと感じた。
- 日本で何を伝えたいのか、再確認する時間が多くとられていたのが良かった。しかし、この研修前に、ある程度のテーマを絞らせておいた方がこの研修をさらに充実させられたと感じた。

(2)海外研修について

- 国際協力という現場を見ることができ、協力の仕方というのはいくつもあるというのが分かった。そして、ガーナで実際に活躍している青年海外協力隊員、シニア海外ボランティア、専門家の人たちと話をすることで、自分たちでは見えないガーナや国際協力の意味について考えさせられた。自分たちと同行してくれた隊員さんが2人もいるということが大変心強かった。
- 隊員さんのおかげで、ガーナの子ども達の授業を参観したり、一緒にサッカーをしたりすることができ、今まで遠くに感じていたものがすごく近くなったように感じた。ふれあう時間が多ければ多いほど、そこから学ぶことは多い。
- 生徒には、国際協力、生きることの素晴らしさ、日本が普通ではない等いろいろと伝えたい。そして、自分の目で見て、経験することが一番の真実だということを分かってほしい。

(3)その他全般(JICA への要望)

- JICA 職員、JICA 関係で多くの人が国際協力の現場で活躍されているため、私たち日本人をどの国でも温かく迎えてくれるのだと思う。今回の研修・旅に携わってくれたすべての人に感謝の気持ちを改めて伝えたい。そして、このような貴重な経験をさせていただき本当に感謝している。
- 国際協力というと、その国に何かを与え、寄付金を集める等、深くまでは知らなかった。しかし、今回の研修を通して、その国で今後も持続して続けられる物を用いての技術支援や無償資金があるということが分かった。その素晴らしさをもっともっと多くの人に伝えたい。

(4)今後の本研修参加者へのアドバイス

- 私は、校務多忙を理由に教師海外研修報告書をさりとしか読んでいなかった。事前に熟読しておくことで海外研修中の資料集めや見るポイントが一目瞭然である。帰国後の授業についても明白なイメージがしやすいため、必ず読むことを進めます。
- 1日の終わりに、フィードバックする時間をつくると思います。
- いろいろな視察場所にお土産をわたすと思うので、多めに持って行くことをおすすめします。

各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと⇒それを何につなげるか？その他所感
8月4日 (火)	JICA ガーナ事務所	JICA 職員の方々が、ガーナの気候や歴史、援助の概要、安全対策、医療等について話をしてくださった。その中でもマラリアになったら死にますからという話を聞き、薬は飲んだ方がいいと感じた。また、ガーナで石油が見つかったのでこれからますます景気が良くなるという話もあった。
	野口記念医学研究所	この施設でガーナの最先端の研究が行われているので、日本は素晴らしい国際協力をしていると感じた。HIV・マラリア等、ガーナの医療には課題が多い。そのマラリアについての正確な知識を伝えようと、活動している様子の話や資料を見て、マラリアという病気がガーナで課題となっていることを実感した。
	野口記念資料室	野口英夫博士が実際に使用していた研究用具等を見させて頂き、福島県で見た物とはまた違った印象を受けた。小泉元首相が訪問したときの話などもJICAの方からあり、野口博士の活躍の素晴らしさを感じた。
8月5日 (水)	テマの漁港	JICA の無償資金協力で作ったことにより、多くの人が働き、そこに集まるため大変良い支援だと感じた。人があふれ商業として大変いいと感じたが、ゴミ問題はどうかしていかないと汚染問題へとつながりかねないと感じた。日本が携わった漁港を、日本人が利用しないのは少し残念な感じがした。
	カカオ農園	カカオの実のでき方が一番驚いた。チョコレートの原料をこのように育て、実をとるのも大変だと感じた。
8月6日 (木)	青年海外協力隊員 活動視察(手工芸)	ガーナに職業訓練を通した自立支援学校を作り、子ども達に生きていく術を教えたいと感じる、あつい人がいるのに心をうたれた。バティック(ろうけつ染め)作りを生徒と共に作れたのが思い出になった。バティックといわれ何がなんだか分からなかったが自分で体験してみても本当によく分かった。蠟を使用するのも作ってみないと分からなかった。かった。日本でも、バティック生地を用いた物が出回ってもおもしろいと感じた。

8 月 7 日 (金)	ウェズリー教員養成校	高校を卒業するときに全国統一試験を受けその結果で、進学先が決まるというのが驚いた。ガーナの授業は、理論中心だと知った。隊員の方が、ガーナで手に入る物を中心に実験・実習用具を作成しているのが大変素晴らしかった。そして、援助を受けるのは簡単で、その後、援助がなくなってからも持続できるかが重要とおっしゃっていたのが大変印象的でした。ガーナ人教師はプライドが高いので、雑用をしない人が多いということも知った。 学生はとてもまじめだが自分で考えられない生徒が多いらしい。私も、生徒に考えて行動できるような人になってほしいと思う。
	クマシ技術短期大学	インフラ整備が遅れているのが、いろいろなところで障害になっていると感じる。就職率も良くない、しかし伝統のある学校なので、生徒は多い。就職活動は各自で行い、町の修理関係が多い様子。
8 月 8 日 (土)	ベナ小学校	こんな道の先に村があるのかと思うようなところを通った。隊員の方が初めて村を訪れたとき、村人が逃げ出したという。そして、自分たちが村を訪れた外国人 2 人目以降らしい。もちろん水道・電気は通っていない。 日本との教育環境にこれほどまで差があるのだと生徒に伝えたい。授業はすべて英語で行うので、ガーナ人は英語が話せる。ガーナでは先生、親、年長者を敬うことができる。その中でも先生の影響は強いらしい。ガーナの先生は理論中心が多く、具体的・視覚的に考えさせるようなことが少ない。3 人の隊員さんは、現地の物で、できるだけわかりやすく工夫をこなしっていて素晴らしかった。見習わなければならない。 ガーナの先生とチームを作り、小学 6 年生とサッカーの試合をした。一緒にスポーツをすれば言葉や国の違いなんてまったく気にせず、距離がぐっと縮んだ気がした。サッカーボールのプレゼントはとても喜んでた。 この村の現状や教育、子ども達を見られて本当に良かった。日本との違いが多く、また、学ぶことも多かった。
8 月 9 日 (日)	エルミナ城	奴隷貿易という言葉や少しの知識はあったが、その場所を実際に見ることで言葉では言い表せない気持ちになった。そして、この事実を日本の生徒にも伝え、感じてほしいことが多々ある。綿や金の貿易よりも奴隷貿易の方がお金になるため栄えたことに驚いた。世界遺産とは思えない、何か物足りなさも感じ、観光で来る人に対し、改善されるべきところがあるのではと思った。

8月10日 (月)	青年海外協力隊員 活動視察(服飾) 「グローバル・ママス」	グローバル・ママスの活動を見たり、商品を見ることで、フェアトレード商品という物を今まで以上に意識するきっかけとなった。オフィスはガーナとは思えない雰囲気である。ガーナのゴミの多さを思い、日本人らしいエコな発想を利用した商品が多数あった。
	ホームビジット	丘の上にある、上流階級と思われる家でガーナの家庭を体験した。近所の子も一緒になってみんなで遊んだ。ガーナの子も達が遊ぶ歌やゲーム、ダンスをいろいろとしたり、見せてくれた。自分が子どもの時のように、ガーナの子も達は、地域の中で自然といろいろなことを学んでいる気がした。日本も、そのころに戻ってほしいと感じるときが多々ある。 ガーナ料理のフーフーを少しではあるが手伝った。野菜の皮等の食べないところは山羊のエサになる。ちなみに、ガーナの人はとてもよく食べる。体型がいい奥様たちが多い。残った骨なんかは、犬のエサになる。ガーナには無駄が全くない。
8月11日 (火)	JICA技術協力プロジェクト「公務員能力強化計画」視察	ガーナにも日本のように研修というものがある。この研修は、企画する側が選んだ人に来てもらうというスタンス。ガーナの課題の一つである、時間にルーズなところがここでも問題になっているらしい。 研修の内容は、日本でも行われているものが多いようだ。社会人に必要な5Sもガーナで教えていた。そして、一人ではできないこともチームになったらできるということ、これは世界共通のようだ。 ここの施設は、JICA とガーナ政府が上手に意見を交わし、協力し、きれいしたようだ。維持に関しても他の施設よりハッキリと役割ができていようだ。
8月12日 (火)	在ガーナ日本国大使館	大使館に入れただけでなく、大使にお会いでき、とても今までのガーナ研修とはまるっきり異なる雰囲気でした。いろいろな話ができて、一生の思い出になった。 また、大使館はとても立派でしたが、すごく細かい角を見ると、壁の塗装が雑だった。やはり日本人というのは細かく、世界に通用する技術を持っているのだと異国を知ることで実感する。

◆ 世界を見つめてみよう ～ガーナってどんな国？～ ◆

氏名	宮本 いみ子
学校名	茨城県石岡市立高浜小学校
実践教科	総合的な学習の時間
時間数	各学年3時間
対象学年	4年生・5年生・6年生
対象人数	28人・17人・21人

カリキュラム

■ 実践の目的

国際理解教育は教科としての位置づけがなされていないので、総合的な学習の時間の中で取り組むことが多い。学習の進め方は、本やインターネットを中心として外国の暮らしや文化を調べるなど、とかく「調べ学習」になりがちである。また、今年度から新たに5・6学年に外国語活動の時間が加わったが、AET(Assistant English Teacher の略。学校で英語学習を助ける英語を母国語とする外国人の先生)と一緒に歌やゲームで楽しく英語活動を行ってはいけるものの、児童自身が明確な課題意識をもって取り組んでいるとはいいがたい。

国際理解教育を推進するためには、まず私自身が世界の様々な様子に目を向け、関心を持つことから始めなければならないと思い、今回の海外研修に参加させていただいた。ガーナではたくさんの人々との出会いを通じ、いままで知らなかったガーナの国の光と影の両面を知ることができた。また、JICA から派遣されている青年海外協力隊員の皆さん、シニア海外ボランティア、専門家の方々とお会いし、話をうかがうことができたことも貴重な経験となった。

授業の実践にあたっては、対象が小学生なので、青年海外協力隊の活動をはじめとして、自分の目で見て感じたことを児童に伝え、外国に対する興味を高め、さらに児童自身の現在の生活について振り返るきっかけにしたいと考えた。

そこで、下記3点を目的として取り入れた。

- ① ガーナについて知り、興味・関心を持ってもらうこと
- ② ガーナと日本との生活の違いを知り、自分自身を振り返るきっかけにってもらうこと
- ③ JICA の活動について知り、世界へ目を向けてもらうこと

楽しく学習に取り組めるように、写真を見たり、楽器の音を聴いたり、お土産に持って帰ってきた実物を触ったりなど、五感を使った学習を多くすることにした。また、グループ活動の時間を多くとり、友達同士で学び合うようにし、児童の意見や感想を全体で共有できるようにした。

■ 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
【1時限目】 ガーナについて知ろう ねらい: ガーナがどのような国なのかを知り、興味・関心をもつ	・民族衣装を見る ・ジャンベの演奏を聴く ・ガーナの写真を見ながらガーナの人々の暮らしを知る ・感想を発表する	・写真、世界地図 ・ガーナの衣装 ・ガーナの土産品 ・ジャンベ(楽器) ・CD(アフリカの音楽)
【2時限目】 ガーナとはどんな国だろう ねらい: ガーナと日本との生活の違いを話し合い、自分たちの生活を振り返る	・写真を見て、気づいたことを話し合う ・自分たちの暮らしとの違いについて話し合う ・自分自身の生活を振り返る	・写真 ・ガーナの木歯ブラシ ・ワークシート
【3時限目】 ガーナで働く日本人について知ろう ねらい: JICAについて知り、ガーナで働く日本人がいることを知る	・野口英世について知る ・JICAについて知る ・青年海外協力隊の活動について知る ・感想をまとめ、発表する	・写真 ・ワークシート

授業の詳細

【1時限目】ガーナについて知ろう

(1) 授業の流れ

まず、教室に入る時にガーナの民族衣装を身につけ、BGM にアフリカの太鼓の音を流しながら、チュイ語であいさつをした。その後、学校の音楽室にあるジャンベを実際に演奏し、その音を聴かせた。続いて、ジャンベを製作している現地の写真を見せ、ジャンベには山羊の皮をはることを説明した。そして、児童にもジャンベや現地で購入してきた他の打楽器を実際に演奏させた。

次に、ガーナの名称がついている日本のチョコレートのパッケージを見せ、カカオの実が木になっている写真を見せた。ここで、ガーナという国名を知らせ、世界地図で位置を確認した。最後にガーナの衣食住が分かりやすい写真を提示した。

(2) 児童の反応

○民族衣装を見て

- ・わあー。変わった模様だ。
- ・涼しそう。
- ・日本じゃない国の服だ。

○チュイ語での自己紹介を聞いて

- ・えー、何て言っているの。さっぱり分からない。
- ・聞いたことのない言葉だ。外国の言葉だ。先生、どこで覚えたの？

○BGM の太鼓の音色を聴いて

- ・きっと、お祭りのときの太鼓だよ。

- ・テレビでアフリカの国を紹介しているときに流れていたと思う。

○ジャンベや他の打楽器を演奏して

- ・ジャンベはたたき方が難しい。
- ・不思議だな。山羊の皮には見えないよ。堅い。
- ・マラカスも手作りだよ。ひょうたんから作ったみたい。
- ・くるみの鈴だ。からを使っているから、エコ楽器だ。リサイクルだね。
- ・いろいろな楽器がある。お祭りをやるときに使っているのかな。

○カカオの実が木になっている写真を見て

- ・葉っぱがない。何で木に実がくっついているの。
- ・チョコレートの箱の絵と同じだ。この実からチョコレートができるのかな。
- ・ラグビーボールの形だ。一つが大きい実なんだね。
- ・チョコレートの色をしてないよ。でも、食べたら甘いのかな。

○世界地図でガーナの位置を確かめて

- ・アフリカだ。暑い国だ。
- ・何時間で行けるの。飛行機ですぐ着く？

○ガーナの衣食住の写真を見て

- ・肌の色が黒い。髪が短い。
- ・サンダルを履いている。
- ・女の人には長いスカートをはいて、頭に布をかぶっている。
- ・子どもが物を売っている。
- ・赤ちゃんを布で包んでおんぶしている。
- ・食事を手で食べている。食器が大きい。
- ・地面に物を置いて売っている。魚とか、冷蔵庫に入れなくて大丈夫なのかな。
- ・頭に荷物を載せて運んでいる。重たそう。
- ・小屋みたいな建物が多い。
- ・山羊や鶏が庭にいる。
- ・ケンテ(ガーナの民族布)やジャンベ(ガーナの民族楽器)など、今も手作りしている。

(3) 所感

最初に教室に一歩足を踏み入れた途端、「わーっ」という歓声があがり、やはり本物の衣装は子どもの目を引きつけるのだと実感した。外国の言葉を聞き、実際にその国の楽器を鳴らしていくうち、「いったい、どこの国だろう」とますます興味がわいてくる様子がうかがえた。

ガーナはチョコレートに名称が使われていたり、サッカーが強かったりということもあり、国名に聞き覚えがある児童は多かった。しかし、国の位置となると、アフリカ大陸の中のどこかであろうという予想はできても、正確に示せる児童はほとんどいなかった。アフリカの国々は日本にとって、未知の世界であると感じた。

児童はガーナの写真を熱心に見ていたが、特に関心が高かったのはカカオの実が木になっている写真であった。どうしてそのような実のつき方になるのか不思議だと、盛んに驚きの声を口にしていた。

小学生にとっては、目で見たり、音を聴いたり、実際に触ったりと、五感に訴える方法を、授業の中に取り入れるのは効果的であると感じた。

【2時間目】ガーナとはどんな国だろう

(1)授業の流れ

最初にベナ小学校の外観の写真を見せて、何をする場所なのか考えさせ、グループごとに話し合わせた。意見を出させた後、小学校であることを知らせ、村の学校生活の様子について説明した。それから、自分たちの学校とどう違うか考えた。(資料1)

次に歯ブラシ代わりの木片の実物をグループに1本ずつ配り、何に使うのか考えさせた。グループごとに話し合った結果を代表児童に発表させ、その後で歯ブラシとして用いられていることを説明した。そしてガーナの人々の歯が丈夫であること、菓子類をあまり食べないので虫歯になりにくいことなどを話した。

前時に見たガーナの衣食住の写真の中から、グループごとに興味のある写真を選ばせ、自分たちの暮らしとの違いを話し合い、自分自身の生活を振り返らせた。(資料2)

(2)児童の反応

○最初に小学校の写真を見て

・牛や馬を飼う小屋 ・物置 ・トイレ ・学校

○自分たちの学校と比べて

・古い ・床が土でできている ・トイレがない ・暗い
・電灯がない ・机やいすが古そう ・水道がない
・地震が起きたらつぶれそう ・壁が崩れている ・時計がない
・遊具がない ・給食がない ・水道がない ・特別教室がない
・教室には机といすと黒板しかない ・電気が通っていない
・天気が悪い日は大変そう ・先生の人数が少ない

○歯ブラシ代わりの木片を見て

・箸 ・地面に字を書くとき使う ・工作に使う ・火をおこす道具

○自分自身の生活を振り返って

・物がいっぱいあって便利 ・楽をしている ・子どもは働かなくてもいい
・お菓子やジュースなど好きなだけ食べたり飲んだりしている
・日本は平和で恵まれている ・塾とかなないからベナ小学校のほうがいい

(3)所感

多くの児童はガーナの衣食住や学校の様子を知ること、ガーナの生活や文化への関心が高まったように感じた。ガーナの村の小学校の写真を見て説明を聞いた後、いかに日本の学校の環境が恵まれているか実感した様子であった。普段、自分自身の生活を振り返るという機会はあまりないので、ガーナの生活と自分の生活との比較は、同じ子どもでも国が違うと暮らしぶりが違うということを知るよい経験になったと思う。

【3時限目】ガーナで働く日本人について知ろう

(1)授業の流れ

まず、千円札を見せ、「この人は誰でしょう？」と尋ねた。続いて野口英世について、どんなことをした人物であるのかを質問した。野口英世記念館で撮った写真を見せながら、その生涯について簡単にふれ、ガーナで黄熱病の研究をしていたことを説明した。

次に JICA について簡単に説明した。世界には開発途上国と呼ばれる国があり、JICA は開発途上国に対してどのような活動をしているかを知らせた。ガーナもそのひとつであ

ることを話し、実際にガーナで活動している青年海外協力隊の隊員について紹介した。ベナ小学校で授業をする後藤さん(小学校教諭)、バティック(ろうけつ染め)作りを指導する織田さん(手工芸)の写真を見せて、活動の様子を紹介した。

最後に青年海外協力隊の活動について感じたことや考えたことを書かせ、学習のまとめとした。(資料3)

(2) 児童の反応

○千円札を見て

・野口英世 ・偉い人

○野口英世について知っていること

・黄熱病の研究をした人

・福島県に野口記念館があって行ったことがある

・小さいときに手をやけどして、大きくなってから手術をして治った

・黄熱病を研究している途中、その病気になってアフリカで死んだ

○野口英世の説明を聞いて

・ガーナに記念館があると初めて知った

・ずっと昔に遠いガーナの国まで行ったのはすごい。こわくなかったのかな

・小さいころから努力する人

・アフリカの人たちのために黄熱病の研究を頑張ったので、記念館が建てられたのだと思う

○JICA の説明を聞いて

・開発途上国には困っていることがいっぱいある

・開発途上国には住みたくない

・世界にはまだ開発途上国がたくさんある

・JICA という言葉を初めて聞いた

・JICA は外国の人のためにいろいろなお手伝いをしている

・JICA は国の仕事をするとこ

○青年海外協力隊の活動の様子を聞いて

・遠い国でがんばっている人がいるのが分かった

・日本のほうが住みやすいのに、自分から希望して開発途上国に行くなんてすごい

・行った国の言葉や習慣とか、覚えなくちゃいけないことがいっぱいある

・仕事は大変そうだけど、楽しそうな感じがする

・隊員の人は日本の国の代表みたいだ

(3) 所感

小学生なので、JICA の活動については簡単な説明をするだけで精一杯であった。しかし、今年度から5・6年生の授業に週1時間外国語活動が加わったこともあり、特に高学年児童は熱心に耳を傾けていた。青年海外協力隊の隊員については「がんばってお仕事をしている人」というイメージが強かったようである。国際協力、海外でのボランティア活動という捉え方はまだ難しいが、大切な活動をしているということは伝わったと思う。

成果と課題

今回の授業実践を通して、児童にガーナの国について知ってもらい、自分たちの生活を振り返るきっかけ作りができたと思う。また、世界にはまだまだ開発途上の国があり、そのような国で日本人が現地の人たちのために様々な活動をしているのを知ったことで、以前より外国に対して興味・関心を持つようになったと思う。私自身も授業を重ねながら、児童と同じように様々なことを考え、現在の生活を振り返ることができた。

課題としては、情報の提示の仕方が難しかったことが挙げられる。自分がガーナに行って現地で感じたことを、できる限りたくさん伝えなかったのだが、提示しただけで終わってしまった部分もある。限られた時間内で、どの教材をどのように効果的に使うか、もっと工夫が必要であった。また、グループ活動を多く取り入れたので、その中での話し合いは活発に行われたが、その分、全体の場での意見交換の時間が少なくなってしまった。授業の展開に関しても、もう少し工夫すればよかったと反省している。

多くの課題や反省は残るが、今回の研修を糧にし、学んだことを生かしながら、今後も積極的に国際理解教育を進めていけるように努力したい。これからもできるだけ多く海外で見聞を広め、外国から日本に来ている人たちと交流していきたいと思う。

<資料1>

ガーナとはどんな国だろう①

1 写真(ベナ小学校)を見て、気づいたことを書きましょう。

2 わたしたちの学校生活と比べてみよう。

<資料2>

ガーナとはどんな国だろう②

1 選んだ写真を見て、気づいたことを書きましょう。

2 わたしたちの暮らしと比べてみよう。

<資料3>

青年海外協力隊について知ろう

○ 隊員のみなさんの活動について、感じたことや考えたことを書きましょう。

①

 さん

②

 さん

◆ 開発途上国で働く日本人の活動から国際協力について理解を深める ◆

氏名 塩畑 絵梨
 学校名 茨城県古河市立総和北中学校
 実践教科 学級活動、道徳、保健体育、
 総合的な学習の時間
 時間数 7時間
 対象学年 3年生
 対象人数 35名

カリキュラム

■実践の目的

1. ガーナという国について理解を深め、開発途上国の抱えている問題や現状について興味や関心を持って学ぶことができる。
2. ガーナの子どもたちの生活から、「本当の幸せ」とは何かを考え、自分自身の生活を振り返ることができる。
3. 世界で活躍する日本人がたくさんいることを知り、国際協力の大切さに気付くことができる。

世界は広い。世界には、様々な文化や伝統があり、色々な人種が生きている。世界に目を向け、国際社会の一員としての自覚を持ち、広い視野と心で世界を感じてほしいという思いから授業を行った。

また、豊かさ＝幸せとは言い切れないということも伝えたかった。物質的な面からすれば、ガーナは確かに貧しい国だと思う。しかし、ガーナにあるのは貧しさだけではない。日本にはない幸せがあった。ガーナには、子どもたちの純粋な笑顔がある。人々は、助け合いながら懸命に生きている。自分が見てきたもの、感じてきたものすべてを子どもたちに伝えたい。

さらに、中学3年生ということもあり、キャリア教育を含めて、海外で活躍する青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方の活動も紹介していきたいと考えた。現在の自分を見つめた上で、将来の夢や生き方について考えることはとても大切なことである。青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方が、強い信念を持って活動していることを伝えることで、子どもたちの視野を広げられると考えた。国際協力は、特別な資格や能力が必要なのではない。大切なのは、「誰かの役に立ちたい。誰かを助けたい。」という気持ちだ。私自身、来年からアフリカのブルキナファソへ青年海外協力隊として旅立つ。そのことを生徒たちに伝えることで、国際協力が身近なこととして考えられればと思う。この授業実践を通して、国際協力は小さな一歩から始まるということを伝えていきたい。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
【プレ1時限目】 ガーナのイメージ、	・ガーナのイメージを書き出してみ。(頭の中でのガーナ)	・世界地図 ・ガーナの拡大図

ガーナの子ども達への手紙 ねらい: ガーナについてイメージを膨らませながら、興味や関心をもつことができる	・ガーナの場所、面積、人口、気候、言語(チュイ語)について知る ・ガーナの子どもたちに日本の伝統文化を紹介した絵手紙を書く	・チュイ語の言語表 ・色画用紙 ・ホワイトブック
【1時限目】 ガーナを知る ねらい: ガーナがどのような国なのか知り、ガーナについて理解を深めることができる	・パワーポイントでガーナの自然や人々の暮らしについて知る ・ガーナの中での格差について考える	・ガーナの木歯ブラシ ・パワーポイント ・ガーナの拡大図 ・ワークシート
【2時限目】 ガーナのチョコレートと日本のチョコレート ねらい: チョコレートから見える先進国と途上国の現状と課題について考えることができる	・写真を使ってチョコレートの原料や製造過程を知る ・カカオの実がいくらで売買されているのか知る(労働対価) ・日本のチョコレートとガーナのチョコレートを味わい比較する ・ガーナのチョコレートから見えてくる生活について考える	・ガーナから持ち帰ったカカオの実 ・日本のチョコレート ・ガーナ産チョコレート ・ワークシート
【3時限目】 エイズについて考える ねらい: エイズについて正しい知識を身に付け、差別のない社会について考えを深めることができる	・1枚の写真から気づいたことを話し合う ・エイズという病気について知る ・エイズの感染経路や予防法について知る ・エイズ患者とのかかわりについて話し合う	・エイズ患者の拡大写真 ・エイズについての質問表 ・ワークシート ・エイズ患者が作った手作りのミサンガ
【4～5時限目】 青年海外協力隊の活動 ねらい: JICAの活動を理解し、海外で活躍する日本人がいることを知ることができる	・ガーナで活躍する日本人を紹介する	・協力隊のビデオレター ・協力隊活動ビデオ ・ワークシート
【6時限目】 先生の国際協力 ねらい: 自分にできる国際協力について考えることができる	・来年から青年海外協力隊としてアフリカのブルキナファソに行くことを伝え、国際協力が特別なことではないことに気付かせる	・ガーナの活動ビデオ ・ワークシート

授業の詳細

【プレ1時限目】ガーナのイメージ、ガーナの子ども達への手紙

(1)授業の流れ

- ① 世界にはどれくらいの国があるのか考える。思い浮かぶ国名を書く。(2分間)
- ② 何も情報を与えずに、生徒たちが抱くガーナのイメージを書き出させる。
- ③ 世界地図を使って、ガーナの場所、大きさ、人口、気候、言語(チュイ語)について学ぶ。
- ④ ガーナの子どもたちに日本の伝統文化を紹介した絵手紙を書く。

(2)生徒の反応

生徒が抱くガーナのイメージ ベスト3

1. チョコレート
2. 開発途上国
3. 貧しい

【生徒が抱くガーナのイメージ】

カカオ。暑そう。開発途上国。砂漠。貧しい。戦争。地雷。コンクリートでできた建物が少ない。学校が少ない。暗い。家が少ない。アフリカ。肌が黒い。痩せている。ご飯を手で食べる。裸足。川が汚い。食べ物が少なそう。設備不足。水不足。病気がたくさんありそう。ライオン。ラクダ。

ガーナの場所を聞くと、わからないと答えた生徒がたくさんいた。世界の国の数を質問すると、200カ国と答えた生徒の数が一番多かった。社会の授業で、すでに学習していたこともあり、世界の国の数を知っている生徒も数名いた。

生徒が抱くガーナのイメージで一番多かったのは、やはりチョコレートだった。開発途上国という印象をもっている生徒も多かった。ガーナ＝開発途上国。開発途上国＝暗い、かわいそうといった固定概念を持っている子どもたちがたくさんいた。全体的に、ガーナに対してマイナスイメージを持っている生徒が多いことが分かった。また、ライオンなどの動物がたくさんいるのではないかと発表した生徒も多く見られた。

ガーナの子どもたちに、日本の伝統文化を紹介した絵手紙を書こうということになり、全員が一人一枚ずつ画用紙に絵手紙を書いた。最初は戸惑っていた生徒たちも、授業の終わりには英語やチュイ語を使って熱心に手紙を書いていた。

【1時限目】ガーナを知る

(1)授業の流れ

- ① 生徒たちが抱くガーナのイメージを振り返りながら黒板に書いていく(前時の振り返り)
- ② ガーナの木の歯ブラシの紹介
- ③ パワーポイントでガーナの自然や人々の暮らしについて知る(地方)
- ④ 自分たちが抱いていたガーナのイメージと地方の映像を見た後のガーナの感想を比較する
- ⑤ 「もう一つのガーナ」の映像を見る(都市部)

⑥ 「もう一つのガーナ」を見た感想を書く

(2) 生徒の反応

【地方の映像を見た後の生徒たちの感想】

動物はいない。長袖を着ている人がいる(そんなに暑くないのかな)。太っている人がいた。道路が整備されていない。開発途上国。貧しい。子どもが働いている。汚い。衛生的に良くないと思う面があった。普通に授業を受けていたので驚いた。学校や家はぼろぼろだったけれど人々は笑っていた。人がたくさんいて賑やかそう。みんな仲が良さそう。暗いイメージがあったけれどガーナの人々の表情は明るかった。

生徒が頭の中で抱いていたガーナと地方の映像を見て感じたガーナでは、大きな違いが見られた。映像を見るまでは、ガーナ＝開発途上国。開発途上国＝暗い、かわいそうといった固定概念を持っている子どもたちがたくさんいた。しかし、ガーナの子どもたちの明るい笑顔を見て、ガーナに対する暗いマイナスな印象は生徒たちからはなくなっていた。しかし、映像から映し出されるガーナの現状を見て、やはり貧しい国であるということを改めて実感している生徒は多かった。

【もう一つのガーナ(都市部の映像)を見た生徒たちの感想】

建物や車がすごくきれいで高そう。車がたくさんあった。高い建物があった。貧しそうには見えない。建物がしっかりしていた。ガーナにもホテルがあったんだ。携帯電話を使っている人がいた。都市部にはお金持ちが集まっていそう。プールやエアコンがあるなんて、本当に発展途上国なの？ 地方と都市では、大きな格差があった。全く違う国に見え、貧富の差が大きかった。

生徒たちに「もう一つのガーナ」の映像を見せると大変驚いていた。教室中に「えー！！」というどよめきが起った。たくさんの車、大きな建物、大きな看板、そして携帯電話……。日本と同じような風景を目の当たりにし、驚きを隠せない様子だった。同じガーナであっても、こんなにも格差があるとは想像もしていなかったようだ。本当に最初に見た映像と同じ国なのかと質問してくる生徒がたくさんいた。なぜこんなにも地方と都市で格差があるのかと疑問に感じる生徒が何人もいた。開発途上国の現状や格差を知り、子どもたちは戸惑っている様子だった。格差を無くすためにはどうしたら良いのだろうと考える生徒もいた。今回の授業を通して、開発途上国(ガーナ)について興味や関心を抱いた生徒がたくさん出てきたようだ。

【2時限目】ガーナのチョコレートと日本のチョコレートの比較

(1) 授業の流れ

- ① カカオの実や写真を使ってチョコレートの原料や製造過程を知る。
- ② カカオの実がいくらで売買されているのか考える。
- ③ 日本のチョコレートとガーナのチョコレートを味わい比較する。
- ④ ガーナのチョコレートから見えてくるガーナの生活について考える。

(2) 生徒の反応

初めに各グループにカカオの実を渡すと、ピーナッツと答える生徒が多かった。チョコレート

の原料であるカカオだと教えるととても驚いていた。

ガーナの子どもたちはチョコレートを食べたことがないこと。また、カカオ農園では、子どもたちが働いているということを話すと、生徒たちの表情が一気に硬くなった。毎日口になっている魅惑のお菓子が、ガーナの子どもたちの労働によって作られているという事実を目の当たりにし言葉に困っていた。

フェアトレードチョコレートについての説明では、熱心に聞き入る生徒がたくさんいた。国同士が助け合って生きていく世界を作ることの大切さを感じている様子だった。

【ガーナのチョコレートの感想】

- ・硬い。粉っぽい。甘くない。苦い。ぱさぱさしている。なかなか溶けない。味が薄い。表面がざらざらしている。厚い。

【日本のチョコレートの感想】

- ・甘い。溶けやすい(口どけが良い)。色々な成分が入っているからおいしい。工場でたくさん作れる。滑らか。

【授業を終えての感想】

- ・日本とガーナのチョコレートでこんなに味が違うとは思わなかった。
- ・日本のチョコレートの値段の安さは、ガーナの人々の労働を考えるとおかしいと思った。
- ・カカオの価格を上げたほうがいい。不平等な貿易はやめるべきだと思った。
- ・チョコレートの値段が安いことは日本にとっては良いことだけれど、ガーナの人にとっては大きな負担となっていることがよくわかった。
- ・ガーナの子どもたちは、チョコレートを食べたことがないのはかわいそうだと思った。
- ・児童労働について改めて考えることができた。
- ・チョコレートからも先進国と途上国の格差を感じた。
- ・ガーナのチョコレートは日本と比べて高い。
- ・フェアトレードチョコレートの需要が増えれば良いと思った。
- ・日本のチョコレートの値段も高くするべきだ。

【3時限目】エイズについて考える

(1)授業の流れ

- ① 1枚の写真から気付いたことを話し合う。表情はどうか。職業は何か。
- ② エイズという病気について知る。
- ③ エイズの感染経路や予防法について知る。
- ④ エイズ患者とのかかわりについて話し合う。

(2)生徒の反応

子どもたちに、エイズ患者であることを伏せ、写真を見せて気付いたことを発表させた。多くの生徒が幸せそう、みんな笑顔で楽しそうだと答えた。彼らがエイズという病気と闘っているということを伝えると大変驚いていた。とても病気とは思えないという意見が多くあがった。「エイズ」という病名についての認識は高かったが、具体的にどのような病気なのかと尋ねると答

えられない生徒がたくさんいた。特に、感染経路については、間違った知識を持っている生徒が多かった。

最初は、エイズに効く薬が何なのかわからないと答えていた子どもたちも、授業の最後には、それぞれの答えを見つけ出していた。誰もが持っているエイズに効く薬とは何かという問いに、優しい心、愛、笑顔、差別をしない、思いやり、明るく前向きに生きる、特別扱いをしない、温かく受け入れる、偏見をなくすことであると自信を持って答える生徒がたくさんいた。

【授業を終えての感想】

- ・エイズ患者であっても特別な扱いや接し方をするのではなく、同じように関わっていくことが大切だと思った。
- ・エイズについての知識が世界中に広まって、エイズ患者に対しての偏見や差別がなくなればいいと思った。
- ・病気を持っていても、明るく楽しく生きる権利は誰にでもあるということを改めて感じた。
- ・今まで自分には関係ない病気だと思っていたけれど、身近な病気であることがわかった。
- ・勘違いをしていたこともたくさんあったので、エイズについてもっと詳しく調べてみたいと思った。
- ・知らないということがどれほど恐ろしいことかを実感した。

【4～5時限目】青年海外協力隊の活動を知る

(1) 授業の流れ

- ① ガーナの子どもたちの写真を見せる。授業の様子など。
- ② JICAの活動について説明をする。
- ③ ガーナで活躍する日本人を紹介する。青年海外協力隊として活動されている田川満男さんと後藤真希さんの活動を紹介し、生徒たちに宛てたビデオレターを見る。2人の話を聞いて、感じたことを話し合う。

(2) 生徒の反応

生徒たちは、ガーナの子どもたちや授業の様子に驚いている様子だった。また、ガーナで活躍する日本人についても、食い入るようにしてビデオを見ていた。日本人の教師が、道具がない中でも教材を工夫して授業を行っていたことに感激していた。自分たちも海外で活躍してみたい、海外で人の役に立ちたいという気持ちの高まりまでには至らなかったが、2人の日本人が生き生きと活動する姿を見て、大きな影響を受けていることが伝わってきた。

【授業を終えての感想】

- ・海外で活躍する日本人がたくさんいることを知り、とても驚いた。
- ・開発途上国のために頑張っている日本人がたくさんいることがわかった。
- ・日本の技術が他国のためになっていることがわかった。
- ・自分には海外に飛び出す勇気がない。青年海外協力隊の人はすごいと思った。
- ・ガーナの子どもたちは、学ぼうとする姿勢が強かった。楽しそうに授業を受けていた。

- ・家族と離れても青年海外協力隊として頑張っているのはすごいと思った。
- ・海外に行くことは難しいけれど、自分にできる国際協力について考えてみたい。
- ・ガーナの子どもたちは、貧しくてかわいそうだと思っていたけれど、とても生き生きとしていた。みんな笑顔で楽しそうだった。

【6時限目】先生の国際協力（3月10日 卒業式）

（1）授業の流れ

- ① 先生のガーナでの活動を紹介する。
- ② 来年から青年海外協力隊としてアフリカのブルキナファソに行くことを伝え、国際協力が特別なことではないことに気付かせる。
国際協力は、特別なことではないこと。特別な資格や能力よりも強い気持ちがあれば誰にでもできるということを自分の活動を通して伝える。

成果と課題

今回の授業実践を通して、世界に目を向け、子どもたちにガーナという国について、興味や関心を持たせることができたと思う。開発途上国の現状や課題を目の当たりにし、驚きを隠せない生徒も多かった。しかし、自分が生きている世界では、日々どんなことが起こり、何が問題となっているのか、アンテナを高くして知る必要がある。

「国際協力は、特別なことではないこと。特別な資格や能力よりも、強い気持ちがあれば誰にでもできるということを自分の活動を通して伝える。」これが授業実践を行っていく上での、最大の目標だった。青年海外協力隊やシニア海外ボランティアなど、世界で働く日本人がたくさんいることを伝えたことで、子どもたちの視野も広がったのではないと思う。近い将来、一人でも多くの子どもたちが世界に目を向け、世界のために活動してくれることを願って、今後も継続して国際理解教育を行っていきたいと思う。子どもたちには、国際社会の一員であるという自覚を持って、力強く生きて行ってほしい。

課題としては、教師の一方的な授業になってしまい、生徒たちが体験できる内容の授業を行なうことができなかった点があげられる。また、ガーナの子どもたちとの手紙の交換も継続して行うことができなかった。継続した交流を図ることで、子どもたちの興味や関心を一層引き出すことができたのではないと思う。

来年度からは、青年海外協力隊としてアフリカに派遣される予定だが、私自身、現在勤務している学校とブルキナファソにおける国際理解教育の架け橋になればと考えている。今回の研修を通して学んだことをきっかけとして、これからも継続して学校全体で国際理解教育に取り組んでいきたいと思う。

◆ 貧困問題をとおして見る、自分と世界のつながり ◆

氏名	曾根 典夫
学校名	茨城県立並木高等学校
実践教科	英語 I、道徳、LHR(ロングホーム ルーム)、家庭基礎 総合的な学習の時間
時間数	21時間(継続中)
対象学年	高校1年生
対象人数	201名(報告会、家庭基礎) 40名(その他の活動)

カリキュラム

■ 実践の目的

私の勤務校の生徒は、「国際協力とはどういうことだと思うか」という質問に対して、「資金援助、募金活動、ボランティア、難民救済」等をあげ、各国が連携して先進諸国による開発途上国への支援活動をする事と考えている。生徒にとっての国際協力は「...のために何かする」である。これは、私が夏期にガーナ共和国を訪れ、そこで青年海外協力隊として活動する隊員の「困っている人たちのために何かをしたい」という思いと同じであることが分かった。そこで、私は今回の海外研修をとおして、以下のことを生徒と共に考え、実際に行動を起こすところまで実践していきたい。

- 「貧困問題」をとおして、自分の知らなかった国について、関心を持たせる。
- 世界の人々と自分との関わりについて考え、行動しようとする態度を育てる。

■ 実践の趣旨・根拠

高等学校学習指導要領第1章総則の「道徳教育」の目標や、第4章の「総合的な学習の時間」の第3を受けて、本実践では教科横断的に国際理解・国際教育をとおして「自分が世界とどのようにつながり、関わっていくのか」を考えてさらに実践していくことは、「自己の生き方を考える」ことにつながる。

■ 指導上の留意点

(ア) 自分と同世代であること

生徒にとって、この活動が「見知らぬ国で起きている、自分たちとは関係のない話」とならないために、担任教師である私が研修先で見たことや感じたことを同世代の子どもや女性に焦点を絞って題材として取り上げ、興味を喚起した。

(イ) 自分との関わりを意識させる

グループ学習を軸に「話す」活動を中心に据える。世界の国々がお互いに影響を与え合っていることを知り、貧困の原因が先進国との関わりから生じていることも一因であることに気づかせる。

(ウ) 国を意識させすぎない

私が訪問した国は「ガーナ共和国」であるが、授業で「日本では～、ガーナでは～」というように一つの国をひとまとめにとらえると、その国への先入観を固定してしまう傾向がある。国を見るのではなく、その国で起きている事実を知り、そこに自分たちが間接的に関わっていることに気づかせる。

(エ) 活動の場を学校の外(家庭)へ移す

「貧困」について話し合うだけの活動にしてしまうと、その後の行動が伴わない可能性があり、そこで学習内容が収束してしまう傾向がある。NGOの活動に参加したり、自分たちの活動を外部に新聞やインターネットをとおして発信すれば、学習の達成感も大きくなり、その活動内容を家族や友人とも共有できるであろう。

■ 授業の構成(指導計画)

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
【1時限目】 知っている国を地図に書こう ねらい: 無意識に先進国や新興国を選んでいることに気づかせる	・世界地図に知っている国を書く ・「国際協力」のイメージを聞く	世界地図 ワークシート
【2時限目】 児童労働に関するビデオ視聴 ねらい: 児童労働の実態を知る	・家庭科の授業の単元で児童労働の実態を知る	ビデオ ワークシート
【3時限目】 帰国報告会 ねらい: ガーナで働く子どもと女性の様子を見ることで、現地の人々への興味を喚起する	・ガーナで働く人々の顔と実態を紹介する	写真
【4～8時限目】 貧困とは何か、貧困の原因について考える ねらい: ①「貧困」とは貧しいだけではなく、そこから派生する様々な状況があることに気づく ②貧困の背景には様々な原因があることに気づく ③構造的な不公平を実体験することにより、不公平な状況にいる人たちの気持ちを理解する④貧困の輪を個人の力で断ち切るのは難しいが、国際機関や日本政府が様々な活動でこの輪を断ち切ろうとしていることに気づく	・貧困についての派生図を作成させる ・貿易ゲーム ・貧困の輪を作り、その輪を断ち切らせる	貿易ゲーム 模造紙 付箋紙 マジック ワークシート
【9～11時限目】 国際協力を考える1 「STAND UP TAKE ACTION」(S.T.A.) ねらい: 2009年10月16日貧困をなくすために立ち上がり、ギネス記録を更新する	・ワールドイベントに教室で取り組むことができることを示す	映像 S.T.A.授業の手引き ワークシート
【12～13時限目】 メディアをとおして見る開発途上国を知る ねらい: 新聞の切り抜きをとおして、開発途上国がどのように紙面に取り上げられているかを知り、お互いに意見交換をする	・1時間をかけて、興味のある記事を取り上げ、感想を書かせる	新聞1週間分 ワークシート
【14～15時限目】 国際協力を考える2「フェアトレード」 児童労働の撤廃・予防に取り組むNGO紹介 ねらい: 世界には構造的な不公平があり、それを解決するための一つの方法としてフェアトレードという取り組みがあることを知る	・「しあわせへのチョコレート」プロジェクトについて示す	写真 テントウ虫チョコレート(*1) ACE通信 ワークシート
【16時限目】 国際協力を考える3「作文」 ねらい: これまでの活動を振り返り、日常生活の中でできる国際協力を考える	・7月からの学習の流れを示し、これまで考えたことを振りかえらせる	作文用紙
【17時限目～21時限目】 活動振り返り(同じアンケートを再びする) ねらい: 最初にとったアンケート、毎回の感想を記したポートフォリオ、作文を読み返すことで、グループ内で今後の日常生活の中でできる国際協力を考え、壁新聞づくりをする	・JICA活動の紹介 ・既知の教材を再度示すことで、これまで学習を振り返り、次の活動を考えさせる	ポートフォリオ アンケート用紙 新聞記事(茨城新聞 11/11～17)壁新聞作り

*1 「しあわせのチョコレートプロジェクト」特定非営利活動法人 ACE が取り組む労働や自然環境に配慮したオーガニックの「てんとう虫チョコ」の販売、募金活動、イベントを通じてガーナの子どもたちを支援しようというものの。取り組み内容を ACE 通信で紹介。

授業実践の詳細

【3時限目】帰国報告会(9/14)

1-(1)ねらい

担任教師が JICA 主催の教師海外研修で見てきたガーナ共和国の現状を伝える。

1-(2)内 容

「働く子どもと女性」に焦点を絞り、「笑顔」でいるガーナの人々を紹介した。帰国後にインターネットや文献で調べた事実を合わせて、生徒に以下の事実を紹介した。ただこれらについては、現地の人々の証言はとることができていないため、間接的に分かったことである。



農村で働く女性



観光地で子守りをする子ども



漁村で働く子ども

- ・子どもは両親のため、自分の学費のため働く
- ・親の収入が低いために、子どもが“水売り”をしなければならない
- ・タクシー運転手と警官との違法駐車を取り締まりに関する混乱で、水売りの少年が被害にあって死亡(2008.6)
- ・田舎の子どもが漁港へ人身売買 (Guardian.co.uk 2007.3.22)

1-(3)生徒の感想・意見

- ・アフリカの方は貧困が続いているというのは知っていたが、実際の写真を見て改めて悲しくなった。しかし、アフリカの子ども達は笑っていた。これが普通だと思っているのなら、今の日本人の同じ歳の子の生活をアフリカの子どもが知ったら、どのように思うのか気になった。
- ・今回、このような授業を受けて自分の中で考え直す点がありました。今までの考えでは、「貧しい＝かわいそう」だったが、あっちにとってみたら、普通のことだったということ、ちゃんと笑いがあったということ、が分かった。自分もこのガーナを助けるために何かできることをしたいと思いました。

1-(4)次への手立て

この訪問より、教師として自分ができる国際協力を以下のように考えた。開発途上国の人々のためにボランティアをしている人たちの活動とその気持ちを児童・生徒に伝え、開発途上国に住む人たちに興味を持たせたい。そして彼らの状況について学習をした生徒が一歩前に踏み出せるきっかけを作る場を提供するのが自分にとっての教員としての国際貢献であるとする。今後の活動方針を以下のとおり生徒に伝えた。

- (ア) 知ること: 新聞を読む、HPで調べる、資料を読む、見る、NGO 訪問をする
 - (イ) 多くの人に知らせること: 家族や友達に話す、ポスターや壁新聞を作る、イベントに参加する
 - (ウ) 寄付: 文房具等の寄付、指定募金への協力
- 引用:「できるぞ! NGO活動 学校を作る 教育問題」石原尚子著(ほるぷ出版 2005)

【4～8時限目】貧困とは何か、貧困の原因について考える

2-(1)ねらい

4人1組のグループ学習として、以下の事柄について「気づき」を重視する。(ア)
「貧困」とは貧しいと言うだけではなく、そこから派生する様々な状況があること。(イ)その後、貿易ゲームをととして構造的な不公平を実体験することにより、不公平な状況にいる人たちの気持ちを理解する。(ウ)その結果をふまえ、自分が開発途上国に住む人という立場で「貧困の原因」を考える貧困の原因同士がつながっていて、悪循環を生み出していること。個人の努力だけでは、悪循環から抜け出すことが非常に難しいこと。

2-(2)内容

(ア) 貧困の原因を考える時間：貧困の派生図作成 等

4人1組の班を作り、模造紙の真ん中に「貧困」と書き入れ、貧困から想像される状況をつなげて考え、10分間でできるだけ大きな派生図を作る。各班でできた派生図を約1分間ずつ読んでから、隣の班に回し、他のグループの意見を共有する。その際、自分の班には無かった視点を探し、そこに付箋を貼る。話し合いをととして、「貧困」とは貧しいと言うだけではなく、そこから派生する様々な状況があり、一つの困難はまた新しい困難を生み出す。そして様々な困難はつながっていて、その生活から抜け出すことは難しいことに気づくように指導する。



生徒の感想からは貧困問題を当事者ではなく、外側から見ている傾向がある。次回は貿易ゲームを導入することで、実際に開発途上国にいる人々の不公平感を体験する必要があると考え、以下の(イ)につなげる。



(イ) 貿易ゲーム実践(9/30 2時間)

貿易ゲームとは、紙(資源)や道具(技術)を不平等に与えられた複数のグループ(国家)の間で、できるだけ多くの富を築くことを競う、貿易のシュミレーション・ゲームである。そのねらいは、同じルールの下でも、あらかじめ不平等な初期条件を設定しておくことで、豊かなグループはより豊かに、貧しいグループはより貧しくなるというように、経済格差が拡大していく仕組みを、現実の自由貿易システムと対比しつつ体験的、共感的に理解することである。授業では、A(先進国)、B(新興国)、C(開発途上国)の3種、7班に分けた。生徒は人数が多いところほど、お金が儲けられると思い、活発な生徒は人数の多いCに集まり、おとなしい生徒の班が少人数のA、Bグループになる傾向があった。



ある程度余裕のある新興国班



遊んでしまう開発途上国班

Aグループに自然に人が集まっていた。特にCグループからどっと押し寄せる。
C1: 売り上げゼロ。エビが結局売れず、売り上げゼロ。動機づけが高まらない。
C3: 「ハサミが無いとはじまんねー」「仕事しねー」「何して良いのかわかんない」「人が余っている」
あるグループはもはや崩壊状態。ABCの中で、Cが一番最初に崩れ出す。
「ちょっと貸して」と黙ってAグループのもちものを借りようとする人出現。お金がないため、他人の物を勝手に持ってきて、賄賂を贈ろうとする。
C4: バナナ3房。すべて形が合わずに買ってもらえず「あ〜あ」「ハサミが無いと何もできない」
B1: もくもくと作業を進める。
B2: 一気に仕上げようと、段取りよくやろうとしたが、時間切れで未完成のものが多かった。戦略の失敗か。
A: 気の弱い男子3人が集まる。資源もお金もあるため、自分たちが使う分を残して他は格安の値段で貸してしまう。ただそれが返ってこないことがある。たまに自分が使う分さえも無くなることがあった。



参加した生徒は、「貧困であるならば、働けばよいと単純に考えていたが、実はそうではないことに気づいた」という感想をほとんどの生徒が持ち、前向きに取り組んでいた。最後に、担任教師が教師海外研修で訪問したガーナで購入したチョコレートを与え、途上国の人々が生産したカカオ豆を先進国に住む自分たちが食べることでいつもと違う味を実感させた。

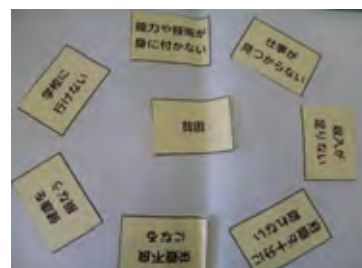


貿易ゲームで作った商品例

(ウ) 貧困の輪を作り、その輪を断ち切らせる

貧困の原因を考え、相互依存に気づかせることをあらかじめ1時間を使う。その後10月5日に実施した内容である。4人1組の班を作り、模造紙の中央に「貧困」と書かれたカードを置き、そのカードを出発点に残りの7枚の貧困カード(「栄養不良になる」「能力や技術が身につかない」「収入が足りない」「栄養が十分にとれない」「学校に行けない」「仕事が見つからない」「健康を損なう」)がどのような順番でつながっていくのか因果関係を考えながら円形状に並べる。原因(状況)がつながり、悪循環になっていることに気づかせる。自分や家族だけで、その悪循環から抜け出すのは難しいことに気づかせる。悪循環からどうしても抜け出せないのか? 抜け出す方法は他にないのか? を問いかけ、次のステップにつなげる。

例:「お金がない」と「食べるものが買えない(飢餓)」の中で、「栄養失調」になる。→「栄養失調」になると「病気」になり、「学校にも通えず(学校・教育)」, 字が読めなかったり、計算ができなかったり、生活や仕事に必要な「技術が身につかない」ため(基本的技能)、「仕事が見つからない」。→「仕事がない」と「収入が無くなる」。



貧困の輪の一例

2-(3) 生徒の感想・意見

(ア) 派生図

- ・最終的には、“死”や“生きている心地がしない”等とても暗いところに行き着いた。貧困から人の死までつながっていることも分かった。
- ・別の班の考えを見て、私たちが考えた言葉以外にもたくさんの言葉が書いてあり、納得した部分もあった。
- ・なぜアフリカ(有色人種)が貧困と言われているのか、なぜ北半球は貧困にならなかったのだろうと疑問に思った。

(イ) 貿易ゲーム : 資料③参照

(ウ) 貧困の原因を考え、相互依存に気づかせる

- ・今まで、日本などの先進国とフィリピンやインドなどの途上国とのつながりはあまりないと思っていた。しかし、現実には違っていた。例えば、日本の食料自給率は低い、多くの食料輸入を途上国に頼っている。もし途上国の人々が働けなくなれば、日本の食料も無くなってしまう。ただの「依存」ではなく、「相互依存」しているということを初めて知った。
- ・日本はほとんど輸入に頼っていることが分かった。開発途上国の上に先進国が成り立っている・・・という。自分たちは支えられているのだ。だから私たち先進国がもっと発展途上国を支えていかなければならないのだと思った。

(エ) 貧困の輪を作り、その輪を断ち切らせる

- ・「断ち切る」ということを考えるのは簡単だが、それを実際におこなうことになると政府が動いたり、民間だけではそう簡単に断ち切ることはできないと思いました。
- ・貧困の輪は簡単に作れるのに、貧困の輪を断ち切ることは難しいと思った。貧困の輪のどこを断ち切れば一番良いのか少し迷ったし、断ち切る方法もあまりなくて、考えるのが大変だった。でも、もし断ち切る方法がすぐ分かっていたら、もう行動しているだ

ろう。方法が見つからないというのが現状なのではないかと思った。

- ・貧困の輪を断ち切るためには、その困っている国だけで貧困から抜け出すことが難しいことが分かった。そのために、先進国からODAや青年海外協力隊などの支援があるのだと思った。このように世界が協力をしなければいけないほど、貧困という問題が深刻なものになっていると分かった。

2-(4)次への手立て

授業を終えて、生徒に書かせた感想を読むと、授業のまとめで担任教師が発する言葉が生徒の感想に所々に入ってきて、彼らに影響を与えることが分かった。すこしずつ貧困問題についての意識はそれぞれが複雑に絡み合っていることを理解しつつあるようだ。自分達にできる手立ては、募金活動、という意見がよく見られる。確かに募金活動もあるが、それ以外の活動を体験させることで、考え方の範囲も広がるであろう。そこで JICA(国際協力機構)やその他の NGO 団体が開発途上国に対してどのような取り組みをしているのかを知らせ、高校生である自分たちに今何ができるのかを考えさせることで、「STAND UP TAKE ACTION」参加へのきっかけ作りとする。

【9～11時限目】国際協力を考える1 「STAND UP TAKE ACTION」(S.T.A.)

3-(1)ねらい

生徒による「貧困」の定義をみると、3-2(B)に示すように第三者としての立場で考えてしまう。そこで、世界から「貧困」をなくすための教室から世界へ発信できる手段のひとつとして、「STAND UP TAKE ACTION」に取り組むことで、募金以外の国際協力を実体験させる。



10月16日世界食糧デーの記事を読みあって、その後体育館で写真撮影

3-(2)内容

10/14:準備 10/16:実行 10/19:反省

本時は 10/16 前回の感想配布:他の人の感想を読むことで、前時の授業の総括

(ア)「世界食糧デー」「飢餓人口 10 億人突破」の記事を読ませる(10月16日読売新聞)

気になる箇所に下線を引かせ、その後、グループで意見交換

(イ)貧困の定義を生徒と共有する

個人で考え、グループで意見交換、その後グループで一つ定義を決める。それぞれが漠然とした「貧困」のイメージを持つのではなく、クラス内で定義を確定させることで、これからの活動の際の土台を作るためである。

- 最低限の生活ができないこと(3/10 班中)
- 明日の食べ物への心配をしないといけないこと(5/10)
- 働きたくても働けない、雇いたくても雇えないという負の連鎖(1/10)
- 肉体的にも精神的にも限界近く、生きていくことすら難しい状態のこと(1/10)

(ウ)飢餓が増えている理由と 10月14日時点での生徒が考える理由を比較する

個人で考え、グループで意見交換、その後、グループで一つ定義を決める

- 気候変動や自然災害のため(3/10)
- 先進国の食料自給率が低いため、途上国の食料を奪っているため(5/10)
- 先進国は途上国に輸入を頼っているのに、輸入したものを余らせて捨ててしまい、無駄にしてしまう。途上国はもとの食料が少ないのに輸出するからもっと減ってしまい、栄養不良になってしまう(2/10)

(エ)「世界食糧デー」「飢餓人口 10 億人突破」の新聞記事を読ませ、グループでまとめた飢餓の要因が新聞記事とどのようにリンクしているのかを知る

- 先進国による輸入依存
- バイオ燃料の生産量による食糧価格の高止まり
- 気候変動

*10 月 16 日は世界食糧デーでもあり、最初にその新聞記事を読ませ、気になる部分に下線を引かせた。その後、(B)(C)の活動をすることで、“貧困”、“飢餓”についての定義を各班で共有させた。再度(D)に取り掛かることで、これまで自分たちが学習してきたことと、実社会で起きていることとの関連を確認させた。

(オ)自分たちにできることは何か？

ビデオ参照(2009 STAND UP TAKE ACTION)

再度、「私にとっての貧困とは何か」を振り返る

宣誓文を全員で読む

(カ)(オ)を確認したうえで、その気持ちを表すために紙を持って立ち上がる

体育館で写真撮影

3-(3)生徒の感想・意見

- ・ 今日は今までのまとめとして、貧困の原因や飢餓の原因をもう一度確認した。自分が思っていた貧困とのイメージが変わったし、今まであまり気にしなかったけれど、これを期にいろんな場面で自分と貧困についての比較をしてみたりできると思った。豊かに生きている人たちが、立ち上がって何かをしないと、どうにもならないことが分かった。自分たちにできることをしていくしかないと思う。
- ・ 今までは「何かできることがあったら協力する」という口だけのことだったけど、実際にできることがあって、そしてやれて良かった。楽しみながら協力できて本当に良かった。これからは自分にできることは少しかもしれないけれど、小さなことでもやる。
- ・ 今日新聞を読んで、私たちが今まで考えていた“貧困の原因”と記事に書いてあることにつながりがあることに気づきました。今日授業でやったことをきっかけに、私も世界のためにできることを始めてみようと思います。
- ・ 飢餓の原因は自然災害や食料価格の高騰などによるものだと分かった。と同時に飢餓人口が10億人を突破してしまったということも知った。そこで今日、STAND UP TAKE ACTION というグローバルイベントにクラスで参加した。自分も国際協力の一員になれたことがすごくうれしかった。発展途上国のために何ができるのかと悩んでいたが、一歩踏み出せた気がした。今はまだスタート地点。これからだと思う。今日のこの ACTION をとおして、自分ができることをもっと見いだしていきたい。
- ・ 今まで貧困について考えてきて、貧困は世界で協力しなければ解決しない問題だと分かったし、先進国と発展途上国のどちらかではなく、どちらも何か行動をしなくては行けないと分かった。今日 STAND UP に参加して、小さいことだけれど、貧困を解決するための活動に参加できて良かった。

3-(4)次への手立て

「今日新聞を読んで、私たちが今まで考えていた“貧困の原因”と記事に書いてあることにつながりがあることに気づきました。今日授業でやったことをきっかけに、私も世界のためにできることを始めてみようと思う」という生徒の感想にあるように、事後活動として、STAND UP TAKE ACTION の事後活動例を元に以下の活動を行うこととする。1-(4)に示した活動方針をより具体性があるために、以下のものに変更する。

(ア)世界の貧困問題について友達や家族と話そう

(イ)フェアトレード製品を購入しよう

(ウ)NGO のボランティア活動、スタディツアーに参加しよう

(エ)新聞・雑誌・SNS などに貧困について投稿しよう

引用:動く→動かす GCAP Japan (<http://standup2015.jp/index.html>)

(エ)については、当日新聞社の取材を受けており、10月21日付け茨城新聞に掲載され、NGOにもwebで報告をしている。(資料①参照)

次回は、上記の(ア)を受けて、開発途上国でどのようなことが起きているのかを新聞紙上で探し、それについての感想を書く指導につなげる。その後、(イ)、(ウ)へ発展させていく予定である。

【14～15時限目】国際協力を考える2「フェアトレード」

4-(1)ねらい

10月16日実施のSTAND UP TAKE ACTIONの事後活動として、以下の(ア)～(エ)がある。その中でNGO団体のACE*1で活躍する白木朋子氏の活動をととして上記の(ア)(イ)に取り組む。その後、(ウ)につなげるように、11月8日にJICA筑波で開催される「国際理解教育ひろば」*2を紹介する。(*1 児童労働の撤廃と予防に取り組むNGO *2 青年海外協力隊茨城県OV会主催)

4-(2)内容

(ア)新聞記事切り抜き(10月23日実施)で書いた生徒の感想を3種類取り上げ、「貧困問題」とのつながりを念頭に置いて、その記事をさらにグループで読み合う。貧困が引き起こしたもの、結果的に貧困を引き起こしたものという複眼的な視点を持たせるために、自分だけの意見とクラスメイトの意見を読み比べることで気づいたことを紹介しあう。



班毎の記事の読み合い

(イ)白木氏(ACE事務局長)の取り組みを『JICA's World 2009. No.10 pp.20-21』をととして知らせる。

そのACEの「しあわせへのチョコレート」プロジェクトについて触れ、児童労働撤廃・削減に教室から協力ができるように、フェアトレード製品の話をしてしながら、「てんとう虫チョコレート」を購入し、実際に食べるところまで指導する。最後に帰国報告会(9月14日実施)で見せたスライドをもう一度見せる。

*てんとう虫チョコレート購入資金は、6月に実施した文化祭で募金した1円玉、5円玉を充当する。

4-(3)生徒の感想・意見

(ア)JICA's World 白木さんの取り組み紹介(JICA's World 2009. No.10 pp.20-21)

- ・ クラスメイトが選んだ記事や感想を読んで、こんなことも貧困問題につながるんだなあと思いました。また白木さんの記事を読んで、ガーナの子供の労働環境について知識を増やすこともできたし、活動していることも分かった。「てんとう虫チョコレート」のどれだけが寄付されるのか、収益は何に使うのが明確に示していて、実際に買って少しでも行動ができたのかなと思う。

(イ)フェアトレード製品を購入するまで「しあわせへのチョコレート」紹介

- ・ フェアトレードについて全然分からなかったが、今日の授業でなんとなく分かった気がする。「なんとなく」で終わらせたくないから、ちゃんと調べて理解しておきたい。
- ・ 自分たちの作った巨大壁画のお金が、実際に児童労働を無くすのに役立つとは思ってもみなくて驚いた。でも自分たちで行ったことが役に立つのは凄く嬉しい。早く児童労働がなくなって、安全な生活ができるようになって欲しい。
- ・ 貧しい国に援助したいと行動を起こそうと思うことは簡単だけど、実際に自分から大きな行動を起こしている白木さんがすごいと思いました。小さいことだけど、みんなで集めた1円玉の募金で「てんとう虫チョコ」を買って、行動を起こせることが嬉しい。



ACEのてんとう虫チョコレート

(ウ)2 時間の活動を終えて

- ・ 前回と同じスライドを見たとき、前回よりもその内容が重いものを感じた。貧困について知って行くにつれて、その深刻さがさらに身にしみて感じられる。だから、これからももっと貧困について知っていこうと思った。
- ・ 改めてスライドを見て、初めて見たときと全然違う目で見ることができた。前見たときは、自分たちの生活と切りはなして見ていたけれど、勉強したことと関連させて見ることもできた。
- ・ JICA の活動にすごく興味を持った。フェアトレードを知り、体験するために行った貿易ゲームの意味が本当の意味で分かった気がする。先生のスライドを以前見たときとは違う視点で見ていることができた。
- ・ 私は今まで“貧困”についてこんなに考えたことはありませんでした。1 時間ごとに“貧困”について興味がわいてきて、自分から新聞を読んだりするようになりました。私たちは少しでも困っている人たちのためにしてあげることができていると思います。もっともって世界の貧しい人たちのためにしてあげたいと思っています。
- ・ 今までの授業を通して、ただ漠然としか知らなかった貧困というものについて学び、実際に行動を起こし、貧困の中にいる人々に少しでも役立ったという実感を持つとともに以前より少しではありますが、貧困についての理解も深まってきました。しかし理解を深めるだけで終わってしまえば、ここで学んできた意味がなくなってしまうので、また何かを起こしたり行動したいと思うのですが、思いつくのが募金ぐらいで具体的なものが浮かびません。まだ子供の私でも自分にできることは何かあるでしょうか？

4-(4) 次への手立て

この授業の後、11 月 8 日に 2 人の生徒が、国際理解教育ひろば(テーマ「感じてみよう 働く子どもの気持ち」)に参加し、ACE の活動や児童労働の実態について学習をしてきた。感想は資料③参照。

上から目線はなく、目線をどれだけ下げて考えられるようになるかが課題である。

【16時限目】国際協力を考える3 「作文」

5-(1) ねらい

一度書いたものは自分の考えに気づく機会となる。エッセイを書くことが自分のこれからの人生の進路を探すきっかけとなることもある。自分の考えや感想を文字に表すことは、その瞬間で自分の思考の記録を写真に残すことと同じで、その文章を後から読むときに客観的に自分の成長の過程を知り、その自分を知った上で、次のステップへの成長につなげることをねらいとする。

5-(2) 内容

参考資料:「生きる幸せ」「知ることから」「伝えることから国際協力」

JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2008 入賞作品を読ませる。

5-(3) 生徒の作品

資料③参照。「第 46 回国際教育弁論大会(高校生のメッセージ)応募作品」

5-(4) 次への手立て

学年が終わる3月に自分の書いた作文を再度読ませ、意識がどのように変化したのかを感じさせる。

【17時限目～21時限目】活動振り返り

6-(1) ねらい

これまでのまとめの活動として、教師海外研修の様子が掲載されている新聞記事を用いて、JICA の取り組み、ガーナ共和国はかつて奴隷貿易の中継地点としても知られていた場所であり、7 月にはオバマ大統領夫妻もガーナを訪問している。かつては奴隷として苦しむ人々がいたことについて概観し、その後、アンケートを実施して生徒の考えの変容を明らかにする。

6-(2) 内容

- 12/8 「ガーナ アフリカの希望 JICA の支援現場に行く1〜7」(茨城新聞)
- 12/9 フォトランゲージ:エルミナ城の写真を用いて奴隷貿易の実態に触れる
- 12/14 アンケートの実施

6-(3) 生徒の感想・意見

フォトランゲージ

- ・ 写真を最初に見てストーリーを作っているときには本当のことを知らずに言いたい放題言っていたが、先生の話聞いて現状を知り、写真を再び見て考え直した。
- ・ 班のみんなで考えたストーリーは違った。先生の写真の説明を聞いて、すごく遠くに感じていた奴隷が近くに感じた。奴隷の人が最後に見た景色。実際に使われていた足かせや手かせ。どれも衝撃的だった。こういう問題は悲しいし、怖いけれど、目を背けてはいけないと思う。
- ・ 体育の授業で疲れた後の、衝撃的な内容は体力を余計に吸い取られる感じだった。
- ・ 知ると言うことは怖い。

6-(4) 次への手立て

開発途上国に関する新聞記事を切り抜いた経験を活かし、生徒の視点で学習したことを壁新聞にまとめる活動をする。グループ内で切り抜いた記事を持ち寄り、コメントを書き合うことで、それぞれのテーマに対して考えを深めることをねらいとする。

成果と課題

ここでは、実践の目的と指導上の留意点に上げたことを中心に本実践の成果と課題をみていく。7月から12月までの実践をとおして、生徒は以下のような変容を遂げた。

7-(1) 生徒の活動とメディア報告

- 10月16日 STAND UP TAKE ACTION 参加
同日 ウェブサイトに活動報告し、掲載中
- 10月21日 「並木高校 貧困や飢餓 理解深める」茨城新聞に掲載される
- 11月2日 道徳教育授業公開
- 11月7日 学校公開日での授業公開
しあわせのチョコレート(特別非営利活動法人ACEプログラム参加)
- 11月8日 国際理解教育ひろば
(テーマ「感じてみよう 働く子どもの気持ち」2名参加)
- 11月17日 「ガーナ アフリカの希望 JICA の支援現場に行く7」(茨城新聞)
にガーナ訪問の時の担任教師のコメントが掲載される
- 12月10日 第46回国際教育弁論大会(高校生のメッセージ)
エッセイは40名が作成。うち、2名を上記大会へ応募
- 12月12日 JICA 筑波高校生国際協力実体験プログラム8名参加
- 12月18日 道徳教育実践セミナー分散会で実践発表(於:茨城県教育研修センター)

7-(2) 実践の目的について

☐ 〇 貧困問題をとおして、自分の知らなかった国について、関心を持たせる。

Q: 貧困問題をとおして、自分の知らなかった国について興味を持つようになったか?
はい 100% いいえ 0%

☐ 〇 世界の人々と自分との関わりについて考え、行動しようとする態度を育てる。

Q: 世界の人々と自分とのかわりについて考え、行動しようと思うようになったか?
はい 100% いいえ 0%

3-(4)に示した活動方針の(ア)～(エ)については、ほぼ達成できた。

- (ア)世界の貧困問題について友達や家族と話そう
 (イ)フェアトレード製品を購入しよう
 (ウ)NGO のボランティア活動、スタディツアーに参加しよう
 (エ)新聞・雑誌・SNSなどに貧困について投稿しよう
 引用:動く→動かす GCAP Japan (<http://standup2015.jp/index.html>)

アンケートによると、これまでの授業の中で印象に残った授業には、国際協力を考える1・2で実施した「STAND UP TAKE ACTION」や「フェアトレード」が多かったが、その他「毎回やっていたプリントでの授業」、「写真から途上国について考える授業」、「新聞を切り抜いて、貧困のことを勉強した授業」、「相互依存を理解できた授業」という意見が多く出ていた。本実践において、有効だった手立ては、早い時期に「貿易ゲーム」を実践して、貧困の仕組みを体験して知ったことが動機付けを高めたものとする。それ以降、生徒が積極的に貧困が起こる原因を考えていくようになった。そして「活動振り返り」として12月に再度、帰国報告会のスライドを見せたときの生徒の表情が6-3の感想にあるように、9月とは大きく変化していた。

7-(3) 指導上の留意点について

指導上の留意点に上げた、(ア)～(エ)については以下のとおりである。

(ア)自分と同世代であること

Q:開発途上国の子ども(15歳未満)が働くことを認めるか？

7月	12月
はい 50%	はい 48%
いいえ 50%	いいえ 52%

数字の上ではほとんど変化がないが、理由のところでは、「親の収入や生活を考えると子どもも働かざるを得ない状況があるため、認めざるを得ない」という意見がでるようになった。

(イ)自分との関わりを意識させる

これは(エ)での結果にまとめられている。

(ウ)国を意識させすぎない

Q:「外国」と聞いて、思いつく国をあげてください。

7月当初はほとんどが欧米諸国をあげていたが、12月では、アフリカ諸国(ケニア、コートジボアール、ナイジェリア)、アジア諸国(ミャンマー、ラオス、アフガニスタン、カザフスタン)、中南米諸国など、授業で取り上げていない国までもが多く思いつくようになっていた。ちなみに「ガーナ」を思いついた生徒は、40人中19人だった。これは、ガーナと言う国を特定せずに、その国で起きている事実を目を向けさせた結果ではないかと肯定的に考えたい。

Q:「開発途上国」についてのあなたのイメージをあげてください。

7月の「～のために・・・する」という意見は残っているが、さらに「貧困」、「先進国への依存」、「負の連鎖」、「飢餓」等があげられている。これらはどれも授業で扱った内容である。

(エ)活動の場を学校の外(家庭)へ移す

Q:あなたにとっての「国際協力」は何だと思いますか？

7月では国と国が協力し合って、「～のために・・・する」という抽象的なものが多かったが、12月には、「JICAや学校の授業で得た知識や開発途上国の現状を知って、それを伝える」「フェアトレード」「ボランティア活動への参加」、さらには「ご飯の食べ残しをしない」といった自分でできることをあげている。また保護者面談においては、「普段学校のことを話さない子が、授業でしたことを話すようになった」という意見を何人からもされた。これは、活動の場が学校から家庭へと広がっていることを裏付けるものである。

茨城県教育庁高校教育課指導主事によると、茨城県の「道徳」のねらいは、人間としての在り方生き方を考える時間としてとらえ、自分はどうすればよいのかを深く考えることだという。このことより、本実践は茨城県の「道徳」ねらいを十分に満たしたものであるといえる。

7-(4)課題

本実践の授業時間の確保が当面の課題であったが、これまで 21 時間確保できた。そこには猛威を振るったインフルエンザによる学級閉鎖が起因している。幸い私の担当するホームルームは 11 月上旬に活動が一息ついたところで学級閉鎖になったため、その期間を利用して作文を書かせた経緯がある。今後実践を続ける場合には、総合的な学習の時間やロングホームルームをあらかじめ確保しておかなければならない。さらに、ティームティーチングをとおして一人でも多くの教員が国際理解教育に関心を示せるように啓蒙活動をし、情報を共有していく必要がある。高校生国際協力実体験プログラムに引率したのが、私の担当学年の地歴公民科の教員だったことも理解者が増えたことで嬉しく思う。

本実践はグループ学習を軸に、話し合いの時間を多く持ち、生徒の感想を活かしながら、次の授業の組み立てをしていった。その際、毎回前時の感想を私がまとめたものを復習として読ませた。生徒にとって他人の意見を聞くのは相当なインパクトがあることが分かった。今後も生徒には考える機会を与え続ける必要がある。帰国報告会と児童労働に関するビデオ視聴以外は、私の担当ホームルームの生徒を対象に実施した。生徒の活動を見やすくするためには、最大でも 40 人単位でなければ個人の活動を見渡すことができない。今後は、私の授業を受けた生徒がこれから 3 月までの 3 ヶ月間、考えをさらに纏め上げ、次年度のクラス編成後に、一人でも多くの生徒が新クラスにおいて「国際協力活動」についてリーダーシップが取れるように指導をしていく必要がある。その手立てとして、1 月にはグループで決めたテーマを壁新聞に纏め上げ、学年全体の企画としては、JICA 主催の国際協力出前講座を活用し、1 月には日本人講師、2 月には研修員による学校訪問をとおして、世界へ目を向ける素地を作っていこうと考えている。また 6 月には文化祭で国際協力のイベントが小さな企画でもできるようにしていくことで、

クラス → 学年全体 → 他学年 → 訪問者 → クラス生徒の家庭・クラス生徒の友人
と言うように、「国際協力」の考え方が広がるのではないかと思う。

終わりに

一つのテーマを約 6 ヶ月間扱ってきた。その中で大切にすることは「つながりを持たせる」ということである。それが、自分と自分の周りの世界であったり、内容や活動のつながりであったりする。一連の授業をとおして生徒は、自分対友人・家族という視点から世の中との関わりについても意識を向けられるようになったと確信する。

今後は JICA 訪問、研修員の学校訪問、職員の学校訪問など、外部との関わりをさらに取り入れ、自分で活動できる人材を育成していきたいと考える。12 月 7 日に実施した新聞社の NIE コーディネーターによる講演をもとに壁新聞の作製をとおして「知る」ことだけでは終わらせず、さらに高めるために、「伝える」ところへ指導していきたい。

この授業実践は以下の方々協力なしにはできなかった。JICA 筑波の甲田さん、宮本さんは教師海外研修の統括をしていただいた。JICA ガーナの北原さん、飯島さん、同行の岩佐隊員、田川隊員、後藤隊員は現地での研修をコーディネートしてくださった。参加教員の宮本さん、渡邊さん、塩畑さん、記者の富岡さん、アドバイザーの山下さん、この方々のアドバイスなしには現地での交流も難しかった。授業実践では、私の意見を尊重してくださった並木高校第 1 学年スタッフ、並びに 1 年 5 組の生徒諸君に厚く感謝する。

参考文献

- 石原尚子「できるぞ！NGO活動 学校を作る 教育問題」(ほるぷ出版 2005)
 岩瀬美江「平成 20 年度 教師海外研修(ラオス)報告書 pp129-136」(独立行政法人国際協力機構 筑波国際センター 2009)
 岩附由香他「わたし 8 歳、カカオ畑で働きつづけて。—児童労働者とよばれる 2 億 1800 万人の子どもたち」(合同出版 2007)
 開発教育・国際理解教育アクションプラン研究会「教室から地球へ—開発教育・国際理解教育 虎の巻 ～人が育ち、クラスが育ち、社会が育つ～」(国際協力機構中部国際センター 2006)
 白木朋子「危険な労働から子どもたちを解放したい」(JICA's World 2009. No.10 pp.20-21)
 曾根 典夫「働く子どもと女性」(平成 21 年度教師海外研修報告会レジュメ 2009)
 曾野 綾子「貧困の光景」(新潮文庫 2007)
 菅 正広「マイクロファイナンス」(中公新書 2009)
 ラッセルフリードマン「小さな労働者」(あすなろ書房 1996)
 読売新聞「世界食糧デー」「飢餓人口 10 億人突破」(10 月 16 日読売新聞朝刊)
 茨城新聞「ガーナ アフリカの希望 JICA の支援現場を行」(平成 21 年 11 月 11 日～17 日)

資料

① STAND UP TAKE ACTION での活動報告



② 茨城新聞 10 月 21 日 並木高「貧困や飢餓 理解深める」



③第46回国際教育弁論大会(高校生のメッセージ)応募作品

演題：貿易ゲームを通して

私たちはこれまでに、貧困問題を軸にして様々なことを考えたり、実践したりして学んできました。その中でも私が一番心に残っていることは、貧困の原因を考える「貿易ゲーム」を実践したことです。このゲームは、決められた人数でグループを作り、決められた材料を使い、決められたものだけを作ります。そしてその商品を売ることで収入を得ます。以上のことだけを聞いていると、簡単に聞こえるかもしれませんが、しかし問題は山積みです。

まず、商品を作るために材料が足りないのです。その際には他のグループに頼み込み、足りない材料を貸してもらいます。でも貸す側も無料で貸すわけではありません。「何分でいくら」という契約を結んで貸すのです。「ケチだなあ」と思う方もいるかもしれません。でも、どのグループ(国)も貧しいのです。実際に、強く契約を結ばなかったためか、貸した物が返ってこなかったというグループもありました。

次に、決められた人数でグループを作るといいましたが、全てのグループが同じ人数というわけではありません。七人、四人、三人というグループを作ります。「人数多い方が、たくさん労働力があるから儲かるのではないか」そう考える方も少なからずいると思います。でも実際は「人数が多すぎて働くことがない」「人数のわりに仕事が少ない」という状況に陥ります。その結果、「遊んでしまった」という意見が出ました。ここで分かることは“働きたくても働けない”ということです。「貧困と言われる国の人、働けばいいじゃないか」と思われる方がいると思います。でも仕事がないのです。働きたいという意思を持った人の数と仕事の数とは反比例ということです。

この貿易ゲームを通して、一番痛感したことは“働きたくても働けない”ということです。私は、この問題はどうすれば解決に近づけるのか考えました。そして日本や先進国が出来ることといえば、仕事を教えることだと思いました。青年海外協力隊の方々などは、途上国の方々に仕事に繋がることを教えています。そのことは続けるべきだと改めて思いました。そういったことを踏まえて、大切になってくるのは「フェアトレード」をすることだと思っています。公正な取引を目指して貿易しなければならぬと思います。そうしなければ、働いてもそれ相当の賃金が貰えず、「学校に行けない」「食べ物がない」「子供が働くしかない」といったマイナスなことしか起こりません。そうした悪循環が続いてしまうと思います。“どこか”で止めなければ、この負の連鎖は永遠に続いてしまいます。その“どこか”を真剣に考えるべきだと思います。

高校生が首を突っ込むべきでない問題があるのかもしれませんが、高校生の私はそう思います。

演題：知る、伝える

私は、ACEという児童労働の撤廃と予防に取り組むACEというNGOのワークショップに参加し、いろんなことを感じ、いろんなことを知った。

まず、この活動に参加しての率直な感想は、ワークショップ担当の白木さんに実際にお会いできたことがすごく嬉しかった。ACEで活動している方に直接会い、お話する機会なんて滅多にないことだと思う。とても貴重な経験をさせていただいたな、と思った。

そして、ワークショップのテーマは「感じてみよう 働く子どもの気持ち」だ。1枚の子どもの写真とその子について書かれた1枚の紙がグループごとに置かれ、そのグループごとにこどもは違っていた。その子のほしいもの、したいこと、してほしいこと、されたくないことをグループで考えた。私以外はみんな大人ばかりだったが、積極的に意見を言った。私の言うことでも、グループの方々は納得して聞き入れてくれた。私にとってそれはとても嬉しいことだった。私は、写真



の子の気持ちになって考えることができた。そして働く子どもたちの現状を知った。共通していたことは、学校に行っていないということ、働いている場所の環境・衛生状態が非常に悪いということなどがあった。危険な場所で働かされ、その子どもたちの雇い主は厳しい人が多かった。

親は何をしているのか。本来ならば、親が働き家計を支えていくはずなのに、子どもに働かせ、そのお金で生活している、という家族が多い。親が借金をつくって失踪したり、親が病気になってしまったりして、子どもが働かざるを得ないというところもある。

子どもたちは皆、学校に行きたいだろう。自由に生きたいだろう。友達と遊びたいだろう。なにより、幸せになりたいだろう…。

私たちよりも幼いたくさん子どもたちが働いている。この現状を知って何も思わない人はいないだろう。少なくとも私は、この現状をなんとかしたい、私にできることは何かないのだろうか、と思った。

高校生の私にできることは、まず、「知る」。インターネットや新聞でも、何か開発途上国に関する活動に積極的に参加することでも、どんなことでもいいから、知ろうという意思が大切だと思う。「知る」ことから始まるのだ。そして、そこで自分が初めて知ったこと、何か感じたりしたことを、友達や家族など身近な人たちに「伝える」。私ひとりが動いても、小さな力にしかない。しかし、伝えることによって、その人たちがなにかを感じて行動を起こしてくれるかもしれない。そのような人が増えていくことを私は望む。一人の人がやっていたことをより多くの人がやれば、その力は何倍にもなる。そうすれば、開発途上国の問題の解決へと繋がるだろう。

まずは、「知ろう」という意思から。そして「伝える」という行動を起こす。

それが、今、高校生である私たちにできることだと、私は思う。

◆ ガーナを通して、世界を知る ◆

氏名	渡邊 憲優
学校名	茨城県立守谷高等学校
実践教科	LHR(ロングホームルーム)・総合
授業数	6時間
対象学年	3年生
対象人数	30人

カリキュラム

■実践の目的

この海外研修に参加した目的は大きく分けて3つある。1つ目は、この海外研修で、隊員の活動が視察できるということ。私は、青年海外協力隊に興味があり是非、隊員として参加したいという気持ちがある。2つ目は、開発途上国の文化を自分で体感し、自分自身の視野を広げること。3つ目は、生徒に国際理解協力について学ばせ、学びたくても学べない子どもたちがいること、今の日本に足りないものは何か、これから必要になってくるものは何かを考え、これからの日本を背負っていく生徒に少しでも多くのことを伝えていきたい。そして、今から私たちにできることは何かを知り、生徒と共に考え国際理解協力を実施していきたいと考え参加した。

私は生徒に日本という国に生まれ、育った以上、自分の国を理解するとともに、他の国々を理解し協力し合えるようになってほしいと願っている。日本人は自分の国について知らないことが多く、日本人の生活が普通だと感じてしまっている。しかし、開発途上国からみたら、日本での生活は普通ではないのが現状である。私がガーナという生徒にとってみたら未知の国へ行ったことで、いろいろなきっかけとなり普段考えないことを考えさせていきたい。

まず、生徒に「ガーナ文化」、「水の大切さ」、「働くことと学ぶこと」という3つのテーマを柱に考えさせる。「ガーナ文化」については、日本以外の文化について知ることによって日本の文化が世界の普通ではなくて、いろいろな文化があることを知ってほしい。「水の大切さ」は、普段何も考えず使用している水がこんなにも大切に扱われていることを知る。そして、日本の水の安全性についても理解をし、他の国の公衆衛生事情についても学んでもらいたい。「働くことと学ぶこと」については、自由に学べることの素晴らしさを理解し、学びたくても学べない国があることを知った上で生徒の世界観が少しでも変わってくれたらと考える。

授業を通してガーナの生活スタイルを知り、そして、自分たちとの違いや共通点を考える。ガーナについて学ぶことが、開発途上国を知るきっかけとなれば良い。ガーナで働く日本人を紹介し、青年海外協力隊やシニア海外ボランティア等の国際協力があることを知ってほしい。

■ 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
【プレ1時限目】 手紙を書こう ねらい: 英語で手紙を書くので実践から英語を学ぶ	・ガーナの小学生に絵や写真の入った手紙を書く ・自由な内容(守谷高校の紹介や自分自身の紹介等)	レター用紙 ペン 電子辞書
【1～2時限目】 日本以外の国を知る ねらい: ガーナから日本、そして世界を見る	・世界の国名や位置を知る ・ガーナの写真を見ながらガーナの生活を知る ・歯磨きに使用している木を見せる ・ストラップからHIVについて考える	世界地図 パワーポイント、写真 ガーナ人の歯磨き(木) ストラップ ワークシート
【3時限目】 水の大切さ ねらい: 世界の水事情を知る	・地球生活体験学習教材「モルディブのミードウ島の水」を使用	写真 地球生活体験学習教材 ワークシート
【4時限目】 ガーナとチョコレート ねらい: チョコレートの原料を知り、さらにガーナを知る	・写真を見せクイズ形式で理解を深める ・カカオの種子を見せ、臭いをかがせ、食べさせた ・ガーナのチョコレートと日本のチョコレートを食べ比べる	写真 パワーポイント カカオの種子 ガーナのチョコレート 日本のチョコレート ワークシート
【5時限目】 ガーナの子ども達からの手紙 ねらい: ガーナの子ども達の英文から、ガーナについて知る	・ガーナの子ども達からの手紙をグループごとに和訳させた ・手紙からガーナ文化について分かることを発表させた	ガーナの子ども達からの手紙 電子辞書

授業の詳細

【プレ1時限目】 手紙を書こう

(1) 授業の流れ

事前に私がガーナに研修に行くことを話しておいて、そのときにガーナの子ども達に手紙を書いてみようという提案をした。それから、各自ガーナについて少しなりとも興味を持ち調べていた。始めに電子辞書とレターセットを配った。レターセットは何種類かを用意し生徒に選ばせた。そして手紙を書く時間は、一人一人が何かしら活動できるようにグループ学習とした。一人で書くのが良いが、どうしても手が進まない生徒は2人、3人で一つの手紙を書いたところもある。

(2) 生徒の反応

取れることなら、数時間利用しガーナについてインターネットでクラス全体として調べる時

間があったら良かった。手紙の内容は日本の文化を伝える内容や日本の高校生、守谷高校について、ガーナ子ども達への質問等様々であった。手紙の中が文章だけだとわかりにくいので絵を描いて分かりやすくする生徒もいた。

- ・ 外国の小学生に手紙を書いて本当に読んでもらえるのか心配
- ・ 私たちの英語の文章で分かってもらえるのか
- ・ 紙やえんぴつを見たことがあるのか
- ・ 日本という国をしっているのか

【1～2時限目】日本以外の国を知る

(1)授業の流れ

まず始めに教師海外研修でも行った、知っている国名を3分以内でできるだけ多く書き出すことをした。そして、世界地図を見て生徒が書いた国名の位置を確認し、どの辺りの国が認識されているのかを話した。私がガーナへ行く途中に寄ったオランダやガーナのあるアフリカ大陸の国名についても話、世界地図を見ながら、国の位置や名前を確認した。

次にパワーポイントでガーナの写真を見ながらガーナの子ども達や生活、文化について自分が感じたことや体験して思ったことを話した。

そして、ガーナで青年海外協力隊員をしている田川さんから頂いたガーナ人が歯磨きに使用している木を見せこれは何に使用しているのか考えさせた。

最後にHIV陽性者女性を中心としたガーナのNGOが作っているストラップを見せどんな人たちが作っているのか考えさせた。そして、HIVについての最低限の知識を説明し、クラスの生徒全員へ私からのガーナへ行ったプレゼントとした。

(2)生徒の反応

世界地図を見ながら国について話をするとき、私が過去に行った国の写真があればさらに興味関心をもったと思う。

- ・ 世界は広く自分の知らない国が沢山ある
- ・ ガーナがアフリカであることや国の位置を知った

パワーポイントを使用し写真等を見せながら話した。しかし、私はガーナへ行き、その国を実際に見てきているので色々イメージできるが、実際聞いている生徒はどれだけイメージができたのか、温度差がでてしまったのではないかと反省している。



フーフー（ガーナの主食）



ガーナ人の家庭



ガーナの通り

- ・ ガーナ人の生活は思っていた以上に良い生活だと思う 服なんかもしっかりある
- ・ ガーナ人は外国人に対して優しい感じがする
- ・ 建物が日本とは違うのに驚いた
- ・ 日本とは違うところが多すぎて、もっと知りたいと思った

ガーナ人が日常生活で使用している物を歯磨き以外にも入手できたらもっと他の授業ができたと思う。

- ・ こんな堅い木を噛んで出血しないのはすごい
- ・ 丈夫な歯が育つ理由が分かった

HIVのところで、保健体育の先生を交えて授業ができたらもう少し変わった、授業らしい授業になったのではと思う。

- ・ 他の国についてもっと知りたいと感じ、こういう授業をもっと受けてみたい
- ・ ガーナのことが少しでもわかり良かった
- ・ ガーナ人の笑顔がステキで、温かそうな雰囲気
- ・ 日本とは違うことが多くとても驚いた

【3時限目】水の大切さ

(1)授業の流れ

地球生活体験学習教材「モルディブのミードウ島の水」を使用し、日本以外の国の事情について知る。まず始めに4枚の写真を見せどんな話ができるのかグループで考えさせ、考えた物語を発表させた。その後4枚の写真の実話を説明した。5枚目の写真を見せ青年海外協力隊員の長谷川さんからの質問という課題を考えさせた。最後に「自然の恵み」を感じたことがあるかまた、それはどんなときかを考えさせ発表させた。

(2)生徒の反応

使用教材を利用して、初めての授業だったので生徒への質問の仕方、活動のさせ方等多くの課題が残った。

- ・ 日本は水の面だけを見ても、本当に恵まれていると感じた
- ・ 大変な労力を使ってくむ水が安全でないのが心配
- ・ かわいそうだったと思った
- ・ 当たり前が当たり前でないことを知った
- ・ 水の大切さを知った

【4時限目】ガーナとチョコレート

(1)授業の流れ

パワーポイントを使用し写真を見ながらクイズ形式でカカオについての知識をつけていく。チョコレートの原料を見せ、実際に食べさせた。その後、ガーナのチョコレートと日本のチョコレートを比べさせ、こちらも食べて違いを感じてもらった。

(2)生徒の反応

クイズ形式でカカオの知識をつけることは、とても良かった。



カカオの実



カカオの種子(チョコレートの原料)



- ・ カカオの実の付き方にとても驚いた、不思議な付き方をしている
- ・ 高いところにも付いていて、子どもが取るのは危ない、実が落ちて怪我をするかもしれない

チョコレートの原料を見せるのはとても良く、実際に目で見て分かる教材は生徒の興味を引き勉強になる。

- ・ チョコレートの味、臭いがした、ビターなチョコで苦かった
- ・ ここから作るのはとても大変そう

日本のチョコレートとガーナのチョコレートを比べるところではフェアトレードのチョコレートを見せたりして、フェアトレードについての知識も話せば良かったと反省している。

- ・ ガーナのチョコレートはパサパサして堅い
- ・ ガーナのチョコレートの方が苦い

最終的にチョコレートを食べたという結果だけが強くガーナにおけるカカオの重要性を伝えられたかどうか疑問が残る。

- ・ チョコレートの原料を知ることができ、ガーナはカカオのおかげで発展していると感じた
- ・ チョコレート一つをとってみても日本とは違うのだと思った
- ・ カカオの実の付き方やガーナのことが分かり勉強になった

【5時限目】ガーナの子供達からの手紙

(1)授業の流れ

ガーナの子供達から手紙が返ってきたので、手紙を和訳させた。手紙と電子辞書を配り、一人一人が何かしら活動できるようにグループ学習とした。一人で和訳できるのが良いが、手紙も20枚だったのでグループで一つの手紙を和訳させたところもある。

(2)生徒の反応

すべて各自で和訳しただけで感想をまとめ終了となってしまった。手紙の和訳や感想を発表させる時間が取れたら良かった。

- ・ 自分たちより英語能力があると思った
- ・ フーフーという食べ物の作り方が分かった
- ・ 手紙の返事が返ってきたことが驚いた、ガーナ等の外国と交流できたらうれしい

- ・ 字が日本よりも濃いのが不思議、一生懸命さを感じた
- ・ ガーナの小学生はみんな笑顔で、すごい
- ・ 気持ちの詰まった手紙で感動した
- ・ 自分たちの書いた手紙もガーナの子も達読んでくれたことに感動した

【その他】文化祭での展示発表

10月30日に守谷高校の文化祭「蒼夢祭」が行われ、そこで、生徒や職員、生徒の保護者、見学に来た一般の方に見てもらおうと、ガーナの写真やガーナ文化の分かるものを展示して紹介した。

- ・ アフリカの子も達の笑顔の写真が素晴らしい
- ・ おもしろい先生がいるんだね



文化祭での展示風景

成果と課題

私がガーナという国へ行ったことで、日本以外の国について知るきっかけになったことが大変良かった。そして、国際理解協力についての授業が実施できたのも私の経験として貴重だった。生徒も普段受けることのない内容の授業を、どの生徒も楽しんで受けていたことが印象的だった。ガーナという国について興味を持ち、とても好印象を抱き、私のクラスの生徒はガーナという国を好きになった。予想以上に興味を持って活動してくれたことに生徒の成長も感じた。普段考えないようなことを、ガーナを通じた授業で考えさせられたことが目的達成といえるだろう。開発途上国についての知識の入り口程度は私の授業で理解でき、これをきっかけに世界を見てみたいという生徒が多くなったのが良かった。その国を直に見ることで分かることがほとんどなので、開発途上国に対する固定概念を振り払うためにも多くの国をみたいと思うことが大切であると感じた。

普段ほとんど教えることのない国際理解協力について、もっと経験があったら生徒に伝わるのではないかと何度も反省した。回数を追うたびに自分自身の成長も感じたが、生徒にどれほど伝わっているのかといわれると怪しい。そのとき、その瞬間はいろいろと考えるようになったが時間がたつと忘れてしまう。12月に行われた高校生国際協力実体験プログラムの参加も行ってみたいと思う生徒はいたが、休みの日を利用してまで学びたいとは思う生徒はなく、行動させ

られなかったのが現状である。国際理解協力をそのときだけにせず、実際に行動させるということが今後の課題である。

そして、私の行動力がもっとあればワールドキャラバン(※)を利用し講師の方から直接生徒へ伝えるという方法もとっていた。まだ奴隷貿易についての授業も実施したいと考えているので卒業までには実施したいと考えている。また、青年海外協力隊員の仕事を柱にした授業も今後実施してみたい。

私の中で、国際理解協力を生徒へ伝えていくというのは始まったばかりで、今回の海外研修や今後の研修から学んだことをこの1年で伝えるというのではなく、まだ始まったばかりの教員人生の中で一つでも多く、一人でも多くの生徒に伝えていくことが私の役割だと考える。そのためにも今以上に国際理解協力についての知識を私自身が身につけなくてはならない。私や生徒の、同じ地球で生活をしている世界中の人々のために何かできることをしようという、優しさを今後ものばしていくことが目標である。

参考資料:社団法人青年海外協力協会地球生活体験学習教材「モルディブのミードゥ島の水」

※ワールドキャラバン:

茨城県国際理解教育推進協議会が実施している国際理解教育のために、留学生親善大使等外国人講師やファシリテーターを学校や生涯学習の場に派遣する事業。

資料3 茨城新聞掲載記事

1) 海外研修

掲載期間：平成21年11月11日（水）～平成21年11月17日（火）

記者：教師海外研修同行者 富岡氏（茨城新聞社）

テーマ：ガーナ アフリカの希望 -JICAの支援現場に行く-

内 容：①独立以前の歴史 「奴隷貿易の暗い記憶」	72
②野口英世の痕跡 「マラリアが発展阻害」	73
③女子教育に力 「字読めない生徒たち」	74
④教員養成支援 「足りない施設、機材」	75
⑤技術者教育 「組織での養成必要」	76
⑥JOCVの後藤さん 「学校巡回し算数教育」	77
⑦県内教諭の挑戦 「喜び、戸惑い、経験に」	78

2) 実践報告会

掲載日：平成22年3月1日（月）

記者：教師海外研修同行者 富岡氏（茨城新聞社）

内 容：JICA研修～ガーナ 3教師報告

「経験と成果、現場に」 79

ガーナアフリカの希望 JICAの支援現場に行く

◆ 1 ◆

国際協力機構（JICA）とき奴隷貿易を避ける
CA）の「地方マスコ」ことはできない。大西
ミ派遣事業」で8月2 洋・ギアナ湾に面した
日から14日まで、西ア 白亜のエルミナ城は、
フリカのガーナを訪れ その重く暗い歴史をい
た。7回に分けて、同 まに伝えている。
国の歴史を踏まえなが ユネスコの世界遺産
ら教育や産業などの現 に指定されている同城 紀になると、城は英国
状を報告する。 は、西アフリカ最大の 城の中には、奴隷と

（学芸部・富岡良一）

同国は現在、選挙に
よって民主的に政権交
代を行い、西アフリカ
のモデル国家として期
待されている。7月の
米国のバラク・オバマ
大統領の訪問は、アフ
リカ重視の姿勢を示し
た以上に、奴隷をルー
ツとし、公民権獲得へ
の苦難の歴史を持つ米
国内のアフリカ系市民
に向けたメッセージも
内包していた。

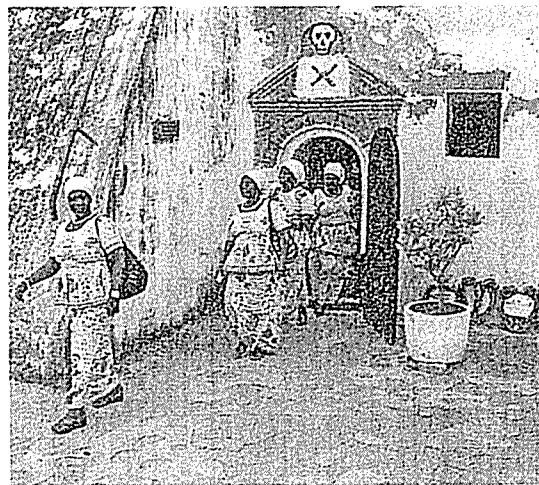
同国の歴史をたどる

独立以前の歴史

奴隷貿易の暗い記憶

った人をし
のび花がさ
さげられて
いる」

奴隷貿易拠点の一つだ
として連れて来られた女
性たちが汚物を垂れ流
した。ポルトガル人が
1482年、エルミナ
に築城。当初は亜麻の
布などが主な貿易商品
だったが、金や象牙と
交換するためにベナン
から奴隷を輸入し始め
ていた。 観光客に城の解説を
している男性は当時の
様子をご紹介した。 そのガーナがサハラ
「ナイジェリア、セ
ネガル、ベナンなどか
めて英国から独立した
のは1957年。クワ
メ・ンクルマ初代大統
中で最大3カ月閉じ込
められていた。汚染さ
れた水の流入で全滅し
たことある。亡くな
る基礎を築いた。



反抗した奴隷を入れた監禁室の入口。入っ
た人が生きて出てくることはなかった。傍
らには花がささげられているエルミナ城



日本人がガーナに入国するためには、黄熱病の予防接種を受けなければならない。黄熱病は、海外の学立されてないが、1本術雑誌に論文を発表する。野口英世博士が当時の技術では目で見ることができなかった。黄熱病のウイルスと格闘し、1928年にガーナで客死したことを思つと、複雑な気持ちになった。

マラリアが発展阻害

野口英世の痕跡

野口博士の働いていた研究室が今も首都アクラに残され、手紙類や彼が使用したてあろうとされる顕微鏡などを展示している。

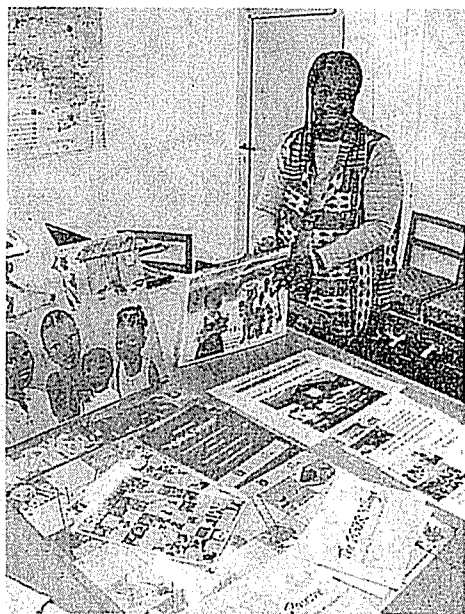
ガーナ大学には野口記念医学研究所が設けられている。エイズや

を担うこと、公衆衛

生分野での役割を担うこととのバランスが難しい、と話した。

「いま最大の危機は、子どもと下痢や結核な何か」との質問に、二

意見と断った上で「エ



子どもの保健教育の教材を前に、寄生虫対策について解説するアイリーン博士＝ガーナ大の野口記念研究所

博士。寄生虫予防の活動では歌や踊りなどのような教

は国際協力機構（JICA）の援助で、同

寄生虫学西アフリカセンタープロジェクト

という寄生虫対策の啓発活動が続いている。

「健康に悪影響を及ぼす寄生虫や回虫、マ

ガーナアフリカの希望

JICAの支援現場を歩く

◆3◆

ガーナの首都アクラから西に約20キロ離れたテマの港には、国際協力機構(JICA)の援助で整備された小型漁船用の桟橋や漁具を修理する場所、魚市場などがある。各国の大型漁船が寄港し、特に韓国漁船がマグロやカツオ漁で活用している。

ガーナの首都アクラから北に約30キロ離れた地方都市ンサにあるNGO「RWSDF」は農村で育った子、特に女子の教育に力を入れている。して自立を支援。バテ

女子教育に力

字読めない生徒たち

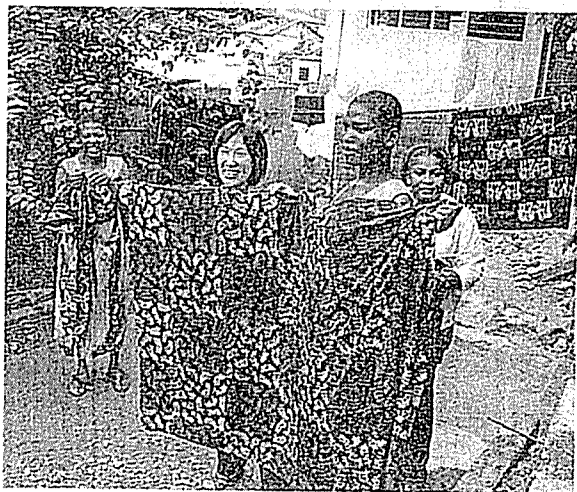
港湾事務所に寄ったとき、男性職員は繰り返しこう話した。「日本人は港を整備したが去ってしまった。戻ってきて欲しい」。破損した桟橋や港湾内で沈没した漁船の処置、水ク(ろっけつ染め)の心している。

女性が生きていくため手段として、伝統産業など外国に求めているため、品質管理には苦しい。孤児もいて、教

への期待が大きい。単に「物」を支援するだけではなく、地域にあ

1年間の学費は住居費、教材費、食費などは多い。字が読める生徒は1割にも満たない字が読めなかった」と

隊(JOCV)として同校に派遣された織田末那子

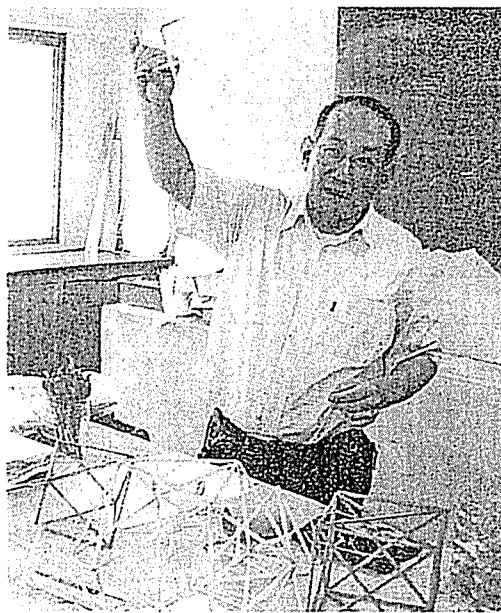


JICAガーナ事務所職員とともにバティックを制作した生徒たち(ンサワン)

「JICAの支援現場に行く」

◆ 4 ◆

經濟活動や生活水準を高めるには、教育が必要だ。ガーナの高等教育は、大学と教員養成校、ポリテクニック（技術短期大学）の三つに大きく分かれる。国際協力機構（JICA）を例に語った。「学校



ストローを活用した分子模型を掲げる中野英朗さん。接着剤も必要ないように工夫するニクマシのウェズリー教員養成校

足りない施設、機材

১৫৮০।

貧しい家の
子が教員にな
れる可能性を

教員養成支援

古都クマシのウエズリ
ー教員養成校で、理数
科教育の教材開発を指
導している。ペットボ
トルやストローなど日
用品を使って分子構造
の模型や光の実験装
置、飛行機などさまざ
まな教材を作り出して
いる。

はきれい、机もいすも
あります。電気もつい
ています。窓ガラスも
盗まれていません。し
かし、実験のための施
設はありません」

光の実験をしたいと
か教えられない」。砂
ピアでは教師と生徒が
と、支援によつて子ど

プライドから実験をや
らうとしない。「実験
組を挙げた。ボランテ
アが村に入る方法は
という子がいる。高校
程度で統一試験である
程度成績を収められ
れば可能性はある」

できないければ、理論し
「面」で行える。ザン

ざんぴあ

同校は1学年の学生話したら、出てきたのぼこりなど自然環境も毎日、ラジオを聞きなもたちの将来が大きくなる。数は約350人。卒業は虫眼鏡2個。実験や厳しく、機材の維持整から授業できるように開けることを語った。期間は3年間。1、2実習を知らない教師は備にも課題がある。プログラムを組んでい

ガーナ・アフリカの希望

JICAの支援現場を歩く

◆ 5 ◆

ガーナには州ごとに 1 学年 30 ～ 40 人。産業「ポリテクニク」と界の即戦力としての人材育成が目標だ。教育の国立の高等教育機関水準は非常に高いが、ある。全国で 10 校ある教育養成校と同じで実り、その一つである伝験や実習というものが統校のクマシ技術短期ほとんどないという。

大学では、約 2 千人の

学生が学んでいる。工学系以外にも経営や会計、調理、服飾、木工などの専攻もある。学

費は高卒者の短大コース(学業期間 3 年)で年間 200 ～ 300 カ

ーナシディ(1 万 2 千円から 1 万 8 千円)。

国際協力機構(JICA)のシニアボラン

ティアとして派遣され

た牛久市出身の原田喜達さん(63)は工学部の電気電子工学科で教えている。同科の学生は

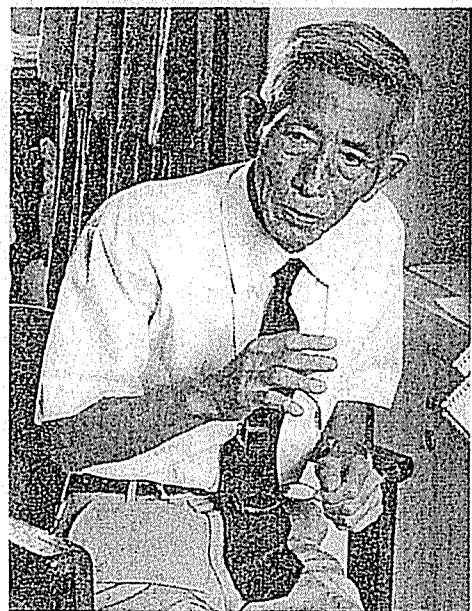
「組織」での養成必要

技術者教育

機材は外国からの寄付庫などの修理屋となるで非常に高価なものもケースが多い。優秀なあるが、ここでも維持学生は外国の大学に行

くが、帰国しても技術者ではなく、管理職にう世界はない」と家族を残し、海外に出た。

原田さんにとつてはいろいろな問題がある」と原田さん。大きな可能性はありながらも支援の難しさを語った。



電気電子工学科で教えている原田喜達さん。教育では事業や方針の継承をめぐる組織の問題を指摘していたニクマシ・ポリテクニク

題として「組織」を挙げた。二般に組織としての約

後は技術を生かしなが束、引き継ぎができなら人のために働きたい。個人依存が高い。そして思っていた。「子会社は教育の問題というより教育組織の問題」

「ここは日本の戦後の時代に近くて、(人

は、バイタリティーも

ガーナアフリカの希望

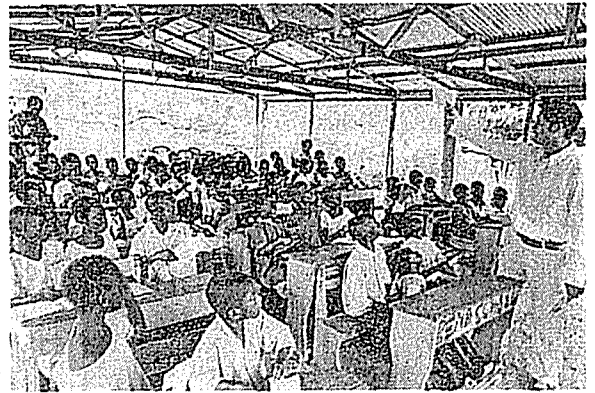
JICAの支援現場をゆく

◆ 6 ◆

にも格差がある。首都アクラではクラブ活動も盛んで、体育の授業も充実している。一方、地方でも体育の授業はあるが、子どもが勝手にサッカーをして遊ぶ程度だ。

国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊（JOCV）として派遣された愛知県出身の中学教師、後藤真希さん（39）は古都クマシから南へ約60キロのアタシノース郡教育事務所まで学校教育全般の管理と指導、小中学校教員の研修などを担当。巡回しながら小学校で算数を教えている。一つの学校に常駐するのではなく、同教育事務所を拠点に、約1週間のごとにバイクで学校を回っている。

JOCVの後藤さん



折り紙を活用しながら算数の授業を行う後藤真希さん。理数科教育では教材の活用が理解を深める鍵になるニベナ小学校

学校巡回し算数教育

だが、「ガーナの子もたちは計算も弱く英語もた

は算数の定義は知って多い。教育水準を高めたいという意欲は強いが、教え方を見ていると言葉だけの一方的な理解させるよう努力している。計算が苦手な子どもも多く、トラという教材として活用している。授業で後藤さんは「言葉を使っただけではインパクトがな

都市と地方では学校の動きは鈍い。

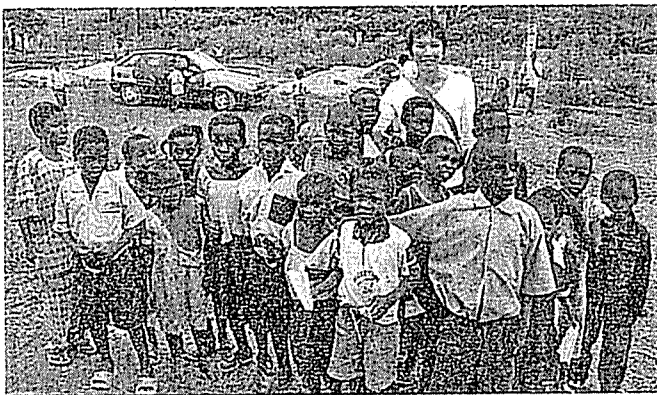
教師の社会的な地位とたどしいが、それは決して高くない。給料も安い。食べること本と同じように経験を積み重ねれば子どもは素直で、伸びる可能性はありやうと、楽しい授業をしよつという教師たちの教材研究が盛んになることを期待していた。

喜び、戸惑い、経験に

(おわり)

県内教諭の挑戦

んは「算数が得意なのり、すごい良いな」と思



体を張って日本の相撲を紹介した
古河市立総和北中の塩畑絵梨教諭
(中央)と子どもたち＝ベナ小学校

に、英語ができないが「う」と子どもたちの反し、思いをした。しか
ために芽を摘まれてし 応の良さに驚いた。
まう可能性があるので 「村のトイレでガー ちは純粋に楽しもうと
はないか。自分たちに ナの暮らしを感じた」 する」と、子どもたちの
はまずない怖さを感じ という塩畑さんは子ども 素晴らしさを知った。

た。日本だったら英語もたちに体を張って相この経験を経て来年6
嫌いでも何とかなる 僕を紹介。「英語が伝わ 月には正式に青年海外
が、ここではそうはいらない、もどかしい悔 協力隊員としてガーナ

戸惑い、経験に
の隣国フルキ
ナフアンに向
け出發する。

副の挑戦



(おわり)

かない」と日本と違つ
 厳しさを感じていた。
 授業の最後には、教



を紹介した
 田絵梨教諭
 ナ小学校

師と子どもたちがサッカーで対戦。村民も集まり、祭りのような雰囲気

最って日本
市立総和北
り)と子ども

は、「先生が話した後
にイエス・サーと答えて
反応する。答えが合



体を強
古河市
(中央

つていたら、拍手した
り、すごい良いなと思





▲ガーナの生活風景を想像させる授業を行った宮本いみ子教諭(正面左)＝つくば市高野台のJICA筑波

JICA研修～ガーナ 3教師報告

経験と成果、現場に

■国際理解 ■開発教育

昨年8月にJICA教師海外研修で西アフリカのガーナを訪れた教師による授業実践報告会が2月6日、つくば市高野台のJICA筑波国際センターで開かれた。教員や会社員、学生ら関係者約20人が参加、ガーナの経験を生かした3教師の授業を体験した。また参加者は、水の少ないモルジブの生活を伝える教材開発について考え、率直な意見を交換した。

海外研修は、教師が「かしていく狙いがある」発展途上国の開かれてる。

いる現状に体験を通 実践した授業について理解を深め、その 報告したのは、石岡

体験もとに授業企画、実践

いみ子さん(50)、古河市立緑和北中教諭の堀畑梨さん(26)、県立北水師範の田根典夫さん(37)の3人。

宮本さんは、事前に高野台の水越甘菜さん(26)は「海外研修に行った先生の授業がすごく刺激になった。自分も行ってみたい。生徒の教員や一般参加者の意見をもらい、教員自身にフィードバックしていき効果を狙っている。参加者が国際理解教育、開発教育のアイデアを持ち帰り、生かしてほしい」と事業の意図を話した。

(宮岡良二)

いみ子さん(50)、古河市立緑和北中教諭の堀畑梨さん(26)、県立北水師範の田根典夫さん(37)の3人。

宮本さんは、事前に高野台の水越甘菜さん(26)は「海外研修に行った先生の授業がすごく刺激になった。自分も行ってみたい。生徒の教員や一般参加者の意見をもらい、教員自身にフィードバックしていき効果を狙っている。参加者が国際理解教育、開発教育のアイデアを持ち帰り、生かしてほしい」と事業の意図を話した。

いみ子さん(50)、古河市立緑和北中教諭の堀畑梨さん(26)、県立北水師範の田根典夫さん(37)の3人。

宮本さんは、事前に高野台の水越甘菜さん(26)は「海外研修に行った先生の授業がすごく刺激になった。自分も行ってみたい。生徒の教員や一般参加者の意見をもらい、教員自身にフィードバックしていき効果を狙っている。参加者が国際理解教育、開発教育のアイデアを持ち帰り、生かしてほしい」と事業の意図を話した。

いみ子さん(50)、古河市立緑和北中教諭の堀畑梨さん(26)、県立北水師範の田根典夫さん(37)の3人。

授業で、途上国視察の経験を活かしてみませんか？

平成 21 年度 教師海外研修のご案内（ガーナ） 【募集要項】



●ガーナ共和国 (Republic of Ghana)



平成 20 年度教師海外研修（ラオス）参加者による撮影
子ども文化センターでの様子

独立行政法人国際協力機構（JICA）では、この夏、小学校・中学校・高等学校・中等教育学校・特別支援学校の先生方及び教育委員会の指導主事の方々を対象として、開発途上国における国際協力の現場を視察する海外研修を行います。国際理解教育や開発教育、開発途上国の諸問題等に関心をお持ちの先生方の参加をお待ちしております。

主 催：	独立行政法人国際協力機構筑波国際センター（JICA 筑波）
後 援：	外務省、文部科学省 茨城県教育委員会

【研修のねらい】

本研修は、開発教育に熱心に取り組んでいる、あるいはこれから取り組もうとしている小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校の先生方及び教育委員会の指導主事の方々を対象に、開発教育指導者研修および派遣前研修等の国内研修と開発途上国への海外研修を有機的に組み合わせた上で実施し、途上国のおかれている現状と日本との関係（国際協力を含む）への理解を深め、その成果を、次代を担う児童、生徒の教育に役立ててもらうことを目的に実施します。また、研修参加後、JICA 筑波と協力し、教育現場で開発教育を推進する中核となるような人材を育成することも目的としています。

【派遣国】 ガーナ

【派遣期間】 平成 21 年 8 月 2 日（日）～平成 21 年 8 月 14 日（金）

【募集人数】 4 名

【応募資格】

- ① 茨城県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に勤務する教員及び教育委員会の指導主事の方々に、授業もしくはクラブ活動で開発教育・国際理解教育を実践されている、或いは今後実践予定の方。
- ② 本研修への参加に際し、派遣国の事情を勘案した上で健康上の支障が無いこと。
- ③ 本研修の趣旨・目的を十分理解し、本研修参加以後、JICA 筑波が実施する開発教育支援事業に継続的に協力可能であること（※）。
- ④ 応募締め切り時点で、満年齢 50 歳以下であること。
- ⑤ 所属する学校の校長もしくは教頭（教育委員会であれば所属長）の推薦があること。
- ⑥ 過去に本研修に参加された方、青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、JICA 専門家、ODA 民間モニター等、JICA から海外に派遣された経験のある方は除く。

※なお、応募者多数の場合は、JICA 筑波主催の「国際協力出前講座」、「JICA 筑波センター訪問」、「開発教育指導者研修」、「中学生・高校生エッセイコンテスト」に参加された方、今後参加を予定されている方を選考の際に優先いたします（応募書類に可能な限りご記入下さい）。

【参加条件】

- ① 教師海外研修の趣旨・目的を十分理解し、国内で実施される各種研修、海外研修における各種行事等、全てに参加可能であること。
- ② JICA 筑波主催開発教育指導者研修（年 3 回）に可能な限り参加すること。（開発教育指導者研修では、教師海外研修帰国後の実践に役立つ開発教育手法などの研修を予定しています。）
- ③ 将来にわたって、JICA が実施するエッセイコンテスト等の開発教育・国際理解教育支援事業に協力可能なこと。
- ④ 帰国後、海外研修報告書及び授業実践報告書を作成し、また、研修で得られた経験・成果を活かした授業実践例を JICA が主催する研修（あるいはセミナー）で報告可能であること（授業実践例については、JICA のウェブサイトで一般公開予定です）。

※研修の対象者として決定された場合においても、他の参加者に迷惑をかける方、決められた活動に参加できない方については、国内研修中、海外研修中を問わず、研修対象者としての資格を失うことがあります。特に、海外研修中に研修対象者としての資格を失った場合、旅費・滞在費等に係るキャンセル料等は、当該者の全額負担となります。また、帰路の旅費も当該者の負担となりますのでご了承ください。

【研修日程】（なお、日程については多少の変更があることをご了承願います。）

	場所	日程	内容
第一次派遣前研修	JICA 筑波	平成 21 年 6 月 27 日（土）終日	海外研修の日程説明、渡航手続き、JICA 事業概要、開発途上国の現状理解、ガーナ任国事情など
第二次派遣前研修	JICA 筑波	平成 21 年 8 月 1 日（土）終日	昨年度授業実践事例紹介、開発教育教材作成に関するワークショップ等
海外研修	ガーナ	平成 21 年 8 月 2 日（日）～8 月 14 日（金） （日程は多少前後する場合がありますので予めご了承ください。）	JICA 事業の視察、専門家・青年海外協力隊員との交流、現地の学校訪問等
帰国報告会 ・教材作成	JICA 筑波	平成 21 年 8 月 29 日（土）予定	研修参加者による海外研修報告
実践報告会	JICA 筑波	平成 22 年 2 月 6 日（土）予定	研修参加者による実践授業報告

【応募方法】

所定の応募用紙に必要事項をご記入の上、JICA 筑波「教師海外研修担当宛」にご送付ください。

【応募締切】

平成 21 年 5 月 22 日（金）JICA 筑波必着

【選考】

提出書類に基づき選考を行い、6 月 5 日（金）までに選考結果を通知します。

【参加費用】

参加者の個人負担と JICA の負担は、下記のとおりです。

	個人負担経費	JICA 負担経費
国 内 （JICA 筑波での研修）	・食費 ・パスポート取得にかかる費用 ・予防接種料（必要に応じて） ・その他個人的性格の費用	・国内交通費 ・事前研修時の交通費及び宿泊費 ・査証代、成田空港使用税
海 外	・現地での宿泊費 ・食費 ・追加保険の加入費 ・その他個人的性格の費用	・往復渡航費 ・国内旅行保険及び海外旅行保険 ・海外での空港使用税 ・現地視察に必要な費用（車両備上、通訳など）

【その他注意事項】

- ① 本事業は研修であり、JICA における労災保険等の適用はありません。
- ② 所属先の業務出張扱いにて参加される場合は、各所属先の責任において、参加期間中の業務上災害に対する補償措置を行ってください。
- ③ JICA は出張命令依頼書等の発出を行いません。
- ④ 海外研修出発前の JICA 筑波での第二次派遣前研修は出発前日に行い、翌日に出発します。第二次派遣前研修期間中は JICA 筑波等に宿泊していただきます。

【報告書の提出および報告会への出席】

- ① 帰国後は、8 月 28 日（金）までに研修報告書（所定様式）を提出していただきます。
- ② 研修で得られた経験・成果を授業もしくはクラブ活動で実践した報告書（授業実践例）を 12 月 25 日（金）までに提出していただきます。また、JICA が主催する研修会（あるいはセミナー）でも、講師として実践・報告していただきます。

【個人情報について】

応募書類において入手しました個人情報は、選考および派遣業務にのみ使用します。また、当該情報は、当機構にて厳重に管理し、正当な理由なく第三者への開示、譲渡および貸与することは一切ありません。ただし、当機構との間で機密保持契約を締結した第三者に対し、本研修に関する業務を委託する場合を除きます。

【お問合せ】

独立行政法人国際協力機構筑波国際センター（JICA 筑波）
研修業務・市民参加協力課 教師海外研修担当

住所：〒305-0074 茨城県つくば市高野台 3-6
Tel：029-838-1774 Fax：029-838-1790

平成 21 年度 教師海外研修（ガーナ）応募用紙

ふりがな			性別	生年月日		年齢
氏名			☐ 男性 ☐ 女性	19 年 月 日		歳
本人現住所	〒□□□-□□□□ TEL: FAX: E-MAIL:					
渡航時の連絡先	氏名 (続柄:) 〒□□□-□□□□ TEL: FAX: E-MAIL:					
ふりがな 所属学校名 (正式名称)			職名			
			担当教科 学年			
学校住所	〒□□□-□□□□ TEL: FAX: E-MAIL:					
趣味・特技						
JICA 主催の 事業について	1. JICA 主催事業へ参加したことがありますか？ ☐ ある ☐ ない 2. あると答えた方は参加したことのある事業にチェックをしてください。(複数回答可) ☐ JICA 国際協力出前講座(日本人講師)(いつ: 年 月) ☐ JICA 国際協力出前講座(研修員の学校訪問)(いつ: 年 月) ☐ JICA 筑波センター訪問(いつ: 年 月) ☐ 開発教育指導者研修(いつ: 年 月) ☐ 中学生・高校生エッセイコンテスト(いつ: 年 月) ☐ 高校生国際協力実体験プログラム(いつ: 年 月) ☐ その他(いつ: 年 月)					
アレルギー・病気等		過去の申込経験			海外渡航の経験	
☐ ある ☐ ない 詳しくお書きください		☐ ある 年 ☐ ない			☐ ある ☐ ない 年 国名 年 国名 年 国名	
外国語会話	○をつけてください	会話が 堪能	意思疎通 が可能	簡単な 日常会話	できない	写真 (4×3cm または 4.5×3.5cm) 裏面に氏名を記入
私は募集要項記載事項をすべて承諾し、この研修の参加を申し込みます。						
平成 21 年 月 日 氏名						㊞

なお、応募書類において入手いたしました個人情報、選考および派遣事業のみに使用し、その後は直ちに廃棄いたします。
 但し、ご要望があれば以下の目的には使用いたしますので、ご同意いただける場合には、該当項目にチェックをお願いします。

☐開発教育関連イベント情報の提供 ☐JICA メーリングリストへの登録

資料4 平成21年度「教師海外研修」募集要項

(1) あなた自身のこれまでの国際理解教育・開発教育への取り組みについてお書きください。
(取り組んだ教科、内容、取り組み時間数、テーマ、目的、成果、課題等できる限り具体的に記入してください。)校務で国際理解教育を担当されている方は必ず明記してください。

(2) あなたの現在の所属先の国際理解教育・開発教育への取り組みについてお書きください。

(3) 本研修への応募動機、抱負についてお書きください。

資料4 平成21年度「教師海外研修」募集要項

(4) 今回の海外研修の体験を、今後の教育活動にどのように活かしていけるのか、その計画や方法を具体的に説明してください。

(5) 海外研修国での視察先・内容の希望をお書きください。(理由を明記)

※本研修は、海外の学校見学や児童・生徒との交流を目的とした「教育事情調査」事業とは異なります。

※現地事情等でご希望に添えない場合がありますので予めご了承ください。

どのようにして本研修のことを知りましたか(複数回答可)。

☐ 職場 (1. 上司から奨められた 2. 同僚から奨められた 3. 直接募集要項を受け取った
4. 募集要項が回覧・掲示されていた)

☐ JICA (1. JICA 筑波から直接 2. JICA ホームページ 3. JICA 国際協力推進員
4. JICA 広報誌: 誌名)

☐ 教育委員会 (名称:)

☐ 各種研修会 (名称:)

☐ その他 (具体的に:)

所属する学校長もしくは教頭の推薦の言葉を御記入ください。

(本欄は管理職に参加希望を認知いただいていることの確認のために記入いただいています。)

以上の理由により、上記のものを、独立行政法人国際協力機構主催の教師海外研修に参加することを推薦します。

学校名

職務

氏名

印

ジャイカ：JICA（Japan International Cooperation Agency）とは

独立行政法人国際協力機構は、開発途上国・地域等の経済及び社会の発展に寄与し、国際協力の促進に資することを目的として設立された独立行政法人です。主な事業として技術協力（研修員の受け入れ、専門家の派遣、開発調査等）、青年海外協力隊等のボランティア派遣、無償資金協力、有償資金協力、災害緊急援助等を実施しています。

＜JICA 筑波はこんなこともしています＞
～ 国際理解教育・開発教育支援プログラム ～

◆ 開発教育指導者研修 ◆

国際理解教育の概念・手法・実践事例・今後の課題とその解決方法などを学ぶ講座を実施しています。教師海外研修に参加される教員の皆様には、本研修への積極的な参加を期待します。

◆ JICA 国際協力出前講座（日本人講師） ◆

開発途上国のおかれている現状を知り、日本と開発途上国の関わりへの理解を深めることを目的として、JICA 職員や青年海外協力隊の OB・OG などを派遣します。

◆ JICA 国際協力出前講座（研修員の学校訪問） ◆

開発途上国のおかれている現状を知り、日本と開発途上国の関わりへの理解を深めることを目的として、技術研修のため開発途上国から来日している JICA 研修員を学校に派遣します。

* JICA 筑波では、アジア・アフリカ・中南米など 100 カ国以上の国々からの研修員を年間約 1,000 名受け入れています。

◆ JICA 筑波センター訪問 ◆

JICA 筑波の施設見学や JICA 筑波に関する講義・講演などを通じて、日本と世界のつながりに気づき、開発途上国に対する理解を深め、国際社会の問題の解決に向けて何らかの形で参加する態度や能力を養う機会を提供することを目的としています。

◆ 高校生国際協力実体験プログラム ◆

講義やワークショップなどを通じて、開発途上国の現状や国際協力の必要性について知り、国際協力に対する理解を深め、自分自身ができる国際協力について考える機会を提供することを目的としています。

◆ JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト ◆

JICA では毎年 5 月～9 月に全国の中学生・高校生を対象に、開発途上国のおかれた状況や日本との関係についての理解を深め、国際社会の中で日本は何をすべきか、また、自分たちひとりひとりがどのように行動すべきかについて考える機会を提供することを目的としてエッセイを募集しています。独立行政法人国際協力機構理事長賞、外務大臣奨励賞、文部科学大臣奨励賞、準特選等があり、入選者には賞状および副賞として、約 1 週間の海外研修旅行があります。

◆ パンフレット・ビデオなどの提供 ◆

JICA では国際協力や JICA の活動について紹介した各種パンフレットを準備していますので、ご請求ください。また、ビデオ・パネルの貸し出しも行っています。

◆ JICA インターネットホームページ ◆

エッセイコンテストや青年海外協力隊員などの各種募集情報、開発教育に関する情報、ニュースレターなど、JICA 発信の最新情報が見られるほか、開発途上国に関する情報のデータベースも利用できます。

※ JICA ホームページ <http://www.jica.go.jp/>

JICA 筑波ホームページ <http://www.jica.go.jp/tsukuba/index.html>

※ 国際協力に関する各種情報を掲載したメールマガジンの配信（無料）もおこなっています。

購読希望の方は、JICA ホームページにアクセスし、登録手続きをおこなってください。

資料 5 平成 21 年度 「開発教育指導者研修」参加者数実績

	教師海外研修参加者	教員				教員以外		合計
		小学校教諭	中学校教諭	高校教諭	特別支援学校教諭	大学生	その他	
第 1 回開発教育指導者研修 平成 21 年 6 月 27 日(土)	4						2	6
第 2 回開発教育指導者研修 平成 21 年 8 月 29 日(土)	4		1	2	1		2	10
第 3 回開発教育指導者研修 平成 22 年 2 月 6 日(土)	3	1		2	1	2	4	13
合 計	11	1	1	4	2	2	8	29